

噸)を増遣し既に東洋に向て航行中なりしなり故に之を合すれば露國の増遣艦隊は無慮十一萬三千噸に上るへし

#### 増派陸兵

露國は昨年六月二十九日西比利亞鐵道輸送試験の口實の下にチタに向ひ歩兵二旅團砲兵二大隊騎兵輜重兵各若干を送りたるを始めとし陸續軍隊を絶東に輸送し本年二月上旬迄には其兵數既に四萬餘に達し猶必要の場合には二十萬餘の兵士を増遣すへき計畫を爲し居たり

之れと同時に露國は旅順浦鹽兩軍港の砲壘増築に晝夜を分たす工事を急ぎ昨春遼陽其他要地にも砲壘を修築し義勇艦隊及西比利亞鐵道に依りて盛に兵器彈藥を絶東に輸送し十月中旬に於て既に野戰病院を積載せる十四軒の列車は大至急本國を出發せり知るへし露國は毫も妥協に意なく専ら武力を以て日本を屈從せしめんと企圖したるものなるを

露國の軍事的活動は本年一月下旬より二月に入りて益々急調に赴き一月廿一日には旅順大連より歩兵約二大隊砲兵若干を韓國北境に送り同く二十八日にはアレキシエフ總督は鴨綠江附近に在る露國軍隊に向つて作戰命令を下し二月一日には浦鹽軍港知事は本國政府の命令により何時にても戒嚴令を布き得るに至りたるを以て在留日本人にハバロフスクへ退去の準備を爲さしめんことを在留日日本貿易事務官に要求し旅順に於ける露國軍艦の有力なるものは修繕中に属する一軍艦を除くの外

盡く外海に出て其陸兵は遼陽より陸續鴨綠江方面へ向つて進發せり誰か露國に戰意なく又戰備なしと云ふものぞ日本は事態切迫し此上一日の猶豫を許さざるを以て遂に已むを得ず其無用に属する談判を断絶し自衛の爲めに必要の處置を取るに決せり故に戰爭を挑發したるの實は日本に在らずして却て専ら露國に在り

且夫れ日本は二月六日に於て露國と懸案の談判を絶了し露國の爲めに侵迫を葬むれる地歩を防護し且其利權を擁護する爲め自ら最良と思惟する獨立の行動を取るへきこと並に外交關係を断絶し公使館を撤退する旨を露國に通告せり獨立の行動は一切を意味す敵對行為の開始亦固より其内に在り假に露國に於て之を解すること能はざりしとするも日本は露國に代はりて解誤の責を任すへきの理由なきことは勿論なり將又宣戰公布は敵對行為開始の必要條件にあらざること國際法學者の悉く一致する處にして現に近時の戰爭に於ては宣戰公布は交戰開始後に於てするを其常とせり故に日本の行動は國際法上に於ても毫も非難すへき點あることなく況んや其非難の露國より來るに於ては寧ろ頗る奇と云はざるへからず何となれば宣戰の布告を爲さずして直に戰鬪行為を行ひたるは歴史上其例證極めて乏しからざるのみならず千八百八八年に於ては實に外交關係の断絶前に於てすらフィンラン

ドに出兵したればなり

### 三、露國か我が敵對行為を非難して列國に發したる通牒

二月二十二日露國外相ラースドルフは在外露國外交代表者に宛て大要左の電牒を發せり

日露兩國談判破裂以來日本政府の態度は文明諸國間相互の關係を律する各習慣法の公々然たる違犯を構成す今我露國政府は其違犯を一々名狀することを爲さすと雖も日本政府の敢てしたる韓國に關する暴戾の行爲に至りては之に關して各國最も慎重なる注意を促すの必要ありと考量す抑も韓國の獨立及其保全は各國の承認せる所にして此原義の犯す可らざるは千八百九十五年下關係約千九百二年日英協約及千九百二年三月十二日露佛宣言の確認せる所に係る韓國皇帝は日露兩國衝突の危険を豫想し本年一月嚴正中立守持の決心を宣言せる文書を各國に發送し各國は満足を表して之を接受し露國も亦之を承認せり而して在韓我公使の報告によれば英國政府は在韓同國公使に命し韓國皇帝に右宣言に對し謝意を表したる公書を奉呈せしめたりと云ふ然るに日本政府は右の事實を悉く藐視し各條約及其義務を蔑如し且國際法の原則に反戾して左記の行爲を敢てしたること今や正確にして十分に確認を経たる事實の之を歴證するあり

一、抗敵開始に先たち日本の軍隊は中立を宣言せる韓國に上陸せり

二、日本艦隊は本月八日即ち宣戰公布の三日前に於て中立港濟物浦に碇泊中にして而も其艦長は日本人か悪意を以て丁抹海底線經由我電報の配達を遮止し且韓國政府の電信交通を破棄せしか爲め國交破綻の通知を受くるに由なき境遇に在りたる我軍艦二隻に對して突然攻撃を加へたり

三、日本國政府は現行國際法に拘はらず抗敵開始に致らんとする刹那に於て我商船數隻を韓國中立港内に於て戰時捕獲船として捕收せり

四、日本國政府は京城駐劄同國公使を経て韓國皇帝に向ひ韓國は尙後日本國行政の下に置かるべしと宣言し且之に従はざる時は日本國軍隊は皇城を占領す可き旨同國皇帝に警告せり

五、日本國政府は在露佛國公使を経て在韓我公使に宛て我公使館員及領事館員を率ゐて撤退すべき旨を促したる書面を送附せり

我露國政府は前記各事實の甚しき國際法違反の罪を構成することを認定し日本國政府の行動に對し各國に抗議を提出するを其義務なりと思料し國交を保護する所の原則を重視する各國の我態度に合意すべきを確信して疑はず又之と同時に我政府は日本國が韓國に於て不法に權力を壟斷せんか爲め韓國政府より出すことある可き各命令國宣言を悉く効力なき者と宣言する旨を茲に豫告する事を必要なりと考量す

#### 四、右に對する帝國政府の辯妄

帝國政府は露國が列國に逕附したる日本の韓國に於ける國際法違反の非難に對し左の公文を列國に附れり

聞くか如きは露國政府は此頃一の公文を各國に致し日本政府を責むるに國際法違反に属する或種の行動を韓國に於て行ひたる事を以てし且將來韓國政府の命令並に宣言は其効を有せざるべき旨を聲

明したりと云ふ帝國政府は此機に於て露國政府の意見若くは聲明に對し敢て顧慮するの必要を見ず然れども事實の誤妄を看過するに於ては或は恐る中立國中か爲に誤解を生ずるに至るものあらんことを故に之に對し誣妄を辯ずるは帝國政府の權利にして又義務なりと信するを以て茲に露國か其公文に於て十分の證左あり且確實なる事實と聲言したる五點に關し左の言明を爲さんとす

一、日本軍隊か宣戰に先ち韓國に上陸したる事は帝國政府も亦之を認む然れども交戰の状態は既に現實に成立し居たるなり且夫れ韓國の中立及び領土保全の維持は今回戰爭の目的なり従て露國の侵迫せる地方に軍隊を派遣するは我權利と必要に屬す況んや此事たる韓國政府の明確なる同意を得たる所なるに於てをや日本軍隊か韓國に上陸したるは平和なる商議の進行中露國の大軍か清國の同意を経ずして滿洲に送派せられたるか如きと大に趣を異にし曲直の在る處極めて明瞭と云ふへし

二、帝國政府は露國公文第二點を以て全然無根の虛説なりと聲明するものなり帝國政府は丁抹海底電線に依て露國電信の公付を停止したることなく又韓國政府の電信を破壊したる事あるなし若夫れ二月八日我艦隊か仁川港にて二隻の露國軍艦に突然攻撃を加へたりとの非難に對しては交戰狀態當時已に成立したりし事及韓國は己に日本軍隊を仁川に上陸せしむるに同意したるか故に同港は少なくとも日露交戰國間の關係に於ては業に已に中立港なるの性質を有せざりし事を一言するを以て足れりとす

三、帝國政府は捕獲審査所を設立し之に授くるに商船捕獲の適法なるや否やに關し最終の決心を下すの全權を以てせり此故に露國公文第三點に關しては茲に何等の言明を爲すへき場合にあらす

四、帝國政府は露國公文第四點の所説は全然事實の根據なきものなる事を聲明す

五、帝國政府は露國公文第五點所説の不精確なる事を斷言す帝國政府は露國公使に對し韓國より退去せん事を直接にも又間接にも要求したる事なし二月十日駐韓佛國代理公使は我公使を來訪して告ぐるに露國公使は韓國退去を希望し居るを以てし之に關して我公使の意見を尋ねたるに付我公使は露公使にして其隨員並に公使館護衛兵を隨へ平和に撤退するに於ては日本軍隊を以て充分之を保護すへき旨を答へたり此趣其後日佛兩代表者の間に書翰を往復して互に確められたり斯くて露公使は二月十二日を以て任意に京城を撤退して而して我は仁川迄日本兵士の護衛を附したり

尙茲に附記すへきものあり釜山駐在露國領事は二月廿八日に至る迄尙其任地に止りたり同官の殘留如此久きに亘りたるは何等訓令に接せざる爲め不得已に出でたるものなりと云ふ惟ふに露公使は其出港に先ち必要の訓令を領事に與ふる事に思ひ至らざりしなるへし而して撤退の訓令遂に露領事に達し領事に於ても又可成速かに釜山を去らん事を希望せる事明かなるに及び釜山駐在帝國領事は露

領事の出發に關し有ゆる便宜を與へ結局領事の一行は我領事の斡旋に依り日本を経て上海に赴く事となれるものなり

### 第三節 浦鹽露艦北海の嚮行 (二月十一日)

機作隊發達通信各宛

十一日午前十時半露國軍艦を認むべき黒色の軍艦四隻(内二隻は四煙突、一隻は三煙突、一隻は二煙突を有す)西北より西南に向て進航せり、尙ほ外に運送船一隻を従へ居れり

(註)露艦四隻は「クローンキイ、ロシヤ、リネーリツク、シカツイリ」にして運送船は露國艦隊の假裝運洋艦「レナ」艦也

(二)

十一日夜十一時六分北海道長官内務大臣宛

露國軍艦白神崎邊に出沒の旨高嶺艦長より報告ありし旨函館區長より報告あり

(三)

十二日午前零時五十五分歩兵第五聯隊奥野發參謀總長宛

福島より當地(奥野)宿屋鹽屋宛私信電報は左の如し

小島沖にて奈古の浦丸露艦四隻に砲撃され全勝丸當地に來れり

(四)

十二日午前零時三十五分函館要務課參謀總長宛

只今松前郡福島村長より函館市長宛報告によれば全勝丸、奈古浦丸酒田より小樽に航行中午後二時(十一日也)青森縣森の日沖にて露國軍艦四隻に取巻かれ砲撃を受け奈古浦丸沈没す全勝丸午後八時卅五分福島に入港せり露國軍艦尙ほ沖合にあり

(五)

同午前三時十六分北海道長官發外務省宛

全勝丸船長の電報によれば昨日(十一日)午後二時陸奥國十三海軍里沖合に於て奈古浦丸は露艦五隻に包圍攻撃を受け沈没し全勝丸も砲撃を受け漸く逃れて渡島國福山に到着せり敵艦四隻、運送船一隻は津輕海峽西の口に滞留し居る模様なり

### 第四節 第二次旅順攻撃 (二月十四日)

十六日午後十時大本營東京總聯合總隊司令長官發

二月十三日驅逐艦の二隊大風雪を冒して旅順口に向ふ途上各艦見失ひて相分離せしも司令艇遠鳥及び朝霧のみ旅順口外に達し、朝霧は十四日午前三時港口を偵察し盛んに陸岸砲臺及び哨艇の砲火を被むりしに拘らず黒煙を揚げ居る一軍艦に對し水雷を發射し且つ敵の哨艇を砲撃して無事歸來せり遠鳥は同日(十四日)午前五時旅順口外に達し港口に接近し敵の二艦を暗中に發見すると同時に其の砲火を受けたるも直ちに其の一艦に對し水雷を發射し其の爆發を確認して無事歸來せり

速鳥朝霧の勇敢なる襲撃の効果は暗夜のため之を知るに由なしと雖も少くも敵をして益す戦慄せしむるの大功ありたるは疑ひ無しと認む

(備考)本驅逐隊司令は海軍中佐長井群吉、速鳥艦長は海軍少佐竹内次郎にして朝霧艦長は海軍少佐石川壽次郎なり

(註)参加驅逐隊司令は下の人々なり 中佐石田一郎○同長井群吉○同武野岩次郎○司令兼艦長中佐矢島純吉○同少佐橋井吉丸

長井司令に勅語下る

第四驅逐隊暗ニ乗シ敵ヲ目シ敵艦ヲ旅順ニ襲撃シテ奇効ヲ奏セリト聞ク 朕太々其勇敢ヲ嘉ス

長井司令の奉答

第四驅逐隊旅順襲撃に對し優渥なる 勅語を賜り臣等感激に堪へず益す奮勵 誓言に願ひんことを期す臣等皆感て奉答す

第五節 第一回旅順口閉塞 (二月廿四日、廿五日)

第三次旅順攻撃

二十六日午後八時五分大本營上村第二驅逐隊司令官報告

我艦隊は總て豫定の通り行動し二月二十三日夕旅順方面に近づき旅順港口閉塞の任務を有する特別運送船隊並に其乗員收容の任務を有する水雷艇隊を放つ翌二十四日午前十時豫定集合點にて各驅逐隊水雷艇隊に會す港口閉塞の状況は報國丸は港口左側燈臺下に武州丸は其外方に至り各自から破壊沈没、天津丸武陽丸は老嶺山の東に至り自ら破壊沈没仁川丸も亦同様自ら沈没以上五隻の乗員は總

て收容し得て無事なり我驅逐隊水雷艇隊も總て無事にして港外に「バーヤン」「ノーウキック」及敵の驅逐艦四五隻あるの報告を得たるを以て同夜我驅逐隊水雷艇隊を分つて旅順口大連灣及び鳩灣の偵察襲撃を命せらる

艦隊は迂路を航し二十五日午前七時豫定集合點にて各驅逐隊水雷艇隊に會合せしもまた其戦況を詳かにするを得ざりし其れより本隊は旅順口に向ひしに港外左方に當り「バーヤン」「アスコルト」「ノーウキック」の三隻徘徊し居れるも遠く出て砲臺下陸岸通へ東西するを見午前十一時四十五分より敵艦及び陸上砲臺に向ひ遠距離砲撃を始む敵艦及び陸上砲臺應戦せしも正午過五分「ノーウキック」先づ港内に逃れ「アスコルト」「バーヤン」續いて港内に逃走せり此分にては港内閉塞は其効果少なかりしか如く甚た遺憾に堪へず是に於て各艦巨砲を以て港内に向て砲撃を行ひ盛んに火焰の揚るを見る砲撃十五分の後之を止め引上げたり此砲戦にて多少敵に損害を與へ且つ港内を威嚇し得たりと信す此間我巡洋艦隊は老嶺山附近にて西方より來れる敵の驅逐艦二隻を認め其一を逸せしも他の一隻は之を鳩灣に追窮し終に之を撃破せり

我艦隊總て一の損害死傷なし東郷聯合艦隊司令長官は猶ほ前進地にあり以上は同長官より報告あるへさも本官より不取敢報告す

同 詳報

聯合艦隊は去る二十日より豫定の行動を開始し途上天候不良の爲め行動を一日延したる後二十二日より旅順口方面に進發し驅逐隊は二十四日午前二時頃旅順口港外を搜索してアムールの如き敵の一軍艦を襲撃せしも其結果は明ならず又同日午前三時三十分我忠勇なる旅順口閉塞隊は敵の強力なる四ヶ所の探海電燈を猛烈なる砲火を冒し旅順口に猛進せしか天津丸は敵の探海電燈の爲めに少しく針路を誤まり老鐵山の東海岸に坐礁し武陽丸は其外方約四百米突に自ら破壊沈没し報國丸は進んで港口燈臺下に達して船首を約北々西にして自ら坐礁し一隻(武州丸ならんか)は其南東微東二鐘半のところに是れ亦自ら破壊沈没したり又他の一隻は(仁川丸ならんか)饅頭山下の海岸に坐礁せらるるものゝ如し又勇敢なる我水雷艇隊は翌朝遼港外に在り敵の砲火を冒して閉塞隊の收容に従事し前記沈没船五隻にありし勇士を悉く收容し得たり旅順口閉塞隊及水雷艇隊の此勇敢なる行爲は能く帝國軍人の忠勇義烈を明表せるものにして港口閉塞の目的は不幸にして完全に達す能はざりしと雖も其形の効力著大なるものありと信す閉塞隊員中報國丸の下士以下三名敵弾の爲に輕傷を被りしも其他は皆無事なり各水雷艇及驅逐隊にも一の損傷なし

我艦隊は二十四日午前十時旅順口沖に達し巡洋艦隊は直ちに港外を偵察して會ま敵の旗艦「ノウキツク」及驅逐艦五隻か老鐵山の方より港内に入らんとするを發見し之を砲撃せり

二十四日我驅逐隊は三部に分れ其第一隊は鳩灣を第二隊は大連灣を搜索したるも敵を發見する能はざりし又第三隊は旅順口港外にて敵の砲火の下に一回襲撃を試みたるも其効果は詳ならず

二十五日午前九時我艦隊は旅順口外に至り敵艦「バーヤン」「アヌコルト」「ノーウキツク」の三艦港外に在るを見港内の間接射撃を兼ねて遠距離より敵の三艦を砲撃せり敵は要塞と協力して約三十分間應戦せしか須臾にして盡く港内に入れり依て我艦隊は砲撃を止め港外を去れり此砲戦は距離稍遠かりしを以て其敵艦に對する効果は大ならずし者と認む我艦隊又一の損害死傷なし敵の運動に依り察するに彼は専ら我を要塞の十字砲火と水雷敷設面に誘致せんとする者の如し

主力艦隊の砲戦中我巡洋艦隊は港口の南方に於て敵を監視したるに老鐵山の南方より敵の驅逐艦二隻港口に入らんとするを發見し直に之を砲撃せしか其一隻は旅順口内に逃去りしも他の一隻を鳩灣迄追撃して終に之を撃破せり此驅逐艦は四本煙突のものにして鳩灣の北方に擱岸して我砲火の爲めに破壊せられたり

我巡洋艦隊の諸艦には別に損傷なし

(註)閉塞隊の先驅として偵察の敵艦に當り並に港外の敵艦を搜索破壊の任に當りしは眞野中佐の率ふる驅逐艦三隻、夕霧、不知

火、國旗の四艦にして特別運送船に附隨し其乘員收容の任に當りしは櫻井少佐の率ふる水雷艇三隻、鷗、眞鶴、千鳥、熊の五艦也

第一次閉塞隊將士

▲天津丸乗組 海軍中佐有馬良橘○大機關士山賀代三○上等兵曾土信音藏○二等兵曾内田格之助○

一等機關兵曹大野喜一郎〇二等兵曹林紋平〇二等兵曹加藤英義〇一等機關兵田中三九郎〇三等兵曹寺岡虎市〇一等機關兵萬木治郎松〇一等機關兵田中豊太郎〇全上飯田良吉〇全上坂口力松〇全上高橋連次〇全上深山長作〇全上牟呂梅一〇三等機關兵谷田志摩生〇三等機關兵青木勘助 計十八人

▲報國丸乗組 海軍少佐廣瀬武夫〇大機關士栗田富太郎〇一等兵曹大沼今朝次郎〇二等兵曹角久間千幾藏〇二等機關兵曹大山鐵三郎〇二等機關兵曹塚本助市〇一等機關兵三富由太郎〇一等機關兵竹澤彌七〇全上高井清〇全上日高金左衛門〇全上藤本金太郎〇二等機關兵武野敬二〇全上佐野七郎〇全上城戸隆〇三等機關兵石井銀次郎〇三等機關兵盛田隆義 計十六人

▲仁川丸乗組 海軍大尉齊藤七五郎〇大機關士南澤安雄〇一等兵曹山田仲次郎〇二等機關兵曹増田平馬〇一等機關兵土屋勝次郎〇一等機關兵青木五郎〇全上其原六郎〇全上林政吉〇二等水兵安保助藏〇二等機關兵榎原健三〇二等機關兵伊豆音松〇全上三島健六〇全上宇野虎三〇全上三村千馬〇三等機關兵藍原善七 計十五人

▲武陽丸乗組 海軍大尉正木義太〇中機關士大石親徳〇一等兵曹米良正藏〇三等機關兵曹榎原龜吉〇三等機關兵曹田尻藤八〇一等水兵新上卯太郎〇一等機關兵樋口吉次郎〇全上高橋勝衛〇全上田尻利平〇二等機關兵吉田己之次郎〇二等機關兵中田敬一郎〇全上篠宮大夫〇全上濱六松 計十三人

▲武州丸乗組 海軍中尉島崎保三〇少機關士杉政人〇一等兵曹中川作太郎〇二等機關兵曹米田賢一〇三等兵曹赤松虎太郎〇三等機關兵曹木下志米吉〇一等機關兵上野岩次郎〇一等機關兵玉井虎之助〇全上松元豊吉〇全上加木至徳〇全上長井右吉〇全上丹山金藏〇全上莊喜蔵〇全上栗田録太郎〇四等機關兵橋本圭二郎 計十五人

### 閉塞隊の報告

二十七日東京電 仁川丸閉塞隊海軍大尉報告

旅順口閉塞船五隻は二十四日午前四時頃老鐵山の南方より旅順口に向て航進せしに先頭船天津丸は其針路左方に偏向し過ぎたるもの、如く港口より南西約三海里なる陸岸近くに於て撃破せられ自ら淺瀬に乗揚げたるか如し是に於て後續の諸船は北東に針路を變し前進したるに敵の探海電燈燈々として我が航進を妨げ又猛烈なる敵の砲撃を被り武州丸先づ其舵機を撃たれ運輸の自由を失ひ天津丸を距ること遠からざる處に座洲し自ら破壊沈没す次て武陽丸亦敵弾のため被害少なからず後に港口に達せずして沈没せり此間に報國丸、仁川丸の二隻は猛進して辛ふして港口に達し報國丸は座洲敵艦「レトウキザン」の外方に於て又仁川丸は其東方に於て各自爆發薬に點火して破壊を圖り乗員一同祝聲を揚げ船の沈没せんとするを認めて端舟に移乘れり  
端舟に移乘るや直に味方の水雷艇に漕ぎ付けんとしたるも敵の探海電燈は遠慮なく我前途を照し敵の砲火愈々激烈なりければ已を得ず迂回漕行して終に味方の水雷艇に接近すること能はざりし然るに日出時に至て風波加はりたるを以て少なからざる困難を嘗め同日午後三時頃に至り漸く我艦隊と會合することを得たり

### 閉塞の結果

第一等 閉塞開始

二七〇

旅順口閉塞の結果に就て屢に其概要を報告したる處其後閉塞隊指揮官有馬良橋よりの報告に依れば  
 武州丸は敵弾の爲め舵を破壊せられ鰻頭山下に擱岸し廣瀬武夫の指揮せる報國丸は殆んど港口に達  
 したるとき其側に坐礁せる「レトウキザン」より猛烈なる射撃を蒙り同しく舵機を破壊せられ且船首  
 に火災を起し遂に燈臺下に擱岸沈没せり又齊藤七五郎の指揮せる仁川丸も港口に入らんとするとき  
 燈臺より南東約二鏈半の位置にて沈船と思はるゝものに抵觸し進行する能はずして其位置に爆發沈  
 没したるものなり右報國丸仁川丸の二隻は完全に港口を閉塞せるも目的の一部は達し得たるものな  
 り仁川丸の閉塞隊員中二等機關兵榎原健三は沈没後端艇を御さんとする際敵弾の爲め戦死せり其他  
 報國丸の下士卒三名負傷したる外閉塞隊員は皆無事に我水雷艇隊に收容されたり勇敢なる閉塞隊員  
 並に之れか收容に従事したる水雷艇隊等か天明に至る迄長時間敵の砲火を蒙りたるに拘らず斯の如  
 く些少の死傷を以て生還したるは真に奇異の現象にして一に  
 大元帥陛下御威徳の擁護に因るものと謂ふの外なし  
 右前報告に洩れたるを以て更に報告す

勅語東郷司令長官に下る

聯合艦隊の旅順港口閉塞セントレナル壯烈ナ闘ヲ 陰深ク其事ニ興カレン時校下士卒ノ忠烈ヲ嘉ス

東郷司令長官の奉答

旅順閉塞の舉に對し優渥なる 勅語を賜はり臣等恐惶に堪へず此舉完全に其功を奏せざりしは深く臣等の遺憾とする處なれども  
 此舉に従事したる將卒か殆んど無事生還したるに至りては只た 陛下御威徳の擁護に依るものと一同感激せざるものなし  
 右隨て奏す

第六節 日韓議定書

明治二十七年二月二十三日調印を終りたる日韓議定書の全文は下の如し

議 定 書

大日本帝國皇帝陛下の特命全權公使林權助及大韓帝國皇帝陛下の外部大臣臨時署理陸軍參將李址鎔  
 は各相當の委任を受け左の條款を協定す

第一條 日韓兩帝國間に恆久不易の親交を保持し東洋の平和を確立する爲め大韓帝國政府は大日本  
 帝國政府を確信し施政の改善に關し其忠告を容るゝこと

第二條 大日本帝國政府は大韓帝國の皇室を確實なる親誼を以て安全康寧ならしむること

第三條 大日本帝國政府は大韓帝國の獨立及領土保全を確實に保障すること

第四條 第三國の侵害に依り若くは内亂の爲め大韓帝國の皇室の安寧或は領土の保全に危險ある場  
 合は大日本帝國政府は速に臨機必要の措置を取るへし而して大韓帝國政府は右大日本帝國政府の行  
 動を容易ならしむるため十分便宜を興ふること



大日本帝國政府は前項の目的を達する爲め軍路上必要の地點を臨機收用することを得ること

第五條 兩國政府は相互の承認を経ずして後來本協約の主意に違反すべき協約を第三國との間に訂立することを得ざること

第六條 本協約に關聯する委悉の細條は大日本帝國代表者と大韓帝國外部大臣との間に臨機協定するべし

明治三十七年二月二十三日

日本帝國特命全權公使 林 權助

光武八年二月二十八日

韓國外部大臣臨時署理陸軍參將 李 址鎔

## 第二章 陸兵第一回衝突

(明治三十七年二月二十八日)

(七星門外の小戦)

廿八日午前九時敵の騎兵約四五十平壤の北方層壁より七百メートルに現はれ我が射撃を受けて退却せりとの公報陸軍省に達したり

### 同 詳 報

二月二十七日露國の斥候騎兵約四十餘順安に合營し先發斥候四十餘騎は同しく平壤を去る二里の所に現はれたりとの情報ありたれば我軍隊は一層城内の防備を嚴にすると共に一時集合を解きたる平壤義勇隊も直ちに非常召集を行ひ我軍隊と同一の任務に従事し晝夜警戒甚嚴なりしか二十八日早曉我斥候騎兵城を出て敵を搜索したるに義州街道に於て二十餘騎を發見し歸途敵の追ふ所となる敵進んで七星門の前方に來るや我が七星門の歩哨は騎兵を援護せん爲め一齊射撃を爲すや敵は銃聲を聞くと共に砲火を交わす直に馬首を回らして後方に退却したり此時義勇隊員も戦線に在りき時正に午前九時其後敵は我兵力に恐れしにや順安を去りて安州に退去したるものゝ如し平壤城内の韓人は九分通り避難し居たりしか我軍隊の到着と共に大に安堵し婦女子の歸來する者多く勇義隊も亦二十九日を以て全く解散したり

### 第一節 浦鹽の砲撃 (三月六日)

十日午前二時半著上村第二艦隊司令官報告

豫定の如く六日朝結氷せる海を航し浦鹽斯德東口に達せり敵艦軍港外に見えずパサルギン岬半島及ボスフオール海峡砲臺の射界を避けたる位置より北東陸岸砲臺下に接近し午後一時五十分より約四十分間間接射撃を以て港内に向ひ威嚇砲撃せし後引上げたり此砲撃は相應の効果ありしと信ず陸上砲臺には陸兵を見しも更に應戦せず午後五時頃東口方向に當り黒煙の揚るを見る或は敵船の出で來

りしか如くなりしも煙は次第に消滅し判明ならず七日朝、亞米利加灣スツンロック灣を偵察せしも異常なし正午再び浦羅斯德東口に迫りたるも敵艦見えず砲臺發砲せず夫れより轉してボシエット灣を偵察せしも敵なし右報告す

### 第二節 陸兵第二回衝突 (三月八日)

三月八日丸尾中尉は三騎を引て偵察の爲め北に向ひしに忽ち敵の三十騎と會へり勇悍なる吾兵は上下僅かに四騎の少数をもて約八倍の敵中に馳突せしに彼の長刀を帯ひて自ら任するコサフク兵狼狽して馬首をめぐらし退き去るを只管追ひに追ひて博川を涉りしも深く重地に入るを慮つて追ひ捨てて歸り來り舊津を返し來らんを思ふて背進せしに亂發せる敵彈の爲めに横さまに撃ちかけられしかば尙さきの三十騎の返し來らんを思ふて背進せしに亂發せる敵彈の爲めに一等卒田所清熊馬を射倒されしか頓てよりかへりし時は徒歩にて軍刀を抜ひつゝ多數の敵と接戦せるを見しも勝敗の數明らかなるを以て已なく安州に引上げしか韓人の多くか云ふ所によれば其の後亂刀の下を切り抜けて一民家に屠腹して死し居たりと云ふ是れを第二の衝突となす

### 第三節 第四次旅順攻撃 (三月十日)

(大激戦、大接戦)

十二日午後八時十分東京警東聯聯合艦隊司令長官報告

聯合艦隊は豫定の如く行動して更に昨日旅順口の敵を攻撃せり

驅逐隊の二隊は同日午前零時旅順港口外に達し港外を搜索して敵なきを認め天明迄港外に留りて乙驅逐隊は各所に特種の機械水雷を沈置せしか敵の要塞は之に對し時々砲撃したるも我驅逐隊は無事其の目的を達するを得たり然るに午前四時三十分頃甲驅逐隊は老鐵山の南方に於て約六隻より成る敵の驅逐隊に會し近距離に於て約三十分間激戦し朝潮、霞、曉の三艦は敵の諸艦と殆ど舷々相摩せんとするか如く接戦し敵の三四艦に猛烈なる砲火を加へたるを以て敵は或は汽罐を破損し或は火災を起し或は悲鳴を揚げ多大の損害を負ふて敗走せり、我が三艦も亦敵彈の爲め多少の損害を被り、死傷十五名内戦死下士卒七名、負傷敵の大機關士南澤安雄の外下士卒七名ありたり、就中曉は汽罐の補助汽管を破壊せられ一時漏洩したるが故に機關兵四名熱傷に依り戦死せり但し各艦共に戦闘航海に支障あらず又乙驅逐隊は午前七時港外を去らんとする際偶々洋中より旅順口に入らんとする敵の驅逐艦二隻を發見して直ちに其の前路を遮りて之を攻撃し戦闘約一時間、多大の損害を加へたる後其の一隻を逸したるも他の一隻「ステレグーシチー」號を撃破し敵の要塞砲火の下に於て漣は之を捕獲し、曳船しつゝありしも、漏水甚たしく且つ波浪高く曳綱切断せしを以て捕虜兵四名を收容して捕獲敵艦を放棄せり其の後午前十時十五分に至り右の「ステレグーシチー」號は全く沈没せり、此の戦闘に於て乙驅逐隊の諸艦にも損傷ありしも多大ならず、漣、曙の二艦の戦死卒二名、負傷曙の少尉

島祐吉下士卒三名ありたり

之より先き敵艦「ノーウキック」及び「バーヤン」は港外に出て來りて我が乙驅逐隊に向ひ進航し來りしか我が巡洋艦隊の港外に接近するを見て港内に退却せり

我が主力艦隊及び巡洋艦隊は同日午前八時旅順口沖に達し、巡洋艦隊は直ちに港口正面に進み我が驅逐隊を掩護し、次て主力艦隊も亦老鐵山附近に至り、午前十時より午後一時四十分迄連續港口に對し間接射撃を行へり、巡洋艦の一隊が港口正面より看的報告する所に依れば、其の彈着は概して良好にして其の効果少からざりしものゝ如し、我が砲撃中敵の要塞も時々應戦したるも、我が艦隊の諸艦一の損傷もなかりし

又巡洋艦の他の一隊は大連灣外に至り港口三島山に於ける敵の建設物を砲撃破壊せり

又高砂、千早は特に旅順口半島の西岸を索敵せしも敵を見ず、前回の攻撃に於て我が巡洋艦隊に擊破せられ鳩灣に擱岸したる敵の驅逐隊は「ウエシーテリヌイ」にして今や檣及び煙突の上部を水面上に現はして沈没し居れり

我が各部隊は午後二時戦闘を止め、一旦豫定地點に集合したる後引上げたり(本報告は三月十一日認む)

(註)三月十日旅順攻撃の司令と編長次の如し

驅逐艦隊中司令大佐淺井正次郎○同乙部司令中佐土屋光金○砲隊長大尉末次直次郎○砲隊長少佐大島正設○初潮艦長岡松水光求○運糧長近藤常松○醫隊長岡九津雅雄

### 敵兵の捕虜

(我が驅逐艦の功績)

十四日午前三時十五分東京著東郷聯合艦隊司令長官報告

去る十日旅順口攻撃に就き其後驅逐隊司令の報告に據れば、「ステレングーシチー」及び其附近海中より救助收容したる捕虜は水雷工一名機關兵三名にして内二名は負傷し居れり、同艦には戦死者の外他に殘員を認めず、其の他は捕獲の前水中に飛入たるものゝ如く、尙ほ敵の溺者を認めしを以て之を救助せんとせしも敵要塞の砲撃を止めざると「ノーウキック」の近接するを見て之を遺棄したり、捕虜負傷者は其大艦に收容して治療を加へたる所其經過好良にして何れも安堵し居れり

勅語東郷司令長官に下る

聯合艦隊へ旅順口ノ敵ヲ攻撃シテ三第一驅逐隊第三驅逐隊へ敵ヲ目シ敵ノ要害砲火ノ下ニ優勢ナル驅逐隊ト戦ヒ奇功ヲ奏セリ  
朕深ク將校下士卒ノ武勇ヲ嘉賞ス

東郷司令長官の奉答

三月十日旅順口の攻撃に對し優渥なる

勅語を賜はり臣等感激に不堪今や黃海の寒氣大に減し我が艦隊に利する所多し臣等愈々奮闘有終の戦果を収めん事を願ふ  
右隨て奏す

### 第四節 第五次旅順攻撃 (三月二十二日)

二十四日午後六時五十分東京著東郷聯合艦隊司令長官報告

第二章 陸兵部 四衝隊

聯合艦隊は豫定の如く行動し兩驅逐隊は廿一日夜より廿二日未明まで旅順港口外に在りて與へたる任務を遂行せり此間多少敵の砲火を蒙りしも別に損傷なし又本隊及び巡洋艦隊は二十二日午前八時旅順口沖に達し其一部を鳩灣の方向に遣はし富士、八島をして港内に對し間接射撃を行はしめたり此砲撃中敵艦は漸次に港外に出て來り午後二時過間接射撃を止むるの頃其數戰艦五隻、巡洋艦四隻、驅逐艦十隻となれり敵は始終砲臺下に運動し我を誘致せんとするものと認めたり又敵艦よりも間接射撃を爲したるものゝ如く特に富士の附近に着弾多かりしか一の損傷なし我各部隊は午後三時迄に港を去り引上たり

第五節 浦鹽露艦再度の發行 (三月二十六日)

十九日午後九時芝罘海軍省電

當地沿岸航海の小蒸氣船繁榮九二十六日午前七時半廟島列島大駱島附近を航海中露國艦隊に追捕せられ日本人十名支那人七名敵艦に捕はれ船長外水夫二名シヤンクにて遁れ寧海州を経て只今當地に歸れり露國艦隊は驅逐艦を率ひ該船を盤沈の末旅順口へ向は引揚げたり

(註)繁榮丸は大阪村上百十郎の所有にて千八百六十二年英國にて製造し噸數七五の小蒸氣なり

第六節 第二回港口閉塞、第六次旅順攻撃 (三月二十七日)

(廣瀬中佐の戦死)

聯合艦隊は去二十六日再び旅順口に向ひ同二十七日午前三時卅分敵港閉塞を執行せり四隻の閉塞隊は驅逐隊及び水雷艇隊掩護の下に旅順口港外に達し敵の探海燈の照射を冒して港口に直進し約二海里に達する頃敵の發見する所となり兩岸の要塞及び哨艇より猛烈なる砲火を受けしも之に屈せず四艦相次で港口水道に闖入し第一の千代丸は黄金山の西側に於て海岸より約半鏈の處に投錨爆沈し第二の福井丸は千代丸の左側を過ぎて少しく前方に進み投錨せんとする時敵驅逐艦よりの魚形水雷一發命中し次て其位地に群發沈没し第三の彌彦丸も福井丸の左側に出て投錨爆沈せり第四の米山丸は稍後れて港口に達し敵の一驅逐艦の艦尾を衝突し乍ら既に沈没せる千代丸と福井丸との間を通過し水道の中央に投錨せし時敵の魚形水雷一發を受け爆發し惰力の爲め左岸に近く船首を左にして横に沈没せり敵の猛烈なる砲火の下に於て斯の如く閉塞船の勇敢沈着其任務を遂行したるは事業として間然する所なく誠に賞讃するに餘りあり唯遺憾なるは彌彦丸と米山丸との間に尙空隙を存し完全に通路を閉塞するを得ざりし一事なりとす此壯烈なる閉塞の再擧は前回之に従事したる勇士の切願を容れ將校及び機關士は主として前回の者をして之に任せしめ下士以下のみは新志願者を以て交代せしめたり

閉塞隊員中戦死者中佐廣瀬武夫、兵曹長杉野孫七外下士卒二名、重傷中尉島田初殿、輕傷大尉正木

襲木、大機關士栗田富太郎外下士卒六名にして其他は悉く無事我水雷艇隊驅逐隊に收容されたり戦死者中福井丸の廣瀬中佐及び杉野兵曹長の最期は頗る壯烈にして同船の投錨せんとするや杉野兵曹長は爆發薬に点火する爲め船艙に下りし時敵の魚形水雷命中したるを以て遂に戦死せるもの、如く廣瀬中佐は乗組員を端舟に乘移らしめ杉野兵曹長見當らざる爲め自ら三たひ船内を搜索したるも船體次第に沈没海水上甲板に達せるを以て止むを得ず端舟に下り本船を離れ敵彈の下を退却せる際一巨彈中佐の頭部を撃ち中佐の體は一片の肉塊を艇内に殘して海中に墜落したるものなり中佐は平時に在ても常に軍人の龜鑑たるのみならず其最後に於ては萬世不滅の好鑑を殘せるものと謂つべし閉塞隊員の掩護收容に就ては直接其任に當りし水雷艇隊最も其力を盡し天明過ぐる迄敵の砲火に曝露して其任務を遂行せり就中蒼鷹、燕の二艇は閉塞船隊を護衛して港口より約一海里に達し敵の驅逐艦一隻と會戦し多大の損害を加へ敵は汽鐘を破裂されたるもの、如く盛に蒸氣を吹かしつゝ退却せり閉塞隊の端舟は港外に退却する時目撃する所によれば敵艦と認むべきもの黄金山下に於て全く進退自由を失ひたるもの、如くなりしと云ふ

我水雷艇隊驅逐隊は天明過ぐる迄熾なる敵の砲火を蒙りしに拘はらず寸毫も損傷なし閉塞隊員の收容は千代丸及び彌彦丸の乗員は燕に米山丸乗員は端舟三隻に分乗して鶴、雁に收容され福井丸の乗員は龍に收容された

(備考)閉塞隊を掩護したる驅逐隊及び水雷艇隊は左の如し

▲驅逐隊 白雲、霞、朝潮、曉、雷、曙、龍、電、海雲、漣、東雲

▲水雷艇隊 雁、蒼鷹、鶴、燕、真鶴

▲第二次閉塞隊將士 千代丸指揮官海軍中佐有馬良橋△初瀬大機關士山賀代三△三笠二等兵曹林紋平△警手一等兵曹下田代納助△淺間全三上勳次郎△三笠一等機關兵曹佐藤末吉△初瀬全藤山新吉△全三等機關兵曹久永市之助△三笠一等機關兵阿部惣次△警手全與村又次郎△千歳全川瀬信三郎△警手二等機關兵有馬精一△千歳全折戸直二郎△三笠全山岡惣一郎△新高全白井興作△對馬全神谷榮三郎△千早全石井銀藏 福井丸指揮官海軍中佐廣瀬武夫△敷島大機關士栗田富太郎△朝日兵曹長杉野孫七△敷島一等兵曹飯坂禮仲之進△朝日二等信號兵曹菅波政治△吾妻一等水兵平野一郎△敷島二等機關兵曹松下軍吉△朝日三等機關兵曹平野松三郎△全一等機關兵坂井主計△敷島全中條政惟△吾妻全石井左市△八雲全小林吉太郎△全二等機關兵塚本達郎△吾妻二等機關兵沓澤皆藏△高千穂全小池幸三郎△朝日全山本半三△敷島全楠鐵藏△龍田全井島小治郎 米山丸指揮官海軍大尉正木美太△中尉島田初藏△高砂二等兵曹鹽谷巳之資△常磐二等信號兵曹二名郷一△富士三等兵曹赤松虎太郎△常磐二等機關兵曹鈴木太郎右衛門△富士全土屋五郎吉△全一等機關兵河野幸次郎△常磐全溝淵平太郎△全全温品逸三△笠置全後藤茂美△高砂全福島熊喜△富士二等機關兵中村儀三郎△浪速全羽賀力藏△笠置全林豊三 彌彦丸指揮官海軍中尉森初次△浪速大機關士小川英雄△八島一等兵曹村上卯吉△初瀬一等水兵徳田宗一郎△出雲二等水兵杉本三藏△初瀬三等機關兵曹國師熊太郎△八島全伊藤三次△初瀬一等機關兵小出由太郎△出雲全本下初藏△淺間全小西吉△八島全瀨崎榮三△全二等機關兵富田六治郎△出雲全古賀繁雄△淺間全平松與太郎△吉野全近

初語東郷司令長官に下る

聯合艦隊の再度定州南門外に駐屯せしむるに任ずるに、敵情々々等ニ與カリテ將校下士等ノ忠實ヲ嘉ム

東郷司令長官の奉答

第二次定州南門外に駐屯せしむるに、敵情々々等ニ與カリテ將校下士等ノ忠實ヲ嘉ム。第二旅團口頭書の内容に照し照源なる。勅語を賜はり臣等の感激に堪へざるのみならず之に戦死せる將卒の忠魂も亦く戦場に止りて息軍を庇護すへきを死ゆ臣等皆皆其旨に副ひ奉らんことを期す右語て發す

第七節 定州占領 (三月二十八日)

三月二十八日午前十一時十五分定州南門外に於て我騎兵將校斥候敵に遭遇し該隊及歩兵の一部は之を收容し結局此敵を擊退して定州を占領し、墜下の萬歳を唱へ士氣極めて旺盛なり。

將校斥候は定州南門附近に在る敵の射撃を受けて之を北方に避け騎兵の主力之を收容する爲め全力を盡して射撃す、午後一時十五分我歩兵は急行して定州の東北約二千メートルの北に來りて射撃するや敵は義州街道、郭山街道に退却す我歩騎兵の一部は之を追撃す敵の兵力は約六百なり此戦闘に於て受けたる我損害は左の如し

- ▲戦死者 中尉加納忠男△特務曹長清末廣吉 下士以下三名
- ▲負傷者 大尉黒川敬藏△中尉幸村銀六 下士以下十名
- ▲歩兵隊には一の死傷なし馬匹一、傷七

戦場に遺棄せし敵の死者二名(一名下士)なるも土人の言によれば城内に在りし死者のみにて七八名ありしと

敵は巧に馬背及擔架に依りて死傷者を運搬し去れり、現に將校らしき者二名の斃れたるを擔架に依りて危険を冒しつゝ運ひ去るを見たり此他血染の繃帯處々に散在しあるを見れば敵は少くも我と同等の損害を受たるならん

定州占領後報

廿九日午後十一時大本營に達したる公報

近衛騎兵隊か一昨日(廿八日)戦闘せし敵はパウロフ大佐の率ゆる後貝加爾哥薩克チンスキー第一聯隊にして義州までの遞哨はアルグンスキー聯隊第一及第五中隊なりしこと確實なり該第一聯隊は職員現在八百九十八人、非職員五十五、輜重車五十一なり又た嘉山附近にてチ、ンスキー聯隊の肩章ある軍裝一、防寒外套裝具等を獲たり

第三章 龍巖浦の海陸挾撃 (四月十日)

十三日午後十一時大本營公報

龍巖浦にありし上原騎兵中尉の報によれば、十日午後三時露兵九名變裝して龍巖浦の西南千五百

トールの海岸に上陸を企てたるを以て山口海軍中尉と協力し、陸より騎兵二分隊にて捕獲を努め、海軍は海より船にて敵の退路を絶たんとせしも、彼は早く退却を始めたる故之を射撃せり、此時前而中州に敵兵二三十名上陸しありて之を收容せり  
敵は二三の死傷ありし者の如し我兵皆無事

此の他敵は變装して義州龍巖浦間にて切りに渡河を企てしも皆之を撃退せり

十二日朝敵の歩兵約三四十名、鴨綠第一江を義州の西にて渡河せしを以て我か歩兵一小隊は之を射撃せしに敵は士官一、兵卒二十一の死體を捨て、退却せり、此の敵は狙撃歩兵第十二聯隊なり、我が兵死傷なし

### 第一節 綠鴨江邊の偵察 (四月十日)

十三日大本營海軍部公設細谷司令官の報告

本職の命に依り海門艦長は鴨綠江偵察の爲め海軍中尉山口毅一に下士卒五名を附し、朝鮮漁船に乗せしめ目的地に差遣せしに、一行は十一日無事歸艦せり

十日午後二時中尉の一行は敵兵七名右岸より支那漁舟に乘し斗流浦に來るを發見し、左岸に到着しある我が騎兵斥候と水陸共力して之を射撃す、少時にして敵兵十數名大漁舟にて乗り加はり、應戦しつゝ退却す、中尉は之を右岸まで追撃す、敵は上陸逃走せり、交戦一時十分間、敵は戦死一、負

傷二、我は死傷なし、敵の乗捨てし漁舟を檢するに、實彈十、打殺約四百殘留せりと云ふ

此の敵は騎兵にして監視の任務にありしものと認めらる

### 第二節 第七、八次旅順攻撃 (四月十三日十四日)

(敵艦の沈没敵將の戦死、日進春日の初陣)

十四日午後三時大本營報告

旅順口外より歸着したる第三驅逐隊の報告に依れば昨十三日我艦隊は旅順口に迫り敵の戦艦一隻「ベトロバウロウスク」型を沈め驅逐艦一隻を撃沈し我艦隊無事なる旨瓜生司令官より電報に接せり

### 同 詳 報

十六日午後五時東郷聯合艦隊司令官報告

聯合艦隊は去る十一日より豫定の如く行動し更に旅順口の敵に對して第七、第八次の攻撃を爲せり  
第四驅逐隊、第五驅逐隊、第十四水雷艇隊及び蛟龍丸は十二日夜半旅順口港外に至り敵の探照を冒して港口に近づき計畫の通り港外の各所に機械水雷の迅速なる沈置を遂行し得たり又特別の任務を有せる第二驅逐隊は十三日黎明港外鮮生角の南東を巡邏せる時東方より旅順口に入らんとする四本煙突を有する敵の驅逐艦一隻を發見し直ちに其前路を遮りて之を攻撃し約十分間戦闘の後之を撃沈せり

又同時頃西方老鐵山の方向より來れる他の敵驅逐艦一隻を發見し轉して之を攻撃せしか距離遠くして遂に之を港内に逸せり此戦闘に於ける第二驅逐隊の損傷は輕微にして唯「雷」の卒二名輕傷せるのみ擊沈せる敵艦の溺死者は敵艦「バーン」の近つき來りしため之を救助するの暇なかりし

第三戰隊は午前八時港外に達して第二驅逐隊を掩護し且つ敵情を偵察せり午前九時其敵艦「バーン」我に向ひ突進し來り遠距離より砲撃を開始せしを以て徐々に應戰して之を擊退せり幾もなく敵艦「ノーウキック」「アスコルド」「デアナ」「ペトロボウウムク」「ホペーダ」「ホルタート」等「バーン」と合し攻勢を取り反撃しつゝ第三戰隊は之に應戰しつゝ敵を南東方向約十五海里に誘致せり此時沖合約三十海里に方りて濃氣の内に隠れたる第一戰隊は第三戰隊の無線電信に接し直ちに急進して敵艦隊に迫りしか敵は艦首を轉して港内に向ひ背進せしを以て尙益す追窮して之を港前に壓迫せると先頭に占位せる「ペトロボウウムク」を見わたる敵艦一隻前夜沈没したる我機械水雷に掛り懸發轟沈するを見る時に午前十時三十二分なり

敵の殘艦は此慘澹たる光景に驚きて大に混亂し尙ほ外に二敵艦の進退自由を失ひたるの疑ありしも敵艦隊混雜の爲め其艦型を識別する能はざりし

其後敵の殘艦は約一時間頻りに艦側附近の水面を砲撃しつゝ漸次に港内に入り正午過ぐる頃港外に敵影を見ざるに至れり此戦闘の初期砲戰に於て第三戰隊は一の損傷なく敵の損害も亦少許なるへく

第一戰隊は遂に敵と砲戰距離に近づかざりし

當時午後一時艦隊は旅順港外を去り豫定地點に集合して洋中に假泊し更に準備を整へて十四日午後四時より再び旅順口に向ひ出動せり第二驅逐隊、第四驅逐隊、第五驅逐隊、第九水雷艇隊は翌十五日午前三時前後相次て旅順口港外に達し豫定計畫の如く再び其の任務を遂行せり午前七時第三戰隊も港外に現はれ敵情を偵察せしか港外に敵影なく港内寂然たり又第一戰隊は午前九時旅順口沖に至り途上浮流せる敵の機械水雷三個を發見し一々之れを砲撃轟沈し午前十時より春日、日進を老鐵山の西方に分派し約二時間港内に對し間接射撃を行はしめたり敵の要塞及港内の敵艦も時々之れに應戰せしか兩艦共に損傷あらず此の兩艦は此の日を以て敵に對し其初弾を發射せしか其の射撃の效果は相應に之れありしか如く老鐵山西の新造砲臺を沈黙せしめたり

午後一時三十分艦隊は交戰を止め歸航せり  
此連續せる作戦に於て聯合艦隊が一兵をも失はずして多少の戦果を擧げ得たるものは一に大元帥陛下の御威徳に依るものにして麾下將卒は終始勇往敢爲其の任務を遂行するに忠實なるも其奏功成果に至つては人力の及はざる所多し特に數多の艦艇が晝夜を間はす敵機械水雷の浮流せる洋中を縱横に航行し然かも今日に至るまで一の危害を受けたることなきか如きは只天祐と確信するの外あらざる也



(註)参加艦艇次の如し

十二日以來十五日までの旅順攻圍に参加せる軍艦は三笠、初瀬、敷島、朝日、八島、富士、淺間、常磐、高砂、笠置、千歳、吉野、日通、春日等にて驅逐艦は電、雷、曙、暁、春雨、村雨、速鳥、朝霧、村雲、夕霧、陽炎、不知火等、又水雷艇は平(艇長大尉桑島有三)嶋(大尉吉川安平)千鳥(少佐榎井吉九)武藏(大尉飯田延太郎)雁(大佐坂本重國)蒼鷹(少佐天島純吉)鶴(大佐原田松次郎)燕(大佐正野眞雄)等なり較龍丸には小田式器械水雷の發明者小田喜代爾と乗込み行けり

勅語東郷司令長官に下る

聯合艦隊ハ旅順口ニ迫リ敵艦ヲ沈メ偉功ヲ奏セリ 朕大ニ之ヲ喜尚ス

東郷司令長官の奉答

今回旅順口に於ける聯合艦隊の奏功の如きは一に陛下の御威徳に依るものにして臣等人力の及ぶ處にあらざるに又優渥なる勅語を賜はり臣等恐懼に堪へず尙益す精勵奮敵を剿滅せんことを期す右謹て奏す

### 第三節 上村艦隊浦鹽に向ふ (四月十三日より廿六日迄)

二十六日午後八時元山發電上村第二艦隊司令長官報告の要領

二十三日元山津出港間もなく濃霧に會し之を冒して航進せり北上するに従ひ霧は益々濃厚となり二十四日午後四時推測に依れば東經百三十二度十分北緯四十二度十分附近に達したるも四面濃霧に覆はれ何等行動を爲す能はざるを以て午後四時三十分正南に轉針し二十五日午前六時東經百三十二度二十分北緯四十度五十分附近に到達せしも霧は依然濃厚にして再び引返すも到底浦鹽斯德に接近行助し得るの見込なきを以て一時元山津に歸航するに決し針路を更定し今二十六日朝に至り霧漸く晴る此の間約三晝夜全く濃霧に閉塞せられ時に艦隊の一部を望見し得ることありしか多くは後續艦

すら見るを得ざりし状態なりしも幸に一艦艇をも見失ふことなく艦隊全部幸ふして午後一時當港に歸着するを得たり入港するや直に大木領事來艦す其報告に依れば二十五日正午頃敵の水雷艇二隻元山津に進入し我商船五洋丸を擊沈し退却せり此時港外には「ロシヤ」「グロンボイ」「リユーリック」と認むる敵艦三隻あり午後二時頃北東に向て退去せり又二十五日午前六時頃金州丸は陸軍守備隊一個中隊を乗せ第十一艇隊と共に利源縣方面に向ひ北行せりと云ふ依て右船艇は或は敵艦隊に會せしやの疑あるを以て第二艦隊主力及驅逐隊を率ひ出港敵艦隊を追尾せんと欲し出港準備整ひたる時第十一艇隊のみ歸港せり同司令の報告に依れば二十五日午後二時利源縣着陸軍兵は直に上陸して陸上の偵察を終り午後六時歸船す於是艇隊金州丸共に歸途に就く然るに當時天候險惡の兆を呈したるを以て金州丸は單獨元山津に向ひ艇隊は同夜遮湖浦に假泊し今二十六日午前六時同所發元山津に歸港せりと云ふ

金州丸は只今に致るも歸港せず是れ敵艦隊に會せし爲めなるや又は濃霧の爲めなるや不明なるに附直に艇隊を搜索に出せり本職は明二十七日午前七時出發再び豫定の如く行動せんとす

### 第四節 鴨綠江の陸兵援護 (四月二十五日)

廿八日大本營電細谷第三艦隊司令官報告

摩耶艦長より左の報告あり

第三章 龍潭浦の海陸決戦

本分遺隊は豫定の如く行動して二十五日鴨綠江口着溯航中敵の野砲隊は龍岩浦の對岸遠距離の所より發砲せしも中らす川中洲陸上に敵の騎兵散在するを認めたる故發砲せしに敵は逃走せり翌二十六日敵の騎兵約百名我小汽艇に向ひ發射せしを以て第六十九號水雷艇應戦し敵は多數の負傷者を殘し山背に退却せり我軍損傷なし同日午後五時敵は安子山方面より本分遺隊に向ひ發砲す我應戦す午後五時五十三分に至り敵沈黙せしを以て射撃を止む我に損傷なし

## 第四章 浦鹽露艦元山を襲ふ (四月二十五日)

(五洋丸擊沈さる)

元山發にて昨日達したる情報に曰く、四月二十五日午前八時元山に入港し午後三十分露國水雷艇に擊沈せられたる五洋丸の積荷は三千五百一十個にして總て韓人に屬する明太魚なり、日本人の貨物は一物もなし

露國水雷艇二隻より各一隻の觸艇を出し、各諸艇より士官と水兵らしきもの四名宛五洋丸にヒリ船長の有無を問ひ其の有らざるを聞くや閉扉しありたる船長室を破りたり、一方には爭ひし、一方には手眞似を以て乗組員の上陸を迫りしを以て總員争ふて小舟に飛乗しものにし二十分を出てす臨檢等を行ひし事實毫も無し、但し人命は皆無事なり

擊沈は裝置水雷に由れりとの説あるも魚形水雷を用しもの、如し但し此の點は未だ確むるを以

### 第一節 新浦沖の大恨事 (四月二十五日)

(金州丸擊沈さる)

元山に於て福井千早艦長報告

救助船只今金州丸の避難者を乗せて入港せり此の内に海軍軍人一人もなし、監督將校、船長、大主計は露國軍艦に赴き、其の他非戦闘員も亦捕獲せられたるか如し、船は水雷を受け沈没せり、救助船にて歸來せし人員は陸兵四十五名其他九名なり

右監督將校は海軍少佐溝口武五郎、船長は八木政吉、大主計は飯田庸治なり

### 同 詳 報

廿九日午前十一時廿五分大本營報告

陸海共同の下に於て歩兵第三十七聯隊(大坂)第九中隊金州丸に乘組み威鏡道利原を偵察し其任務を終へて元山へ歸航中新浦沖に於て敵艦の爲め擊沈せられたり其顛末左の如し  
救助船大西九廿八日午後十一時十分元山港に着金州丸沈没の原因左の如し  
四月廿五日午後六時三十分利原港を發し同十一時十五分新浦附近の沖に於て敵の軍艦三水雷艇二に遭遇し空砲を放ちたる後監督將校海軍少佐溝口武五郎、飯田大主計、船長八木政吉外一名は敵艦に

行きたるまゝ歸らす敵は一時間の猶豫を與へ人員を收容せしと云ふ十二時頃には陸軍々人の外船中殆んど人なきか如し陸軍々人は上官の命によりて甲板上に出てすして沈静す午前一時三十分(廿六日)敵は水雷を發射し且つ爆發藥を裝置して爆發せるか如し其の水雷は船室を貫く是に於て陸軍兵は甲板に上り敵に對し數列にて急射撃を爲し敵は之に對し砲撃し我兵死する者多し此間曹長は甲板の上にて割腹し下士以下にも亦自殺せる者多し午前二時頃敵は第二の水雷を發射す是に於て金州丸は機關部より二個に破壊せられ水中に陥没す甲板に在りて射撃せし者は一旦水中に卷込まれしも再び水面に浮き上りし者ありて其者は恰も其上面に在りし短艇に乗り移り繩を切斷して漂流し水は厚は短艇を浸し將に沈没せんとせしを以て重量物を抛棄し僅に浮游するを得たり其後力を極めて西に向き消き二十六日午後五時三十分下士以下三十七名馬登島に着又他の短艇にて卒八名はカイヨウカシに二十七日正午過ぎに着き其後共に新浦に集る人夫六商人三は水雷を發射せられざる以前に於て遁れし者にして多くの入夫雇人は敵艦ロシヤ號に收容せられたるものゝ如し海軍兵は短艇にて遁れし者あるも其後不明なり陸軍々人は一人も敵に捕はれし者なく生存者の外は悉く戦死せり實に其最期は天晴にして一も非難すへき者なし特に此困難の際武器を携て歸りし者五名あり戦死せし陸軍兵は大尉椎名三藏、櫻井久我治、中尉寺田龜之助、横田信三、少尉楢垣正和、特務曹長鷲藤勝、士卒七十三、通譯二、他は陸兵にあらずして不明、生存陸軍々人中輕傷十稍や重傷一、商人一、人夫には傷者なし

二、海上陸兵の壯烈 (四月二十五日)

(陛下の萬歳を叫て沈没す)

五月一日午後三時五十八分原口司令官發覺午後七時大本營

金州丸に於ける不幸に關しては既報の外、遭難中隊は窮迫の場合に於て急射撃の前に取敢なる一齊射撃を爲し、沈没の際、天皇陛下の萬歳を唱へ悠然沈没せり、又死後敵手に落つるも隊伍を知らせずとて肩章を除去し且つ重用の圖書を破棄す、沈着事に處したりと云ふ其悲慘の出來事により在元山諸隊の士氣益々振起せり

二、金州丸護衛艇隊の歸着並に再度の出港 (四月廿六日)

廿九日午後七時十五分元山發覺武部第十一艇隊司令官要領

十一艇隊は二十五日午前六時陸兵を乗せたる金州丸と共に元山津を發し利源縣に向て午後二時同地に着して陸兵の陸上を援助し午後六時に至り其陸兵を收容したる金州丸と共に拔錨歸途に上らんとしたるか正午過ぎより降下を始めたたる晴雨計は益々急降し天候險惡の兆ありしを以て艇隊は遮湖浦に留まり翌朝出發新浦を経て元山に歸るべきことを金州丸に告げ則ち假泊す金州丸は單獨歸航せり艇隊は二十六日午前七時出港せしも濃霧に遭ひ同日午後三時辛ふして元山津に入港し我艦隊に合し始めて金州丸の未だ歸着せざるを知り上村司令官の命に依り直に金州丸搜索の爲め出港し元山津

より遮湖浦に至る沿岸一帯を搜索せる後此夜遮湖浦に假泊二十七日早朝出港搜索中泰盛丸に會合し金州丸沈没の事實を聞き尙避難者あるべきを思ひ二十八日午前八時迄退湖浦附近に至る海面を搜索し唯今元山津に歸着せり金州丸に陸軍兵の搭乗したるは敵兵約二百五十吉州より北青に向て出發すとの情報に接し一中隊を利源に送り威嚇運動を行はんと希望を有したる元山守備隊長の協議に應じたるものなり

### 三、千早艦金州丸を搜索す

(四月二十七日)

廿九日午後十一時二十分元山津發福非千早艦長報告の要領

●●●●●  
二十七、日浦鹽に向ひ艦隊航行中東經百二十八度五十四分北緯四十度五分の位置に於て鼠色傳馬船の漂流しあるを發見せしに船中に三十五年式海軍銃劍帶一、海軍靴一、士官用らしき靴一ありて之を採取せり血の跡らしきものを見す依て金州丸は敵艦を發見するや北方に避け海岸に乗り上げ艇を捨てたるものならんかとの想像を以て本官は司令長官の命に依り艦隊を分離して夜の明るを待ち城津の北東二十五海里なる「ゾルアット」岬より南下しつゝ沿岸残すところなく遮湖浦迄搜索したれども其影を認めず遮湖浦以南は昨二十七日水雷艇隊搜索を爲したる筈なるを以て本艦は其搜索を止め唯今元山に歸着せしに金州丸沈没のこと並に新浦に在る避難者收容の爲め救助船派遣したること等を聞きたり本艦は今夜更に出港して新浦に向はんとす

### 第二節 上村艦隊再び北進す

(四月二十七日)

五月一日午後零時十五分元山發上村第二艦隊司令長官報告要領

本隊は二十七日午前七時元山津出發港外にて第十一水雷艇隊より金州丸に會せざるの報に接したるを以て再び元山津以北の沿岸海面を搜索すべきを命して千早は新浦以北の沿岸海面を搜索の爲め先航せしめ本艦隊は新浦沖合に向へり遮湖浦沖にて傳馬船一漂流せるを認め霞をして之を檢せしめ其遺留品より推究せば最早金州丸は敵に遭遇せしものなることは疑ふの餘地なきも或は尙ほ以北の沿岸に遁走乗り上げ避難せしやの疑あるを以て千早には「ゾルアット」岬以南の沿岸を尙ほ搜索したるの後元山津に歸港し其結果を大本營に報告すべきを命し之を分派せり其詳細は千早艦長報告の如くにして最も遺憾に堪す艦隊は豫定の如く北進せしか午後四時頃より漸次濃霧となり豫定行動を取る能はず終夜警戒航行の後歸途に就くの已むを得ざるに至れり途中浪速は敵の機械水雷の海面に浮流するを發見し和泉をして之を撃沈せしめたり今朝城津沖を南下する頃二隻の端舟漂流するを認め之を檢せしに金州丸の附屬端舟にして其内には救命帶及兵員の所持品二三を發見し端舟は之を採取せ

## 第五章 陸上の第一戰

(第一軍)

(四月二十六日  
より三十日迄)

### 第一節 鴨綠江附近の戰鬪

黒木大將より大本營に送せし報告

### 一、九里島貯定島の占領

二十七日午後五時三十分發同十一時五十分發

架橋準備を爲すの必要上軍は二十六日朝威力を以て、即ち近衛師團の一部を以て九里島の敵を撃退して之を占領し、第二師團の一部を以て貯定島を占領し、敵は盡く九連城方面に背退したり。

此の戦闘により我死傷者、近衛師團戦死(一字不明)重傷九、輕傷十六、第二師團死傷無し、又敵は少からざる死傷者を運搬し去るを見たり、但し我衛生隊の收容したる敵の重傷者(乘馬斥候兵)一は東部西伯利亞狙撃歩兵第二十二聯隊のものにして、同人の言に據れば同第二十三、第二十四聯隊も亦前面に在り、其の長官は少將ツルメフにして各聯隊は二個大隊より成り乘馬斥候兵四十二を有す敵は九連城後方の高地にある砲八門(九珊半)を以て西湖洞附近を射撃せり、又虎山の高地にホツチキス機關砲二門を現はせり

元化洞高地に在りし我砲兵一中隊は虎山の高地に現はれたる敵の高等司令部らしきものに對し三回の齊射を行ひしのみ

### 二、安子山の敵を沈黙せしむ

二十七日午後四時十五分發同十一時三十八分發

二十六日正午頃より九連城の砲兵は義州附近を砲撃し、近衛歩兵第一聯隊の兵卒一、榴散彈のため

#### 負傷せり

二十七日も亦時々發砲す、我砲兵は應射せず九里島に在りし敵の第二十二聯隊乘馬斥候隊長少尉セエヨノフの死體を九里島對岸に發見し義州城内に埋葬せり

細谷艦隊より差遣したる宇治、摩耶の二砲艦二水雷艇、二武装蒸氣船は中川海軍中佐の指揮の下に

二十五日夕龍巖浦に入港せり、其の際宇治は安子山の敵より砲撃を受けたり

二十六日朝水雷艇一、小蒸氣艇一は水深測量の爲め娘々城附近に進行せり、艦隊は午後五時より同

五十分迄の安子山の敵と對戦し敵砲を沈黙せしむ、又其の附近を通過する敵騎百を砲撃せり、海軍は損傷なし

### 三、馬匹捕獲

二十八日午後三時五分發同九時二十五分發

敵は鑿河右岸に沿ひ九連城以北に工事を繼續しつゝあり

二十八日も亦時々砲撃しつゝあり

二十八日九里島對岸に於て斃れたる敵の馬匹九十五頭外に生馬六匹を獲たり

### 四、近衛小倉兩師團

二十九日午後二時四十九分發同八時五十分發

昨廿八日近衛歩兵第四聯隊の二中隊は偵察の爲め虎山に至り、更に一小隊を栗子園に派遣す、敵約三十、同村の南端を防禦す我兵之を撃退す敵は死者五を殘せり、其の隊號は狙撃歩兵第十二聯隊なり此の時敵は楡樹溝東南端高地の砲臺より砲撃を始む、我に損害なし

九連城附近の敵の砲兵は時々大角度の射撃を行ひ、其の彈丸は九里島、義州、西湖島、弘北洞西方附近に落ち、我が攻撃準備作業を妨害し、夜間と雖も時々發砲す、然れども其効力は概して微弱なるもの、如く、我に損害無し本日(廿九日)も時々義州城内を砲撃す、我れは應射せず

第十二師團は水口鎮の對岸にありし微弱の敵を撃攘し、今二十九日午後二時架橋を開始す

### 五、鴨綠江の渡河戰

(大砲戰大勝利)

四月三十日午後九時五十分發五月一日午前一時四十五分發

(一)第十二師團は今朝(三十日)午前三時水口鎮に於ける架橋完成、續いて渡河、午後六時豫定の陣地に着く

(二)野戰砲兵第二聯隊及び重砲兵聯隊は未明迄に豫定の陣地に着く

午前十時四十八分發定島より中江臺に出てたる我歩兵斥候に對し、九連城北方及び東方高地にある敵の砲兵之に向て射撃したるを端緒とし、猛烈なる砲戰を開けり

午前十一時十五分九連城の敵砲兵は沈黙す

馬溝東方の高地に在る敵の砲兵(砲約八門)は九里島西方の架橋點に向ひ射撃を續行せり、我砲撃の結果敵に十分なる損害を與へたるものと認む、我軍の損害は輕傷將校五下士以下即死二、負傷二十二なり

(三)鴨綠江本流の架橋は午後八時完成し、諸隊は續々虎山北方高地に前進す

(四)細谷艦隊の枝隊は安東縣の下流に於て戰闘に參與し、就中莊砲艇は敵の砲兵及び歩騎兵と最も激烈なる戰闘を爲し、歩騎兵約四百を撃退す

(五)軍は豫定の如く明日未明攻撃を實行せん

(六)敵の砲兵は發射速度大にして、其の曳火線は確實に七千五百メートル以上に達す

### 第二節 鴨綠江の威嚇砲撃 (四月二十九日)

三十日大本營發電細谷第三艦隊司令官報告

中川摩耶艦長より左の報告に接す

本分遣隊は二十九日午前八時出港し豫定の如く行動して約一時間威嚇砲撃を爲す、敵之に應せず、午前十時五十分歸泊す

發砲艇隊は娘々城より北西約三里にある三道浪頭に於て敵の兵約百五十を發見し之に向て砲撃せし

に多くの死傷を残し山背に退却せり我軍損害なし

其二 (四月三十日)

五月二日午前一時大本營若谷第三機隊司令官報告

中川摩耶艦長より左の報告に接せり

分遣隊は三十日午前八時出港豫定の如くに行動し約二時間威嚇砲撃を爲し敵之に應戦す

裝砲汽船は安東縣下流に進み敵の歩騎兵約四百と近距離に於て激戦し敵の砲隊も亦烈しく我を砲撃せり約一時間の後退却せしを以て引上げたり我は幸にして損害なし敵は多少の損害を受けたるもの如し

## 第六章 九連城の総攻撃、占領

(五月一)

一日午後一時大本營午前十時二十五分黒木大将發

軍は豫定の如く天明を以て砲戦を開始し、午前七時五分榆樹溝西方高地に在る敵の砲兵を沈黙せしめ、同七時三十分より各師團は攻撃前進に移り八時十五分より九時の間に於て九連城より馬構榆樹溝北方に渡る高地線を占領せり、委細は後より

### 第一節 蛤蟆塘の激戦

#### (我軍の大勝)

二日午前四時三十分大本營若谷一日午後十一時二十分黒木大将發

敵は九連城西北高地に於て再び抵抗を試みしも午後一時五十分より退却を始め軍の右翼隊(第十二師團)は大棟房、中央隊(近衛師團)は蛤蟆塘、左翼隊(第二師團)は安東縣に向ひ、又軍の總隊備隊は遼陽街道を前進し、午後六時軍は安東縣より虎古溝を経て柳樹溝に亘る線を占領し特に蛤蟆塘附近にて三面より敵を包圍し激烈なる戦闘の後、砲二十門、馬匹車輛悉皆、將校二十餘名、下士卒多数を捕虜とす

我に對せし敵は狙撃歩兵第三師團の全部、同第六師團の第二十二、第二十四聯隊とミンチエンコの騎兵旅團、砲約四十門、機關重砲八門にして鳳凰城方面に敗走せり

我軍の死傷は多くも將校以下七百ならん、目下取調中戦利品達約砲廿八門、小銃及び彈藥等多數なり我砲兵の効力は頗る偉大にして捕虜將校の言によれば昨今兩日の砲戦に於て敵の軍團長ザスリツ、師團長カシタリンスキーは共に負傷し、其の捕虜騎兵中佐の言によれば敵の死傷は八百以上なりといふ

摩耶艦隊は午前十時より安東縣下流に至り敵の砲兵と約三十五分激戦の後之を敗却せしめ午後二時龍巖浦に歸れり

當軍司令部は午後五時三十分九連城に至り、殿下各將校極めて元氣軍隊士氣大に振ふ以上取敢へず報告す

### 九連城占領後報

昨曉(三十日)猛烈なる砲火を交へ堅固なる敵壘をして沈黙せしめ我歩兵虎山を占領す  
今曉(一日)我前軍の展開約二里の延長に及び猛進して澗河を徒涉し頑強なる抵抗にも拘はらず午前八時五十分敵壘七ヶ所を陥れ尙ほ砲八門を分捕す  
我軍九連城に入るや直ちに敵を追撃し三面挾撃して砲兵陣地に突貫し砲二十門を分捕し又捕虜將校二十名、下士以下無敵敵の軍團長及び師團長も負傷せりと  
我兵の死傷約五百名、敵の損害最も多し

### 我軍の追撃

(敵白旗を掲ぐ)

二日夜半發三日午後大本營第一軍司令官報告

昨日午後敵は我の追撃に對し頗る勇敢に抵抗を爲し爲めに我軍の死傷は更に三百を加へたり又此敵は最終の時機に至るまで奮戦し其砲兵約二中隊は人馬の大半を失ひ遂に閉鎖機の西部を破壊し白旗を掲げて降服せり

捕虜將校の確言によれば蛤蟆塘附近の戦場に於て師團長カシタリンスキー及狙撃歩兵第十一第十二聯隊長狙撃砲兵大隊長は戦死し其他高級將校に死傷多し敵は數回の打撃に依て全く潰亂して退却せしもの、如く昨夜來各所に逃竄し在りたる敵の投降するもの多く捕虜の總數今や將校ロウエフキ一中佐以下約三十内健康者十下士以上約三百内健康二百其詳細及び我軍死傷者の姓名確報は取調中

### 敵の死傷増加

五日午後五時半大本營黑木大將報告

戦場掃除の結果敵の死傷者更に約二百を増加せり尙ほ増加の景況なり投降者中健康なる二等軍醫正一名あり我衛生勤務に従事せしめつゝあり

勅語黑木大將並に細谷司令官に下る

鴨綠江ハ敵ノ恃ミテ天嶺トナス所我第一軍及之ニ疊加シタル海軍支隊ハ計畫周到克ク其強行通過ヲ全クシ大ニ敵ヲ撃破セリ  
朕深ク之ヲ嘉ス惟フニ爾後ノ掃蕩ハ勳勞倍ス大ナルヘシ汝將校下士卒奮テ勳勵セヨ

黑木大將の奉答

鴨綠江の戦場に關し勅勅を賜ふ臣等感激の至に堪へず  
我軍の勝利を獲たるは一に陛下の御威徳に依る臣等隨て今晨の作戦に對する 奮闘を奉り益々奮闘以て報効を期せんとす  
願て奉答す

### 第一軍死傷並に戦利品

十八日大本營黑木大將報告

第六章 九連城進攻、占領



九連城附近の戦闘に於ける我軍の死傷及び同戰場並に風風城に於ける我が鹵獲の正確なる數、次の如し

我軍の死將校五、下士卒二百十八、負傷將校三十三、下士卒七百八十三、合計一千零三十九  
我軍にて埋葬せし敵の死者千三百六十三、捕虜(傷者共)將校十八、下士以下五百九十五、合計一千

九百七十六

▲戰場に於て戦利品 三吋速射野砲二十一△三吋彈藥車十九△同彈藥一千四百十七△速射機關砲八  
△同彈藥車八△同彈藥三萬七千三百△小銃一千零二十一△同彈藥車五十一△同彈藥三十五萬三千  
零々五△馬六十三△輜重車輜十一△同輓具五十三△外套六百九十四△毛皮上衣五百五十五△携帶天  
幕五百四十一△雜品八十種  
▲風風城に於て戦利品 六十三米突半山砲彈藥三百五十七△小銃彈十八萬八千△輜重車輓具百五十  
△外套一千七百二十△黑麵麩百萬零七百八個△蜀黍一千七百三十六石△滿洲豆餅五千個△外に大  
工具電信材料雜穀雜品多數

### 第二節 九連城攻撃の陸兵援護 (五月一日)

細谷第三艦隊司令官報告

中川摩耶艦長より左の電報に接せり

分遣隊は一日午前九時半出港、出来る限り上流に溯航し摩耶は案子山方面、宇治は六道溝附近の威嚇砲撃を爲し、水雷艇は六道溝溯航威嚇砲撃の後、歸航する際、案子山北東の山腹より不意に激烈

なる砲隊の射撃を受く應戰約三十分にして敵を沈黙せしめ午前十一時半龍巖浦に歸着せり我れに損傷なし

裝砲艇は昨夜午後十時出港六道溝の上流に至り約三十分威嚇砲撃を行ふ敵之に應戰せり翌午前一時歸港す、本日午前九時三十分出港、安東縣下流に至り、敵の歩兵砲兵と激戰の後敵を退却せしめ安東縣市街に火災起るを認め午後二時歸航せり、我に損傷無し  
土人の言によれば敵は安東縣市街に放火し退却せしもの、如し  
軍は午前九連城附近を占領せり

勅語細谷司令官に下る

鴨綠江ハ敵ノ恃ミテ天險トナス所第一軍及之ニ參加シタル海軍支隊ハ計畫周到克ク其進行ヲ全クシ大ニ敵ヲ擊破セリ  
朕深ク之ヲ嘉ス惟フニ爾後ノ掃蕩ハ勲勞倍ス大ナルヘシ汝將校下士卒奮テ勉勵セヨ

細谷司令官の奉答

大元帥陛下の御稔威に依り鴨綠江上に得たる戰機に對し優遇なる 勅語を賜ひ恐懼に勝へず臣等益々奮勵し以て 國恩に副ひ奉らんことを期す右略て奏す

### 騎兵將校斥候の格闘 (五月三日)

(敵兵の敗狀)

四日午後一時馬本大將發大本營

第六章 九連城の攻撃、占領

昨三日我か騎兵將校斥候(由上中尉以下十四名)は湯山城に達せし時同地南方高地にある敵の騎兵十五六名より射撃を受けたるを以て直ちに其の背後に迂回し之を襲撃し激烈なる格闘の後鳳凰城方面に撃退し尙ほ之を追撃して高麗門東南約一里にある酒川の線に達す

此の時敵の監視兵街道兩側の高地に在るを認たり土人の言に依れば五月一日湯山城東方高地にありし敵の歩兵約二千は東南方より退却し來る味方の歩兵約三百を誤認して同士打を始め爲めに死者百十、傷者七十を生し又輜重車は積載品を放棄して潰走せり

捕虜將校の言に依れば五月一日の戦闘に於て隊伍を整へ退却せしものは僅かに歩兵五、六大隊、砲兵二中隊のみ其の他は悉く潰走せりと

## 第七章 第三次旅順口閉塞

(五月三日)

(終に目的を達す)

東郷聯合艦隊司令長官報告

聯合艦隊は豫定の如く行動し五月三日午前三時四時の交を以て旅順口第三次の閉塞を決行せり

閉塞船隊及之を掩護せる赤城(艦長海軍中佐藤本秀四郎)鳥海(艦長代理海軍中佐岩村團次郎)第二驅逐隊(司令海軍中佐土屋光金)第四驅逐隊(司令海軍中佐長井群吉)第五驅逐隊(司令海軍中佐眞野道

次郎)第九艇隊(司令海軍中佐矢島純吉)第十艇隊(司令海軍少佐大瀧道助)第十四艇隊(鶴、其鶴を缺き第六十七號艇第七十號艇を加ふ司令少佐櫻井吉丸)は二日夕刻艦隊と分れ豫定航路を旅順口に向ひ前進せしか不幸にして午後十一時頃より南東の強風俄かに起り波濤高く爲めに閉塞船隊は離散して相失ふに至れり

閉塞船隊總指揮官海軍中佐林三子雄は船隊の集合到底見込なきを認め閉塞事業中止の命を下せしも其信號通達せず午前二時頃迄通信に盡力せる間に船隊は相前後して既に旅順口沖に達せり

然るに三河丸(指揮官海軍大尉匠瑛胤次)は港外を偵察せる第十四艇隊に對する敵の砲火を見て前線船既に港口に向て突進せるものと思ひ直に港口に向て適進し佐倉丸(指揮官白石霞江)と思はしき者之に續く敵は港口附近に敷設せる視發水雷を發火し強力なる探照と猛烈なる砲火を以て之を防禦せしも三河丸は港口防材の一部を破りて奥深く水道に闖入し中央の好位置に投錨爆沈し佐倉丸と思はしきもの港口尖岩の附近に投錨沈没す

之に次て遠江丸(指揮官海軍少佐本田親民)江戸丸(指揮官高柳直夫)小樽丸(指揮官野村勉)相摸丸(指揮官湯淺竹次郎)愛國丸(指揮官海軍大尉犬塚太郎)朝顔丸(指揮官向菊太郎)も相次て港口に向ひ猛進す

此時敵の防禦砲火猛烈を極め其敷設水雷は前後左右に爆發し閉塞隊員の戦死負傷するもの最も多か

浦江丸は港口防材に衝突し船首を東にし殆んど港口の半部を閉塞して其位置に爆沈し江戸丸は港口に達し將に投錨せんとする際高柳指揮官は腹部を射られて戦死し指揮官海軍中尉永田武次郎直に之に代はり投錨を命じ次で爆沈せり

小樽丸相摸丸と思はしきものも亦港口に入りて沈没せるもの、如く又愛國丸は港口より約五鎊のところに於て敷設水雷に罹り瞬時に沈没し指揮官附内田弘同機關長青木好次以下八名行衛不明となり朝顔丸と思はしきものは舵機を損したるもの、如く港口に達せずして終に黄金山下に爆沈せり

右八艘の閉塞船の内五艘は港口に入りて爆沈せしを以て港口は少くとも巡洋艦以上の通航に對し充分閉塞せられたるものと認め

今次の閉塞事業は天候の異變と敵の防備増大したるに依り前二回のものに比し頗る慘烈を極め戦死負傷は甚た多く特に小樽丸相摸丸佐倉丸朝顔丸四隻の閉塞隊員の最も收容する能はず其最後の勇行さへ之を知るに由なかりしは遺憾至極なりと雖も其忠烈の事蹟は永く帝國の史乘に特記すべきものなりと信す

閉塞隊員の收容に従事したる各水雷艇隊及び驅逐隊は翌朝まで風濤と戦ひ敵に抗して能く其任務を盡し特に水雷艇隊は港口に接近して閉塞隊員の約半部を收容せり

丸難業中第六十七號艇(艇長海軍中尉平真雄)は敵弾に流管を破られ負傷卒三名を出し一時敵前に於

て進退自由を失ひしか其艇第七十號艇長海軍大尉森本義寛は之を救助して曳行せり

又右艦司令兼艇長海軍中佐矢島純吉も敵弾に左舵機を傷けられ卒一名戦死し軍にては下士一名戦死せり

其他驅逐艦水雷艇には一も損傷なし

第三艦隊(司令海軍少將出羽重遠)は三日午前六時第一戰隊(司令長官海軍中將其郷平八郎司令官海軍少將梨羽時起)は午前九時旅順口港外に達して驅逐隊水雷艇隊を掩護集團し午後四時まで各方向に分れて閉塞隊員の搜索收容に盡力せしか終に得るところなかりし

島日濃氣頗る深く爲めに敵状を見ること能はず夜に入り我艦隊は各其集合地點に引上げ四日朝より更に豫定の行動を續行せり

(註)

佐倉丸	二、九七八噸	一八八七年製造	郵船會社所有	小樽丸	二、五四七噸	一八八六年製造	同
遠江丸	一、五五三噸	一八八三年製造	同	三河丸	一、九六七噸	一八八四年製造	同
相摸丸	一、九二六噸	一八八四年製造	同	朝顔丸	二、四六四噸	一八八九年製造	同
愛國丸	一、七八一噸	一八七九年製造	大阪商船會社所有	江戸丸	一、七二四噸	一八八四年製造	廣海三郎所官

第三次閉塞將士

第三次の閉塞隊に加はりたる忠烈無双の勇士は左の如し

△**浦江丸乗組** 少佐本田親民、○輕傷中尉森永尹、生存○大機關士竹内三千三、生存○三等兵菅森下

湯次郎、不明○三等機關兵曹野田京三郎、不明○二等水兵中村市兵衛、同○三等機關兵曹宮田兵馬、輕傷○三等機關兵曹片山辰次郎、全○二等水兵坂上宗次郎、全○一等機關兵曹廣田森吉、全○三等機關兵岡井惣七、全○二等信號兵曹田中太郎吉、重傷○二等兵曹田中源次郎、生存○一等機關兵福田明、全○一等機關兵佐々木龜太郎、全○一等機關兵曹山内喜一郎、全○二等機關兵竹内寅藏、全○三等機關兵木村千吉、全

▲佐倉丸乘組 少佐白石葎江、不明○大尉高橋靜、不明○機關少監寺島貞太郎、全○三等機關兵大谷縮尾、戰死○二等兵曹藏重重吉、不明○二等兵曹佐野善次郎、全○三等兵曹吉井好藏、全○一等水兵大塚榮三、全○一等水兵三宮竹馬、全○上等機關兵曹大野藤吾、全○一等機關兵曹淡治平、全○一等機關兵町田福三郎、全○三等機關兵林岩吉、全○全田中富五郎、全○全上原岩吉、全○全秋定秋太郎、全○全青山與太郎、全○一等機關兵末永新八、全○二等機關兵稻葉織作、全○二等機關兵石井儀一、全

▲愛國丸乘組 大尉大塚太郎、生存○大尉内田弘、不明○大機關士青木好次、不明○一等水兵長澤四郎、輕傷○一等水兵平松友三郎、輕傷○全一等機關兵佐々野勘太夫、全○二等機關兵杉山記義、全○二等兵曹田崎榮次郎、不明○一等水兵岩本慶助、全○一等水兵吉國等、全○二等水兵平田清治、全○二等機關兵曹安留治兵衛、全○三等機關兵曹長谷川常五郎、全○一等水兵野口榮三、生存○一等機關兵高石幸作、全○一等機關兵藤野直次郎、全○二等水兵藤車管平、全○二等水兵中村尚一、全○二等機關兵曹太田修一、全○二等機關兵新宅清太郎、全○全深尾秀男、全○三等機關兵錦織卓一、全○一等兵曹大野權六、全○二等兵曹星出千代藏、全

▲江戸丸乘組 少佐高橋直夫、戰死○中尉永田武次郎、生存○中機關士與倉守之助、全○一等機關兵武田彌七郎、戰死○一等機關兵松隈梅次郎、重傷○三等兵曹松岡平藏、輕傷○一等機關兵堀米市、全

○一等機關兵曹近藤寅吉、生存○二等信號兵曹大津留秋太郎、全○三等機關兵曹吉永景藏、全○一等機關兵有川德吉、全○一等機關兵齊藤庄三郎、全○二等兵曹中村三代藏、全○二等水兵安濃常右衛門、全○二等水兵山本光藏、全○二等機關兵神村寸吾、全○二等機關兵光岡貞三、全○三等機關兵三木高平、全

▲三河丸乘組 大尉匝瑾胤次、生存○中尉大西良輔、全○中機關士豊田稔、生存○四等機關兵姥谷虎次郎、戰死○一等水兵八百屋才吉、重傷○一等機關兵鈴木幸次郎、全○一等兵曹北端龜吉、輕傷○一等水兵後藤太一、全○二等機關兵曹岡野米治、全○二等機關兵與山玉吉、全○二等信號兵曹辰巳德松、生存○三等機關兵曹伊勢田榮助、全○三等機關兵曹中村元治、全○全一等機關兵鈴木多吉、全○一等水兵羽原九左衛門、全○一等機關兵松原新太郎、全○一等機關兵田中平八、全○二等機關兵鈴木常吉、全

▲小樽丸乘組 少佐野村勉、不明○大尉笠原三郎、全○機關少監岩瀬正、全○二等兵曹高橋庄吉、全○二等兵曹佐藤政助、全○二等信號兵中野耕作、全○三等機關兵曹三吉惣吉、全○二等水兵寺田永作、全○二等水兵中野甚太郎、全○一等機關兵能登原多三郎、全○全好永五郎、全○全龜井梅吉、全○全影山鹿之助、全○全前島貞之助、全○二等機關兵松島清太郎、全○全米倉貞、全○全根本秀雄、全○全朝顔丸乘組 少佐向菊太郎、不明○中尉糸山貞次、不明○機關少監清水雄亮、全○二等兵曹伊藤周助、全○一等水兵笠方善市、全○二等水兵牛田源一、全○二等水兵谷原梅太郎、全○全龜谷善太郎、全○上等機關兵曹田中清之助、全○三等機關兵曹濱田岩熊、全○一等機關兵阿部源吉、全○全三野品藏、全○全近藤東一郎、全○全平賀長藏、全○二等機關兵龜山彌吉、全○全前田秀松、全○全手島

▲相摸丸乘組 少佐湯淺竹次郎、不明○大尉山本親之、全○機關少監矢野研一、全○二等機關兵上野

山幸吉、戦死○上等兵曹人見伸毅、不届○上等兵曹津竹次郎、全○全今野喜美助、全○二等兵曹岩石善三郎、全○二等兵曹太田國治、全○全河野精藏、全○三等兵曹田尾幸藏、全○三等兵曹島口一全○一等水兵石川莊三郎、全○全森金作、全○二等水兵箕浦源藏、全○上等機關兵曹佐野廣太左、全○二等機關兵曹菅野又次郎、全○四窪和聰、全○一等機關兵多田佐太郎、全○全財部善藏、全○全中川勘次郎、全○全牧藏良造、全○全宮村幸助、全○三等機關兵竹内夏次、全  
 ▲收容艇戦死者 蒼鷹二等水兵川島喜助○準二等水兵西田辰次

勅語東郷司令長官に下る

聯合艦隊ハ三ノヒ旅順口閉塞ノ壯舉ヲ行ヒ猛激ナル敵ノ抵抗ヲ排シ其目的ヲ達セリト聞ク 朕倍々其事ニ興カン將校下士卒ノ忠烈ヲ嘉ス

東郷司令長官の奉答

旅順口閉塞の舉に對し三たび優渥なる 勅語を賜はり臣等感激に堪へず今や作戦其局面を大にし海上の任務益々加重するを覺ゆ 臣等愈々奮勵戦局の大務を收むるに努め以て 聖旨に奉らんことを期す右謹て奏す

### 第一節 開城後に知られたる閉塞當時の狀況

東郷聯合艦隊司令長官報告

第三回旅順閉塞を執行したる後敵の俘虜と爲り過般旅順の開城と共に我軍に收容されたる閉塞船小樽丸及相摸丸の生存乗員が閉塞當時の情況に就き報告する要領左の如し  
 野村海軍少佐の指揮せし小樽丸は當時午前二時三十分頃旅順港外に達し自餘の隊艦船と共に激烈なる敵の探照砲火を冒し黄金山の探海燈光を目標として港口に直進し午前三時五分港口の防材を突破

して水道に入るを得たるも水道内に哨戒せる敵の(砲艦)ギリヤークの如き及驅逐艦より近距離にて猛射を蒙り忽ち舵機を破壊せられて操舵の自由を失ひ遂に水道の西岸に近く船首を約西北西に向け投錨爆沈せり爆沈後指揮官野村少佐は徐に爆破の結果を検し其充分水道の左半一部を閉塞したるを確かめ乗員を第一端舟の傍に集合して退去を命せしか敵彈のため其端舟は破壊して水中に落ち野村少佐外下士卒二名も此に戦死し指揮官附笠原大尉殘員を率ゐて第二端舟を下し之に乗艇せしか其時本船は已に全く沈没して纔に煙突及橋のみを現せる有様にて端舟は覆没を免れ幸ふして本船を離るゝことを得たり然るに敵の砲火激甚なるため乗員續々敵彈に斃れ艇も亦遂に撃破せられ乗員皆水中に入りしも疲勞の極多くは生氣を失ひて其儘溺死し翌朝に至り岩瀬機關少監以下下士卒七名のみ敵に救助されたり

又湯淺少佐の指揮せし相摸丸は當夜午前二時四十分頃小樽丸に次ぎて港外に達し徐航して港口附近に機械水雷を沈置しつゝ進入し午前三時三十分頃港口防材の切目より東岸に沿ふて水道に闖入し小樽丸の爆沈位置と殆ど並頭に來りたる頃船首を約北西に向け水道の右半一部を閉塞する如く完全に爆沈を遂けたり此に至るまで同船は素より敵の猛射を受けしも未だ乗員一人の戦死する者なかりしか爆沈後本船を退去せんとするに當り更に四周より敵に亂射せられ端舟は大抵撃破せられて用を爲さず纔に損破せる一艇を下して之に乗したるも漏水甚しくして忽ち轉覆し乗員は終に水中に四散し

て相失し湯淺少佐以下多くは此間に戦死し残員九名翌朝に至り敵に救助せられたり  
 右二隻の外港口燈臺の附近に爆沈したる佐倉丸並に黄金山の南岸に擱坐したる朝顔丸の最後の情況  
 に就きては生存者皆無なるを以て遺憾なから之を知るに由なし唯た小樽丸、相摸丸生存者が露兵よ  
 り聞知せる所に據れば頭部及腹背部に數創を負ひたる勇敢なる一大尉並十數名の重傷せる下士卒を  
 翌朝收容救助するを得たるも皆收容後死亡せりと又翌日海岸に漂着し露軍にて埋葬したる將校下士  
 卒の屍體約三十許なりしと云ふ

明治三十七年五月三日第三回旅順口閉塞の際生死不明となりたる者の中明治三十八年一月旅順開  
 城後第三回閉塞の當日戦死したるものと判明したる者次の如し

小樽丸筑紫海軍少佐野村勉●相摸丸殿島全湯淺竹次郎●朝顔丸松島全向菊太郎●佐倉丸淺間全白石  
 霞江●佐倉丸全機關少監寺島貞太郎●朝顔丸松島全清水雄菟●相摸丸須磨全矢野研一●愛國丸全海  
 軍大尉内田弘●朝顔丸平遠全糸山貞次●小樽丸筑紫全笠原三郎●佐倉丸鎮遠全高橋靜●相摸丸殿島  
 全山本親之●愛國丸春日大機關士青木好次●相摸丸殿島上等兵曹人見仲藏●全朝日全菊池竹次郎●  
 全全全今野喜美助●愛國丸八島全田崎榮次郎●朝顔丸日進上等機關兵曹田中清之助●佐倉丸淺間全  
 大野藤吾●小樽丸千代田一等兵曹根本庄吾●全愛宕全佐藤政助●相摸丸三笠全太田國治●全殿島全  
 田尻幸藏●朝顔丸日進全伊藤周助●佐倉丸淺間全藏重吉●相摸丸平遠一等機關兵曹菅野又次郎●  
 佐倉丸八島全湊治平●愛國丸春日全長谷川常五郎●相摸丸須磨全四竈知聰●朝顔丸松島全濱田岩熊  
 ●愛國丸笠置全安留治兵衛●相摸丸橋立二等兵曹島口一●佐倉丸八雲全佐野善次郎●小樽丸千代

田二等機關兵曹三吉惣吉●相摸丸平遠全宮林幸助●朝顔丸日進全平賀長藏●佐倉丸八島全町田福三  
 郎●遠江丸八島三等兵曹森下淺次郎●朝顔丸松島全笠方善郎●佐倉丸淺間全吉井好藏●愛國丸高砂  
 全岩本慶助●相摸丸須磨三等機關兵曹中川勘次郎●朝顔丸日進全阿部源吉●全全全三野品藏●佐倉  
 丸淺間全秋定秋太郎●全全全青山與太郎●全八島全林岩吉●全全全田中富五郎●全全全上原岩吉●  
 遠江丸吉野全野田京三郎●小樽丸千代田一等水兵寺田永作●全臺南丸全中野甚太郎●相摸丸橋立全  
 箕浦源藏●朝顔丸日進全龜谷善九郎●全松島全半田源一●全宮古全行原梅太郎●佐倉丸淺間全三宮  
 竹馬●全八雲全大塚榮三●愛國丸高砂全平出清治●遠江丸八島全中村市郎兵衛●小樽丸愛宕一等機  
 關兵根本秀雄●全筑紫全松島清太郎●朝顔丸日進全龜山彌吉●全松島全前田秀松●全全全手島謙  
 全全全安倍直●佐倉丸淺間全末永新八●全全全稻葉織作●全全二等機關兵石井儀一  
 又●小樽丸明石機關少監岩瀬正

右五月三日負傷し十月十九日旅順口露國病院に於て死亡

生死不明者中旅順口に俘虜と爲りて生存し我軍に收容せられ瘡血病のため病院船に入院せしめら  
 れたる者左の如し

▲相摸丸乗組 海軍上等機關兵曹佐野廣太●海軍一等兵曹岩石善三郎●海軍一等兵曹河野精藏●海  
 軍二等兵曹石川莊三郎●海軍三等兵曹森金作●海軍三等機關兵曹多田佐太郎●海軍二等機關兵竹  
 内夏次  
 ▲小樽丸乗組 海軍一等信號兵曹中野耕作●海軍二等機關兵曹能登原多三郎●海軍三等機關兵曹前  
 島貞之助●海軍一等機關兵米倉貢

生死不明者中旅順口に俘虜と爲り健在し我軍に收容せられたる者左の如し

▲小樽丸乗組 上等機關兵曹西田松五郎◎海軍三等機關兵曹龜井修吉◎全好永五郎  
 ▲相摸丸乗組 海軍三等機關兵曹牧野良造◎全財部喜藏

## 第八章 第二軍の遼東半島上陸 (五月五日)

陸軍省告示

我が陸軍の一部は五月五日を以て遼東半島に上陸を開始せり

### 第二軍上陸の援護 (五月五日)

(一)

五日午後六時廿五分前進根據地發射片岡第三艦隊司令長官報告要領

○五日第三艦隊集合地を發し豫定の如く行動し今日第二軍第一梯團を前進根據地に護送し唯今陸軍兵を掩護揚陸中也

支那船頭の言に依れば陸上の敵兵は約百を出てさるものゝ如し

○加賀丸は昨日午後三時頃第三艦隊集合地附近に於て坐洲せるも秋津洲の助力に依り浮出て五日午後五時無事前進根據地に到着せり

(二)

五日午後前進根據地發射谷第三艦隊司令官報告要領

我第七戰隊、第二十水雷艇隊及び香港丸日本丸の二隻は豫定の如く五日午前五時三十分遼東半島の前進根據地に着す

敵の監視兵らしき者數名其の沿岸丘山に居るを認めたるを以て少時之を砲撃したる後野元海軍大佐の率ゆる陸戰隊の上陸を命したるに時恰かも干潮に會し端舟陸岸に着する能はさる爲め皆身を隠らして海中に入り水深際に達する所約千米突の間を徒渉して午前七時廿二分陸に上り直に前進したるか敵に一彈を發せしめて高地一帶の地を占領し日章旗を其絶頂に樹立せり之と同時に赤城大島及び鳥海をして上陸點側方の陸岸に接近し牽制行動を採らしめたるに赤城は百餘名の敵兵を發見し直に之を撃滅して其の二三を斃したるものゝ如し陸軍輸送船隊第一梯團は午前八時五分日章旗の高地に翻へるを見て直に揚陸を開始したるに齊く深水を冒して最も活潑に上陸し尙ほ目下益す其の進歩を計らんかため棧橋を築設中にして我戰隊は全力を以て是等作業の援助に従ひつゝあり

(註) 梯團又は梯隊は何れも軍隊を前段に區分する一團を數個に區別する時便宜の爲に用ふ  
 戰隊及び陸軍揚陸の任務に與かれる艦長及び艇長は左の如し

司令官少將細谷資氏 大佐井上敏夫○同堀川良吉○中佐奥富衛○同魚馬徳孝○同四山保吉○同廣瀬勝比古○同藤本淳國  
 ○同久保田彦七○同山屋他人○同淺羽金三郎○同高橋守道○同山田太郎三○同内谷次郎(以上艦長)  
 司令兼艇長荒川守吾 大尉三宅大太郎○同中村正奇○同田尻雅二(以上艇長)

### 普蘭店の占領、旅順口孤立 (五月六日)

第八章 第二軍の遼東半島上陸

遼東半島上陸軍報告、大本營密電

我一支隊は五月六日少數の敵を撃退して普蘭店を占領し、鐵道電線を破壊して旅順との交通を遮断せり

第一節 第一軍の鳳凰城占領 (五月六日)

黒木大將報告、大本營密電

- (一) 五月六日騎兵斥候は鳳凰城東北に於て敵の騎兵を襲撃し死者三名、傷者數名を生せしめたり
- (二) 同日又我が騎兵は二臺子、三臺子、四臺子の敵を撃退し歩兵の一部隊を以て鳳凰城を占領せり
- 報告に依れば遼陽街道沿道の家屋は多くは焼失せられたり
- (三) 敵の退却途上に人馬逃走したる衛生材料遺棄しありたるを以て之を當軍に收容し彼我傷者の治療に使用、又敵の衛生部員數名は其希望に依り之を敵傷者の救護に使用せり
- (四) 敵は鳳凰城退却の際彈藥庫、火藥庫を燒きたり七日に至るも森林及び村落内等より出て來り吾れに投降する敵の敗殘兵續々として絶えず又敵自から埋葬したる墓地も尠からず土人の言に依れば去る二日擔架にて鳳凰城を通過せし敵の負傷者は約八百なりしといふ依て見れば敵の損害は確かに三千以上なりしならん

寬甸縣の占領

(敵の將校を捕虜にす)

十四日大本營密電、黒木大將報告

- 五月七日我が支隊は寬甸城を占領せり
- 十一日午前六時我歩兵の一部隊雪裡店より退却する敵騎三百餘名を攻撃し負傷せる中尉及び士卒二を虜にせり此の騎兵はザバイカルコサツク騎兵師團に属しあるチチンスキ聯隊なり、中尉はホルツワール大將の子にして近衛騎兵コンヌイ聯隊に在りしも希望によりて辭職したるものなり斯の如き士官は尙ほ多數ある由

(寬甸縣は九連城より分岐して賽馬集を経て奉天に至る通路上あり、雪裡店は鳳凰城より東家堡子、三臺子、四臺子を経て連山關に至る通路上あり、鳳凰城を去ること七里五町、雪裡店より通遼縣、連山關、甜水店、派支山、煉厝莊等を経てクロバトキンの本營なる遼陽までは約三十六里)

第二節 敵韓國安州を襲ふ (五月十日)

十一日大本營密電

五月十日安州守備隊は敵騎約二百の攻撃を受けたるも頑強に拒守して確實に安州を保持し平壤方面より派遣したる我應援兵は安州に到着せり、寧邊には若干の兵在るものゝ如し

安州來襲の敵と走らす (五月十一日)

十一日午後大本營密電、原司令官報告

第八軍 第一軍の遼東半島上陸



我が増援隊の一中隊は十日午後一時安州に着し早朝より戦闘中なる守備兵を援け、午後七時までに戦闘を繼續し、戦闘前哨を以て夜を徹したり

十一日午前六時過嘉山及び嘉州より將校の率ゆる一部隊安州附近に現はるゝに至り、敵は价川及び順川方面に退却せり

守備兵の一部は目下追撃中なり

我兵戦死四、負傷六、敵の死傷は五十以上に達し、捕虜下士一名あり、該捕虜の言に據れば敵はコッサンク騎兵にして其數五百ありと

### 同 後 報

十二日午後大本營著電

安州を襲ひし敵の死傷五十餘名中其死者將校一、下士二、卒十、敵の捕虜下士以下二、戦利品は軍刀、小銃、馬具其他多數なり

捕虜の言に依れば敵はマドリロッフ(?)の指揮に属する哥薩克騎兵第十五聯隊七百にして遼陽迄鐵道輸送を爲し同地にて下車し日々十里以上の行程を以て楚山、价川を経て安州に向ひ前進したり彼等の半数は日本と戦ふを嫌ひ士氣揚らず糶稊の十二日分を携行し來りたるも其他は奪掠に依れり

### 同 後 報

十四日大本營著電原口司令官報告

安州に渡來せし敵の大部は徳川方向に、其の一部(二百騎)は十二日价川に宿泊せること確實なるか如し

敵は戦死將校二、下士卒十二の死體を遺棄せるを以て我軍に於て之を埋葬せり、又敵の負傷者は三十五にして皆敵の擔架により輸送せられたり

我戦死者兵卒一、輸卒一、商人一、重傷兵卒一、輕傷下士卒四、人夫一なりと輕傷したる捕虜下士二名は京城に護送せし後内地に轉送せんとす

## 第九章 掃海事業の險艱

### 第一節 大窰口掃海

(我が水雷艇の爆沈)

五月十二日大窰口方面に出動せる片岡第三艦隊司令長官報告の要領

十二日午前七時四十五分艦隊大窰口沖に達して解列、嚴島、日進、宮古は陸上の威嚇砲撃を行ひ第二第六、第二十、第二十一の四水雷艇隊は海面の掃海を開始せり

第十二水雷艇隊は十一日夜旅順口封鎖に従事し今朝(十二日)八時三十分大窰口外に來會直ちに測量

に従事し其の間、煤密附近に現はれたる敵の歩兵約一中隊、騎兵約五十を砲撃を退せしに敵は二三の監視哨を止めて我動作を伺ふものゝ如くなりしも敢て發砲せざるを以て午後三時無事測量を終了せり

第四十七號、第四十四號の兩水雷艇は大密口内西岸に沿ふて敵狀を偵察しつつ掃海を行へり然るに大沾山半島八三〇呎山の北北西山麓を通過する電線を發見したるを以て砲撃掩護の下に海軍少尉堀田文雄は下士卒四名を率ゐ艇用端舟にて上陸し電柱五本を破壊し其電線を奪ひ歸れり、土民に就き大沾山の麓に九十五、徐家山方面に一百(?)尙其内方に一千の敵あることを聞知し煤密の東方約二千五百米突に進航して陸岸を砲撃せしに徐家山と五五〇呎山との中間より敵の歩兵約二百現はれ前進し來るを以て其近接を待ち砲撃せんとせしに敵は海岸を距る數百米突の地物に據り敢て前進せず暫時にして敵の騎兵十一、煤密の南西方約二千米突に現はれたるを以て之を砲撃逃走せしめたり我に死傷損害なし

宮古は深灣に進入しロビンソン角の北西八〇〇呎山に敵の哨所あるを發見し之を砲撃破壊したる敵は其後方に約十小隊伏在し居りたるも共に狼狽遁走せり

第四十八號、第四十九號の兩水雷艇は大密口東岸に沿ふて掃海中午前八時黒嘴子の南々西二地に於て敵の機械水雷を發見し百方之か爆沈を勉めしも其効なきを以て艇を後退せしめ更に爆沈を試みん

として作業中正午過二十七分該水雷艇俄然猛烈なる爆發をなし爲めに第四十八號艇は兩斷し約七分時にして沈没の不幸を見るに至れり各艦は直に救助艇を出し附近にありし水雷艇と共に其救助に盡力せしも終に十四名の死傷者を出すに至りしは實に遺憾に堪へず

黒嘴子と結線上に於て前記の外尙は機械水雷三個を發見し之を爆沈せり

艦隊は午後六時一と先作業を中止して集合地に歸港せり此行動中各艇隊は艦隊掩護の下に危険を冒し掃海及測量を遂行し且つ敵を撃攘して其交通機關を破壊し多少陸上の防備を偵知し得たるも不幸にして第四十八號水雷艇は敵の機械水雷の爲め沈没したるは深く遺憾とするところなり

第四十八號水雷艇に於ける死傷者左の如し

▲死者 海軍少尉陰山英榮△海軍上等兵曹成松壽太郎△海軍上等兵曹樋口重作△海軍三等機關兵曹鳥羽源藏△海軍一等水兵川勝柳吉△海軍一等水兵柴山善七△海軍一等機關兵横田彦兵衛  
▲負傷者 七名

### 大密口の掃海續行 (五月十四日)

#### (宮古艦の爆沈)

第三艦隊司令官片岡七郎大本營へ報告電報の要領

第五戰隊及第二水雷艇隊(第四十五號艇を缺く)は五月十四日早朝大密口沖に至り我艦隊掩護砲火の下に聯合掃海艇隊を放ちて掃海を續行す

敵は去る十二日ロビンソン角九〇〇呎の高地に在りたる監視哨を撤退したるもの、如くなりしも大沽山北東六三〇呎山の北東側に新に假設砲臺を急造して野砲約六門を備へ又同山の東側に掩堡を設け歩兵約一中隊を配備する等應急防備に努めたるもの、如く終日頑強なる抵抗を爲せり

此日掃海艇隊は終日敵の機械水雷敷設面内に在て敵の砲火を冒し能く其任務を遂行し水雷五個(内三個を撃沈し他の二箇を爆沈す)を破壊し又我艦隊の砲火は陸上の敵に多少の損害を被らしめたり然るに午後四時三十五分作業を中止し掃海艇を收容せんとするに當り敵の機械水雷不幸にも宮古の左舷艦尾に觸れ轟然爆發して艦體に大破を被らしめ死傷者二十四名(内戦死下士卒二)を出し艦體も亦廿三分時の後沈没するに至りたるは深く遺憾とするところなり

(註)宮古は通報艦にして排水量千八百噸、速力二十ノット大砲十二門、水雷發射管二門を有し、明治三十年吳にて過水し艦長は中佐内曾太郎なり

### 掃海續行 (五月十五日)

十六日午後五時卅五分大本營片岡第三艦隊司令長官報告要領

第五戰隊並に第六水雷艇隊(第五十六號艇を缺く)は十五日大宮口に至り豫定の如く掩護射撃の下に掃海を決行せり陸上に於ける敵の防備は野砲二三門を増加したる外昨日と大差なく屢は野砲及小銃の一齊射撃を以て作業に妨害を加へしも我に一の損害死傷なし

本行動中敵の機械水雷八個を發見し之を破壊す内五個を爆發したり發見せし敵の水雷の位置より判斷すれば敵はロビンソン角と沙碁との結線上に不規則に三線の水雷を敷設せしもの、如く同海面の安全を確實にする爲め尙掃海を續行する見込みなり

### 第二節 帝國軍艦の災禍 (五月十五日)

#### (吉野、初瀬の沈没)

東郷聯合艦隊司令長官より軍艦初瀬及び吉野の遭難に關し大本營に送せし報告の要領

#### 一、吉野艦の沈没

十五日午前十時五分發電

本職は茲に三度不幸なる變災の報告を進達するを遺憾とす十五日午前五時千歲司令官よりの無線電信報告によれば本日午前一時四十分頃第三戰隊は旅順口封鎖の任務より時、平山東角の北方海面に於て濃霧に遭ひ春日は吉野の左舷艦尾に衝突し深水甚たしく吉野は終に沈没し春日より出たる救助艇にて收容されたる者機關長以下約九十名也濃霧未だ霽れず痛心に堪

#### 二、初瀬艦の沈没

十五日午後六時發電

本日は海軍に在て最大不幸の日にして茲に又最も不幸なる報告を進達するの止むを得ざるに遭遇せり初瀬、敷島、八島、笠置、龍田は本日午前十一時頃旅順口沖にて敵を監視中初瀬は敵の水雷に罹り先

つ船機を破られ初瀬より曳船送れの電信に接したるを以て將に之を發送せんとするとき更に敷島より初瀬は第二の水雷に罹り終に沈没せりとの悲報來れり本職は之れを報告するに臨み只遺憾至極と云ふの外なし善後の處置に就ては夫々出來得る丈けの手段を盡し災厄を増大せざるに努め居れり營地附近濃霧未だ霽れず

### 三、救助隊の出発

十五日午後三時三十分發

敷島は初瀬遭難狀況報告の爲め今當地に歸港しつゝあり驅逐隊全部及二個水雷艇隊は敵の驅逐隊に當り且つ溺者救助の爲め午後一時三十分當地を發して旅順口方面に向へり霧未だ霽れず

### 四、初瀬遭難の狀況

十六日午後四時三十七分發

初瀬が敵の水雷に罹りしは老鐵山の南東約十海里の處にして當時同方面には霧なく其又附近に敵の驅逐艦もあらしりしと云ふ此の事實より判斷する時は敵は其の附近に機械水雷を沈置したるか或は又潜水艇を利用したるものならん初瀬は約三十分間を隔て二回の被害にて瞬時に沈没したるも敷島八島、笠置、龍田等にて梨羽少將中尾大佐以下三百名を救助收容せり初瀬沈没の頃敵の驅逐艇十六隻旅順口内より出來り我を追尾せしか會ま其地に來し明石、千代田、秋津洲、大島、赤城、宇治及高砂は

前記諸艦と協力して之を驅逐し初瀬生存者の收容を果すことを得たり以上の報告は混信の爲め文章不明瞭なる無線電信と今朝遭難報告の爲來りし龍田の少尉並に八島の艦載水雷艇指揮官の口頭報告等を綜合して製作したるものなり當地近傍霧未だ霽れず

### 五、各隊歸港

十八日午後零時四十八分發

昨朝濃霧霽れ各隊逐次入港す其報告により初瀬は全く敵の機械水雷に罹りしものなることを確かむることを得たり

種	數	種	類	船	水	量	通	水	磁	力	艦	長
初瀬	砲五十門、水雷發射管五門	一等驅逐艦	一五、二四〇噸	明治廿二年	十八節	大佐中尾雄						
會野	砲卅六門、水雷發射管五門	二等巡洋艦	四、二二五噸	明治廿五年	廿二節	大佐佐伯團						

## 第十章 遼東半島上陸軍の行動 (五月十六日)

六日午前大本營發

我上陸軍の五月五日遼東半島に上陸開始以來十七日に至る迄の行動に關する陸軍司令官報告の要領

一、上陸軍は五月五日上陸點に到着し海軍陸戰隊の掩護に依り午前八時三十分上陸を始む而して其揚陸には海軍の援助を享くること多し

上陸點には敵兵なく土民の言に依れば普蘭店には敵兵三百名普蘭店魏子窩街道上には約百騎揚陸地の前面には約六十騎魏子窩には二三百騎ありと云ふ

又電線の破壊の目的を以て魏子窩に、鐵道電線破壊の目的を以て普蘭店に各々一校隊を派遣せり

七日午後大本營電

二、普蘭店に前進したる我一校隊は昨六日午前八時普蘭店南方の高地に於て敵の騎兵七名歩兵若干あるを撃退したる後普蘭店の西南方停車場附近を占領せる約一百名の敵を攻撃せしめ之れと同時に工兵將校をして停車場南方に於て鐵道橋を破壊し且つ電線を切斷せしめたり

普蘭店附近にありし敵の兵力は歩兵二三百騎兵約百なるか如し

此の戦闘に於て我支隊の損傷は兵卒一名の戦死同四名の重傷あり敵の死傷詳ならず其歩兵一名を捕獲せり魏子窩に派遣したる我一隊は何等の抵抗を受くることなく電線を切斷するを得たり此の地に在りし敵は騎兵約二百騎にして五日朝西方に向つて退却し魏子窩電信通所の諸器械は悉く之を持去れり

八日午前大本營電

三、普蘭店に派遣せる部隊は昨七日歸還せり

普蘭店居民の言に據れば敵は該地の火藥庫に火を放ちて退却せり

又た普蘭店三十里堡(金州の北方約五里)間に於て再び交通機關を破壊する爲め一支隊を昨七日午後出發せしめたり

八日午前大本營電

四、普蘭店に派遣したる歸還後の報告に曰く該支隊普蘭店到達の際旅順方向より來りし列車内より我れを射撃せし故之に向て應射せしに彼れは止まり始めて赤十字の旗を出せり依りて射撃を中止し之を檢査せんとせしに命に従はず再び進行を始めたるを以て我も亦射撃を開始せしに彼は普蘭店停車場にも止まらず速度を早め逸走せり

九日午後大本營電

五、昨八日午後揚陸地の前面に於て我歩兵斥候は狙撃歩兵第十六聯隊乘馬歩兵斥候に出會し直に其二名を射撃せり

十日午後大本營電

六、鐵道電線破壊の任務を有する我か一校隊は昨八日午後八時半より同しく十一時の間に於て三十里堡の東北方約一里半に在る龍口附近の敵兵約百名を撃退したる後同地附近に於て鐵道を破壊し電線約二キロメートル(二箇所)を切斷せり此戦闘に於て我か戦死歩兵中尉桂勇喜下士以下三名戦傷兵卒九名

十三日午前大本營電

第十章 遼東半島上陸軍の行動

七、十二日敵狀搜索と交通機關遮断の爲め普蘭店瓦房店(普蘭店の北方約六里半)方向に差遣したる枝隊の報告に依れば普蘭店附近に在る敵兵力は歩兵約三百騎兵約五十騎にして其他處々に二十名内外の監視兵あり枝隊は普蘭店の東北に於て鐵軌を破壊し電線を切斷せり

十七日午後大本營密電

八、十五日七名より成る我が騎兵將校斥候は五十里堡(龍口の東北約半里)にて騎兵十餘名を襲撃し大尉一ト士卒數名を殺し七名を捕獲せり又た若干の歩兵及び騎兵より成る一部隊は蘇家屯(三十里堡の東北約半里)に於て北行する軍用列車と戰鬥を交わ之を南方に邀退し同時に龍口、蘇家屯間に於て鐵道電線の小破壊を爲せり  
九、上陸軍の我が一隊は十六日午後零時三十分より十三里臺附近にありし兵を攻撃して之を南方に邀退し午後三時四十五分九里庄(金州の東北約一里半)北方高地より陳家屯(金州の東方約一里半)に亘る高地を占領せり敵は退却尙金山(大和尙西林麓)附近にある其砲兵を以て我に向ひ時々放火す敵の兵力は歩兵三四大隊砲八門より其死傷詳かならず

十六日の戰鬥に於ける我が死傷者は將校以下百四十六名にして將校に死者なし負傷將校は重傷水谷砲兵少佐小木大谷歩兵大尉板倉砲兵中尉輕傷高梨歩兵大尉森下砲兵少尉の九名なり

第一節 十三里臺の戰後報 (五月十六日)

十九日大本營公報

十六日金州北方十三里臺の戰鬥に參與せし敵は速射砲八門を有し歩兵の數は未詳なるも狙撃歩兵隊五、第十四、第十六聯隊の各一部にして戰場に將校以下三十の死體を遺棄せり  
捕虜の言に依れば敵の死傷は三百以上なりと我衛生隊の收容せし敵の傷者は將校一、下士以下五なり  
捕虜の言に依れば金州半島に在る敵は歩兵第四師團の大部及び歩兵第七師團の全部にしてステツセ  
ル中將は防禦司令官として半島に在りアレキシーフは本月始め奉天に向て去れり又旅順には我海軍將校一、下士卒三十緊留し在りといふ

蓋平の砲撃、金州灣の掃海と砲撃 (五月十六日、十七日)

十九日午後九時三十分大本營密電

蓋平並に金州灣砲撃に關する東郷少將司令官報告要領左の如し

本職は明石、秋津洲、千代田、須磨、大島、赤城、宇治及び第十四水雷艇を率ゐて十五日早朝出發し、正午前旅順口沖に至りし時初瀬か二回敵の器械水雷に觸れ沈没せるの報に接したるを以て先づ大島、宇治及水雷艇隊をして豫定の行動を續行せしめ、他の諸艦を以て敷島、八島、笠置等と共に敵驅逐隊の我に向て來襲せんとするものを擊退し、又初瀬乘員收容の掩護を爲せり

夕刻に至り我隊は旅順口沖に至り豫定行動に移り渤海湾に侵入し十六日正午東塔山附近に近き、蘇州の附近一帯の沿岸を偵察し、陸上多少の敵兵あるを認め之を砲撃す、敵は直ちに遁走せり十七日午後我艦隊は掃海を行ひ砲艦をして灣頭に進み鐵道架橋及び恰かも此の時通過せんとする運兵列車其の他敵の建設物を砲撃せしむ、其の結果何れも多少の損害を興へたるものと認む

金州東方の偵察 (五月十九日)

二十日大本營報告、遼東上陸軍

遼東上陸軍の歩兵隊より出せし山田大尉は部下一小隊を率ゐて金州東方肖金山の敵情偵察を爲せしに其北方に於て敵の歩兵約二小隊と衝突し約三十分間激戦の後敵兵を撃退したり此戦闘に於て小野寺少尉外下士卒四名戦死し山田大尉外下士卒八名負傷せり敵の死傷は將校一、下士卒約四十乃至五十

第二節 大孤山附近の新上陸 (五月十九日)

(我軍又上陸す)

二十日大本營報告

我軍の一部五月十九日を以て大孤山附近に上陸を開始せり(大孤山は大洋河口にある人口約一千五百の一港にして九連城を去る三十七里二十町)

大孤山附近新上陸の援護 (五月十九日)

二十日大本營報告第三編隊司令官報告

本職は扶桑、平遠、筑紫、濟遠等を率ゐる陸軍輸送艦隊を護衛し、今十九日午前六時新上陸地點に達す先づ軍艦赤城をして陸岸の搜索砲撃を爲さしめ續て武光海軍大尉の率ゐる我陸戦隊をして上陸せしめたるに敵の抵抗を受くることなく、午前八時目的地點の占領を遂げ、國旗を其の高丘に樹立せり是に於て直ちに陸兵の揚陸を開始したるに近來稀有の好天氣に會し事業の進捗意外に著るしく本職隊極力是を援助しつゝあり

王家屯の小戦 (五月二十日)

廿一日大本營報告大孤山上陸軍報告 大孤山上陸軍

二十日午後七時敵の騎兵約一中隊大孤山北方約二里半に在る王家屯附近に現はれ我が歩兵の包圍攻撃を受け潰亂せり敵の死傷多数、大尉一名捕虜と爲せり、我が兵死傷無

同 後 報

(一)

日午後大本營報告大孤山上陸軍報告

遼東半島上陸軍の行動

五月廿日午後我が歩兵の爲めに包圍攻撃せられし敵は後貝加爾コサック獨立旅團の内ウエルフネウ  
シンスキー聯隊の第三中隊にして捕虜將校二、大尉一、中尉一、下士以下四  
敵の遺棄せし屍體大尉(中隊長)一、下士以下九、捕獲せし健馬九、死馬二十二にして敵兵捕獲の際我  
兵卒一名戦死し敵は岫巖及び沙里塞方向に敗走せしものゝ如し

(二)

廿四日大本營大孤山上陸軍報告

廿日王家屯の附近に於ける戦闘に於て敵の將校は或は戦死し或は捕虜となり部下は全く支離滅裂し  
其の後戦場附近の部落に於て追々敵の死傷者を發見し又土人の言に依れば馬匹なく殆んど軍人の態  
度を爲さざる敗兵の逃走するを見たりと察するに敵の中隊は全く潰滅に歸したるものゝ如し

第一回旅順強行偵察 (五月二十日)

二十日午後十二時五十分大本營東郷聯合艦隊司令長官報告要領

砲艦の一隊及び驅逐艦水雷艇の數隊は二十日午前一時旅順口に迫り、要塞の猛烈なる十字砲火を蒙  
り、強行偵察を試み其の目的を達し天明に至り引揚げたり  
砲艦隊に多少の被弾ありしも著るしき損害無く、又死傷者無し

追加

我驅逐隊中曉は敵の破裂彈を被り戦死者海軍大尉末次直次郎以下二十四名を出せり其他は凡て無事  
なり

(註) 強行に參與したる重なる將校次の如し

中佐林三子雄 ○少佐田中鏡耶 ○少佐福田昌輝 ○大尉遠矢勇之助 ○同大角岑生 ○中尉齋藤國男 ○同中村良三 ○同松島長範 ○中佐  
井出光輝 ○機關少佐沼井義次郎 ○大機關士富安瓦一 ○中機關士藤井光五郎 ○中機關士徳永嶺

頭道溝の衝突 (五月二十一日、第一軍)

廿四日大本營黑木大將報告

廿一日朝寛甸の東北約三里頭道溝にて我か歩兵一小隊敵騎二百と衝突し之れを驢陽邊門方向に擊退  
せり敵の死者二十、馬四、我兵死傷なし

山城子附近敵將の捕獲 (五月二十一日、第一軍)

廿三日午前大本營黑木大將報告

湯山城東南の山城子附近にて我か補助輸卒隊分隊長外五名は廿一日チ、シンスキー第一聯隊第四中隊  
一等大尉スウヤトボルクミルスキー及び軍曹一を捕獲せり、彼等は偵察のため徒歩にて深く我か後  
方に進入したるもの也

(湯山城は九連城、鳳凰城の間にありて九連城より八里五町半、鳳凰城より八里廿五町)

高家屯附近に敵を鑿にす (五月二十一日)

遼東半島上陸軍の行動



某歩兵隊より大石橋子(土城子より沙里寨に通ずる路上)に派遣せる將校斥候は昨二十一日午後五時頃高家屯(大石橋子の南約二吉羅)附近にて敵の敗軍兵約十騎に遭遇して之を屢にせり又某歩兵聯隊より五道溝(土城子の東南約四吉羅)に出る將校斥候は同地の南方約二吉羅にある張家屯にて敵騎二名及馬七頭を捕獲せり

### 八道河堤附近の衝突 (四月二十五日、第一軍)

二十六日大本營黑木大將報告

昨日大堡附近の戦闘後該敵騎は八道河堤附近を防守しあり

大甸子より進みし歩騎兵より成る一小枝隊は午後一時過ぎより之を砲撃せり、敵は混亂して退却し昨夜鐵佛寺附近に停止せり、我は前後兩回の戦闘に於て馬三頭負傷せしのみ敵は手馬三頭殘しありし

土人の言に依れば敵の死者三、傷者十八を運搬し去りしと

昨日午前輜重兵の下士斥候は湯山城西南方約三里後小東港にてウエルフネウジンスキー第一聯隊第一中隊中尉セルコフ及兵卒一、馬一捕獲せり

廿三日王家溝にて我兵斥候の殺せし中尉はチ、ンスキー第二聯隊のジノビウイフにして死體は同地に埋葬せり

## 第十一章 南山の大激戦、金州占領 (五月廿六日、第二軍)

### 第一節 金州攻撃軍の行動 (第二軍)

廿一日午後大本營電撃軍司令部の報告要領

金州附近の敵は時々緩慢なる射撃を行ひ我を誘致せんとするもの、如し

自撃する所によれば金州南山には十珊以上の榴弾砲四門、九乃至十五珊舊式加農十門、十二珊速射砲二門あり尙ほ大なる野戦砲臺あるも備砲不明なり

山上には少くも十個の砲臺或は堡壘あり其首線は北方及び東北方に向ひ鐵條網及び地雷は北麓及び東麓にあり前記砲の種類数は敵の射撃により偵知せしものなり又彈片により判するに十珊五及八珊五の舊砲あり十珊五の彈丸は八千五百米突に達せり

(二) 二十二日午前密電

攻撃軍は本日廿二日豫定の行動に就く

(三) 二十三日午前密電

攻撃軍は金州に向ひ前進は豫定の如く實施しつつあり

(四)

二十四日午前密電

攻撃軍は本日(廿三日)九里庄、陳家屯、寨子河の線の後方に集合し參謀將校をして敵の陣地の偵察を爲さしめ又本夜(廿三日)より明朝に亘りては砲兵陣地及び其進入路の偵察を爲さしむ

(五)

二十四日午前密電

本日(廿三日)爲したる偵察の結果左の如し

敵の右翼和尚島には約八門の重砲海に面しあり砲種不明其内若干門は東北馬家屯方向を射撃するを得

柳樹屯附近には大なる倉庫あり

南關嶺の東方高地線には短少なる敵の散兵壕の如きものを見る

七里庄南方後營、左營、洋砲營には探照燈ありて時々我陣地を照明し今日まで敵の發射せし砲彈の破片によれば二十珊砲、十五珊短加農、十珊半加農、八珊加農、七珊六速射砲等なり

又本日偵察將校に向ひ徐家山砲臺に向ひ射撃せし砲彈は曲射砲にして其口徑九珊位なり南山東側閭家屯の附近より山の山麓を経て西北に繞る劉家店の東北約千米突までは一面に鐵條網あり之より左翼には防禦工事を見す

金州には依然少許の小砲兵あり

(六)

二十五日午前密電

艦隊よりの通報によれば艦隊の一部は明廿五日我軍の攻撃に連繫して金州の南山を攻撃すへしと

(七)

二十六日午前密電

攻撃軍は本日(廿五日)豫定の如く第一線を龍王廟、三里庄、陳家店、王家屯の線に進め午前五時半頃より同九時に涉り金州を攻撃し又南山の敵砲と交戦す

金州附近の敵情に變りなく敵砲兵は盛に我艦を搜射し目下尙ほ時々我を砲撃中なるも我損害大ならず

軍は明朝金州南山の敵を攻撃せんとする

軍の攻撃に連繫して金州附近を砲撃すへき艦隊の一部は本日來らす

(八)

二十六日午後密電

彼我の砲戦は廿六日早朝より約五時間に涉り其間我軍艦三隻も金州灣に至り我に協力し又敵砲艦一艘は大連灣にありて我左翼を砲撃す而して今や砲兵戦酣にして金州のみは午前五時廿分我が有に歸したり

(九)

二十七日午後四時密電

攻撃軍は廿六日劇戦の後南山を占領し目下敵を追撃中

### 金州攻撃の陸兵掩護

二十七日午後一時廿五分大本營東艦隊司令長官報告

今當集合地に歸航しつゝある西山分遣艦隊指揮官よりの無線電信に據れば分遣艦隊（筑紫、平遠、赤城、鳥海並に第一水雷艇隊）は一昨日二十五日午後六時金州灣に達し二十六日黎明より第二軍に協力して蘇家屯高地の敵壘を砲撃し就中赤城、鳥海の二艦は其淺吃水を利用して終日戦闘に従事せり  
午前十一時に至り敵は蘇家屯の高地より退却せしも尙ほ其後方收容陣地より發砲を繼續し我陸軍は夕刻迄敵壘に追るを認めさりしも午後八時之を占領するを見たり

我艦隊の損害は戦死鳥海艦長林三子雄外死傷九名にして艦船には差したる損害もなし

（註當日の激戦に陸軍を援助したる艦隊の各艦艇左の如し）

筑紫艦長西山保吉○平遠艦長淺羽金三郎○赤城艦長藤本秀四郎○海軍長林三子雄○水雷司令長官關重孝○大尉松本鶴寛○  
同和田博愛○中尉平真雄

### 同 詳 報

二十七日午前十時三十分大本營東艦隊司令長官報告

唯今入港の第一水雷艇隊か齎したる西山分遣隊の戦報左の如し

分遣艦隊は二十五日正午金州灣に達せしも波高かりしを以て蘇家屯敵壘の攻撃を見合せ一地に假り風波を避けたり

廿六日午前五時頃より天候漸次靜穩に復し我陸軍は黎明より砲戦を開始せしを以て午前六時赤城、鳥海及第一艇隊も干潮水淺さきに拘らす海岸に近て之と協力し連續砲壘を砲撃せり

此戦闘の初朝敵彈鳥海の前甲板を擦過し爲めに分遣長海軍大尉河野通雄負傷し下士以下二名戦死二名負傷す午前八時海面より望見し得る敵の砲壘は一時殆んど沈黙せしを以て砲撃を中止し更に第一艇隊の一部はシャオへ河附近の鐵道線路を砲撃し他の一部は漲潮に乘し航路を測深しつゝ筑紫、平遠を嚮導して海岸に近づき我陸軍右翼の一部が砲火を冒して淺水の海中を徒涉し壯烈に前進するを掩護せり

午前十時より分遣艦隊は再び全力を以て敵壘を砲撃し同十一時敵は殆んど退却し我陸兵既に蘇家屯高地の下に達せる如くなりしを以て再び砲撃を中止したり

筑紫、平遠は落潮に際し吃水許さざる爲め漸次沖合に出て赤城鳥海及び水雷艇隊の一部は依然留まりて敵を監視せり

此間我艇隊は我陸軍の右翼と通信連絡するを得て蘇家屯の敵兵は既に全く退却せしも尙南關嶺附近にある敵の陣地を砲撃するの要あるを知り更に赤城、鳥海をして直に之を砲撃せしむ此砲撃中敵砲鳥海の砲側に爆發し艦長林三子雄戦死し少尉佐藤巳之吉外下士卒三名負傷す但し艦体には損害なし  
其他の艦艇には一も損害なし

午後七時三十分分遣艦隊は戦闘を止め艦隊集合地點に向け歸航せり

## 南山の大激戦 (五月二十六日)

廿七日午後大本營電金州攻撃軍報告

軍は本日(廿六日)午前五時十分金州灣を略取したる後南山の敵を攻撃し先づ露天堡壘の砲兵を沈黙せしめ午後七時遂に該山(南山)を占領せり

敵は南山の堡壘砲臺を圍繞するに圓蓋を有する塹壕を數層に構築し堅固の副防禦と斬新の兵器とを有し頑固の抵抗を試み我軍の行ひたる數回の突撃も功を奏せず午後三時最後に行ひたる突貫に屈して遂に其の陣地を捨て南關嶺方向に退却し金州の一部大房身の停車場は敵の地雷の爲め破壊せられたり

我將士は本日(廿六日)能く十六日間の猛烈なる銃砲火を冒して敵陣に突入したるの勇氣は特に之を報告す

此の攻撃に我軍艦四隻參與し敵砲臺の砲撃に有力なる援助を與へたり

## 大激戦詳報

二十八日午前大本營電金州攻撃軍報告

攻撃軍は豫期の如く廿六日早朝より南山の敵を攻撃せり

然るに該高地の防禦工事は半永久にして其の備砲の如きも大小口徑約十五門の外速射野砲二中隊や有し歩兵を二團若くは三團に、銃眼と掩蓋を有する散兵壕に配備し、其の要點には機關砲を備へ、頗る頑強なる抵抗を爲せり

我軍は之に對して全野砲を配列し先づ敵の砲臺に向て射撃を開きしに午前十一時頃敵の重なる砲臺は沈黙せり、但し速射砲は早く南關嶺の高地に退き、夜に至る迄我を射撃せり

我砲兵は敵の散兵壕に向て全力を集注し我歩兵は小銃射程内に入りて猛烈なる射撃を行ひ敵前四百乃至五百米突の線にまで接近せり

然るに前面には鐵條網、地雷及び斬壕あり且敵の歩兵射撃殊に機關砲の射撃は少しも萎靡せず更に約二百米突に近接し障礙物の間隔に向て數回行ひし突進も將校以下皆敵前二三十米突の間に斃て敵線に行進するを得ず更に砲兵を以て準備射撃を行ひ續て夕刻に及び最も猛烈なる砲火を施し之と同時に最後の突撃を行ひたるに幸うして一方を破り之より全線高地により終に敵を撃退して陣地の主を爲ることを得たり

此日我砲艦四艘金州灣より我に協力して砲臺を砲撃し敵の砲艦一艘は大連灣にありて我左翼を砲撃せり

此の攻撃中尤も幸ひなりしは南山の東麓にある地雷の電線を発見して之を切斷し、爆發するを得るらしめたるにあり

敵は堡壘内及び最後の戦闘に於て約四百の死者を遺棄せり、堡壘及び砲臺に備付けある砲は悉皆之を鹵獲せり

## (二)

二十八日午後五時五分大本營電報攻撃軍戰鬥報告

軍は豫定の如く廿五日を以て攻撃準備を終り同廿五日夜半より運動を起し第四師團を右翼に、第一師團を中央に、第三師團を左翼に並列し、金州南山へ向て前進せしむ此夜迅雷風雨咫尺を辨せず運動頗る困難なりき同時一部隊を以て金州城を攻略せしむ  
廿六日午前四時三十分砲火を開始すへき筈なりしも濃霧のため五時三十分全砲兵は内山少將の指揮を以て南山に向て砲撃を開始し、同六時頃より我艦隊の四艘は金州灣より此の砲撃を援助せり  
敵は全備砲を以て之に應戦し茲に激烈なる砲戦を交へ約三時間の後、南山の敵火大に減衰せり  
茲に於て各師團の歩兵は前進を起し、一進一止し敵の砲火を犯し、敵の第一線を距る約三百乃至五百米突の地に達せり  
午前十一時敵の露天砲は我猛烈なる砲火により悉く沈黙せるも遠射野砲約二中隊は疾く退去して畢

關嶺の高地に據り終局に至るまで時々我を射撃せり

午前十時頃敵の砲艦一艘和尚島砲臺東方に來り午後一時頃迄我第三師團の左側背を砲撃し且つ小蒸氣艇五艘に搭載せる陸戰隊を紅土涯附近に上陸せしめんとせしも我一部之に向ひしを以て遂に歸還せり

又南山南方大房身に在る敵の九瓏知米砲四門は午後七時頃迄第三師團に向て砲撃を繼續せり、我左翼に在る砲兵之と應戦せしも距離遠くして十分の効力を顯はす能はず

敵の占領せる南山の障地は峻峻なる高地線半永久築城を施し、大小砲約七十門、機關砲約八門を備へ連續圍繞せる數層の堡壘線に銃眼を穿ちたる掩蔽部を作り其前方には多數の地雷及び鐵條網を設け且つ此の間隔を補ふには多數の機關砲を以てせり

之に對する我砲兵は全力を擧て之が破壊に努力し又屢は障地を交換して敵に近接し以て歩兵の前進に勢力を與へたりしも、敵歩兵の抵抗は頗る頑強なりしを以て午後五時に至る此の時歩兵のため未だ突撃の進路を開くに至らず

又我左翼にある第三師團は敵の包圍を受けるのみならず、敵は漸次其歩兵を左側前に増加し且つ南關嶺にある敵砲二中隊は此攻撃を援助し益す師團の左側に迫らんとす、而して我が携行砲兵彈藥は將さに盡んとし、戦闘は永く繼續すること能はざるに至れり、依て止むを得ず歩兵をして損害を顧み

す強襲を行はしめ砲兵は補充し得る彈藥を盡して敵を猛射せしめたり。我第一師團の歩兵は意氣衝天の勇を鼓して敵陣に向ひ突撃せしも敵の猛烈なる瞰射に依り多数の死傷者を生して前進を繼續することを得ず頗る苦戦に陥りしか恰も好し此時金州灣にある我艦隊は敵線の左翼に向て更に猛火を開き砲兵第四聯隊に協力し敵火の撲滅を努め、第四師團は此機に乗し全力を盡くして敵の左翼に迫り先づ高地線に進む、茲に於て第一及び第三師團は之に協力し全線を擧て勇奮突入し累々たる死屍を踏むて敵壘に肉迫し劍尖相接するに至るまで激戦して遂に南山を攻略して各堡壘上に國旗を翻へせり時に午後七時過なり

敵は潰亂して旅順方向に退却せり、此退却に當り敵は大房身の火藥庫を爆發したり

軍は一部を以て敵を追撃したる後、全隊戰場に露營す此の時士氣大に振ひ萬歳の歡呼諸方面に起り砲兵は全力を盡して敵を追撃す

我に對せし敵の兵力は野戰軍約一師團、野戰砲二中隊、要塞砲兵海軍兵若干也、察するに敵は旅順及大連灣を掩護するため爲し得る限り南山の陣地に據り我前進を防止せんことを努めたるものにして尙ほ其の防禦工事を増加するの計畫ありしか如し

敵の死傷は不明なるも戰場に遺棄せし死體のみにても五百名を下らず

捕虜は將校以下若干名、又戦利名は砲六十八門、機關砲十門、發電用蒸氣機關一個、電氣燈三個、ダイ

ナモ一一個、地雷發鐘約五十個其の他小銃及び彈藥諸材料等なり、詳細は目下取調中  
我軍死傷將校以下約三千五百名

露に臨みて海軍の有力なる援助に對しては深く其の好意を謝す

### 南山の死傷者

二日午前九時廿五分大本營電報第二軍司令部報告

去二十五、六兩日の金州、南山に於ける第二軍の戦闘死傷者左の如し

- ▲第一師團(戦死)歩兵大尉近藤長重○全福山房五郎○全野本澄○全唐渡貞吉○歩兵中尉岡村誠○全大木二三郎○全鈴木順平○全佐藤虎太郎○全鹽澤登四郎○全桑原矢六郎○歩兵少尉村岡務久治○全奥村真耶○全長崎隆次○全佐藤壯下士卒 二〇一名(重傷)歩兵大尉松永直亮○全宮本秀一○全生沼昭二○全淺野丈夫○全蟻坂七五郎○全寺崎由之助○歩兵中尉乃木勝典○全添田壽雄○全三澤活水○全松下秀夫○全菅谷三千三○全三原孝吉○全山吉盛一○全笠原民次郎○歩兵少尉横川良助○全金子因之○全江澤辰美○全今井與志雄○全林林之助○全武藤彬(輕傷)歩兵大佐小原正恒○歩兵中尉弓削滿二○全佐藤一也○歩兵少尉清水喜重○全岸孝一○全野村素一○全長濱顯達○全須知精一○全里見正彦○全久米川淺一郎○全新納豊二(微傷)歩兵少佐寺田鋤類○歩兵中尉大熊伸二郎○全澤木外雄○全真々田彰義○歩兵少尉山崎忠藏○砲兵少尉伊藤藤三○全小澤政一(負傷)歩兵特務曹長三名、全下士卒一一〇一名

▲第三師團(戦死)歩兵少佐淺田敢○歩兵大尉堀内久次郎○全平田泰道○歩兵少尉玉田經康○全相原都之助○歩兵特務曹長二名、下士卒一二七名(重傷)歩兵大尉鈴木義雄○歩兵少尉中澤郷○全中村

彌七(輕傷)歩兵大尉田村勝市○全加藤忠雄○全佐野鶴松○全羽入三郎○全野田久吉○歩兵中尉今枝内藏之助○全前澤尚正○全土川省三○全石黒豊明○全佐々木菊松○歩兵少尉野源賢輔○全安藤成○全金田守道○全青木源治郎○全山田政一○全村井清規○全竹内元三郎○全猪飼要○全棚木伸○全松原幸七○砲兵少尉水原源治○全仙波久修(負傷)歩兵特務曹長四名、全下士卒一一四八名  
 ▲第四師團(戦死)歩兵中佐藤岡鉄次郎○歩兵少佐高田宗城○歩兵大尉北村他喜藏○歩兵中尉松岡包久○全廣谷儀一郎○全石津完造○全福水作十郎○全佐藤幸次郎○歩兵少尉芝川又三郎○全宮津隆成○全榮田作○全藤井辰造○全麻生賢幸○歩兵特務曹長一名、下士卒三六五名(重傷)歩兵大尉岩永徳太郎○全長谷川直敏○全河田惠長治○全岡村捨吉○全山久瀬乙五郎○歩兵中尉大村有隣○全田中嘉一○全奥野光雄○歩兵少尉大塚元固○全北村健藏○全梅本馨○全井上清○全慶松恒次郎○全松江章○工兵中尉若山善太郎(輕傷)歩兵大尉安井勝弘○全水郡富三郎○全戸井英太郎○歩兵中尉江藤源九郎○全山崎留次郎○歩兵少尉麻野孝一○全村治昭○全上田彪○全粕藏之助(微傷)歩兵大尉堤加雄○全田門謙一○歩兵中尉土肥敏吉○全金田參郎○全新徳太郎○歩兵少尉藤田謙二○全多川陸之允○全岸俊○全大迫三次(負傷)特務曹長(隊號未詳)四名全下士卒一〇四四名  
 ▲其他の部隊(重傷)砲兵大尉窪田稔○全小室静○歩兵中尉水戸常太郎(輕傷)砲兵中尉梅津亨(戦死)工兵大尉丹羽爲男(負傷)砲兵特務曹長一名、全下士卒五〇名、戦死下士卒二〇名、死傷合計四千二百〇四名、内死將校三十三名、特務曹長三名、下士以下七百十三名(傷)將校百名、特務曹長十二名、下士以下三千三百四十三名

右將校負傷者中へ更に左の如く追加公示せらる

▲第三師團工兵中尉佐藤憲○全渡瀬俊 ▲第四師團工兵少尉熊勢恒三郎

### 敵方の死傷

十二日大本營電 南山攻堅軍報告

通る廿六日南山附近の戦闘に於て敵の遺棄したる死體は軍政委員憲兵を補助として丁寧に埋葬せしか其数左の如し

將校 ● 十

下士卒

六百六十四

此他各隊の露营地附近に於て埋葬せし者二三十を數ふへきも其員數精確ならず

### 第二節 金州半島の封鎖 (五月二十六日)

東郷司令長官左の宣言を發す

本官は帝國政府の命を受け明治三十七年五月廿六日清國盛京省遼東半島南部即ち貔子窩より普蘭店に至る一直線以南の沿岸を帝國軍艦の充分なる兵力を以て封鎖し之を維持する事並ひに封鎖を破らんとする一切の船舶に對し國際法及び帝國と他の中立諸國との條約に於て許容せられたる一切の強制手段を用ふべきことを茲に宣言す

帝國軍艦三隻に於て

聯合艦隊司令長官 東郷 平八郎

明治三十七年五月二十六日

### 封鎖の效果

(五月二十六日)

二十八日東郷聯合艦隊司令長官報告

第十一卷

南山の六波戦、金州占領

一昨廿六日第六戰隊が旅順口の敵を監視中旅順より出づるジャンクを臨檢し露國陸軍々人等より發  
送せる數十通の書翰を押收したり

其の中一將校の書翰中に五月二十六日露國驅逐艦(原文は複数なれば二隻以上ならん)旅順口外にて  
爆發沈没せり又他の書翰中に、初瀬は其の遭難の前夜露國某海軍大尉の指揮せる驅逐隊を以て敷設  
したる器械水雷に罹りたるものなることに付稍や詳細の記事を載せられたり

南關嶺の占領 (五月二十七日)

二十八日午前大本營電金州攻撃軍報告

軍は今朝(廿七日)午前十時三十分中村少將の指揮する一校隊歩兵砲兵工兵より成るを派遣し南關嶺  
を占領し主力は本日(廿七日)南山附近の諸部落に宿營し諸隊の整頓を計り準備出來次第豫定の線に  
向て前進せんとす

敵は旅順方向に退却し其の一部は今朝三十里堡(青泥窪の西北方)の停車場を守備しありしか午前十  
一時頃同停車場を燒きて旅順方向に退却せり

昨廿六日の戰闘に於ける戦利品の主なるもの大小口徑砲約五十門敵の遺棄せし死者のみにても約四  
百我が死傷約三千内外にして取調へ中

勅語奧大將に下る

第二軍ハ海軍校隊ト協力シ敵ノ死守シタル金州城及ヒ其南方要害ノ地ヲ力攻シ露ニ之ヲ陥レ以テ旅順口ノ咽喉ヲ扼シ且ハ我軍  
軍將來行動ノ進歩ヲ堅固ナラシム朕深ク爾等ノ忠勇ヲ嘉シ尙益ス奮勵シテ終局ノ勝利ヲ收メントトす

奧大將の奉答

金州及び南山附近の要地に據り堅固に防禦工事を施し巨砲を備へたる敵を擊潰し得たるは一に 陛下の御機成の致す所のみ然る  
に今や奮進なる 勳勳を下し賜ふ臣等感激の至りに堪へず益々奮勵して終局の効果を収めん事を期す

柳樹屯の占領 (五月二十七日)

(二十六日の敵軍兵數)

廿八日午後大本營電奧大將報告

二十六日我に對せし敵は歩兵第三、第四、第五、第十二、第十三、第十四、第十六聯隊關東要塞砲兵、鐵  
道護境兵五中隊(?)及び若干の海軍兵なるか如きも其兵力は未だ不詳右の敵兵は二十六日夜三十里  
堡に露營し夜半より汽車にて旅順方向に退却せしもの、如く目下前線堡北東に其跡を止めず  
又黄金山砲臺には敵兵もなく備砲もなし

中村校隊は二十七日柳樹屯を占領し同地に於て火砲四門同彈藥若干、鐵道貨車(有蓋五、無蓋四十二)  
を鹵獲せり

青泥窪の占領 (五月末)

三十日午後大本營電奧大將報告

第十一章 南山の大激戰、金州占領



其後の報告に依れば青泥窪には完全なる倉庫兵營等百餘棟あり電信局停車場も無事にして客車貨車を合せ二百餘輛は使用し得へし但し附近輸送の小橋梁は凡て破壊しありと又船渠及棧橋も完全なるものあるも大棧橋は既に破壊されて海中に沈み居り船渠口には小蒸氣船を沈めたり

### 李家屯の小戦 (五月三十日)

三日午前大本營發着遼東牛島上陸軍報告

我騎兵隊は五月三十日午後零時三十分頃普蘭店北方約九里許りなる李家屯附近に於て敵の歩兵一二中隊、騎兵五六中隊、騎砲兵一中隊と衝突し、交戦約二時間の後遂に之を北方に撃退せり我死傷者左の如し

△戦死陸軍騎兵中尉野村盛義△重傷全少尉平塚小太郎△輕傷全中尉楠木平助△全全少尉佐藤鐵一  
△全全少尉今仁一匡△戦死下士以下二十五△負傷下士以下三十三

### 我騎兵隊の戦闘 (五月三十日)

四日午前大本營發着遼東牛島上陸軍報告

我騎兵隊は五月三十日正午頃曲家屯に於て敵の騎兵得利寺附近に在るを知り之を撃破せん爲め騎兵より成る一部隊をして先づ田家屯にある敵騎約三中隊あるを攻撃せしめ敵兵退却するや騎兵一部隊をして之を追撃せしめしか此の追撃隊は張家屯にて更に新たなる敵騎二中隊をも併せ破り龍王廟に

出てたる時、敵の歩兵五六中隊、騎砲兵一中隊の陣地を占むるに會し、騎兵隊は再ひ之を攻撃し午後三時敵を得利寺方向に撃退せり

敵はシベリヤニコサツク騎兵第八聯隊に属するものにして此夜我騎兵隊は觸接して得利寺附近に停止せり

(註)曲家屯より得利寺までは三里あり

### 曲家屯の小戦 (六月三日)

四日午後大本營發着遼東牛島上陸軍報告

我騎兵隊は六月三日曲家屯附近に位置して敵偵察中午後零時三十分頃より漸次敵歩兵の壓迫を受けるに至りしより急に各隊を緊急集合して陣地に就かしむ午後五時半頃まで歩兵約二千、騎兵若干砲兵一中隊より成る敵を拒止して遂に之を得利寺方向に撃退せり我損害は下士卒即死四、負傷四なり

### 千家屯の掩撃 (六月五日)

七日午前大本營發着遼東牛島上陸軍報告

金州街道上范家屯にありし一小部隊は六月五日朝大孤山西北約十キロメートルにある千家屯に於て敵の騎兵約三十を掩撃し之を西北方に潰亂せしめ兵卒二、馬匹十二頭を捕獲せり此敵は西伯利亞口

第十一章 南山の大戦、金州占領

ツク第五聯隊の第二中隊に属するものなり

## 第十二章 第一軍の進撃

代家堡子に敵を捕獲す (五月二十七日)

廿九日午前大本營者黒木大將報告

廿七日午後六時高麗州の南西代家堡子に於てアルグレンスキー第一聯隊の少尉ロゴフスキー及び兵卒七を捕獲せり

此者等は賽馬集より徒歩にて偵察に來りしものにて其長官はレネンキャンプなり

又此少尉は元と龍騎兵第一師團に属し同師團の九名の士官と共に四月十四日ベナルスブルクを發し五月四日遼陽に下車せしものなり

少尉の言に依れば過日來敵の將校斥候我背後に來り捕獲せられ又は死傷せしもの若干あり稀には歸還するものあり此の冒險的行動は長官の嚴命に依ると雖も又ゲオルギー勳章を得んか爲め自から進んで出でしもの少からすと

本日遼陽上單家舖子に於て我將校斥候は徒歩せる敵の射撃を受け卒一、馬二負傷せり敵は原家舖子北方高地に退却せり其數約二十なり

### 遼陽邊門の占領 (五月二十八日)

三十日午前大本營者 黒木大將報告

吉田枝隊は廿八日午前十時より遼陽邊門にある敵騎二千(砲兵なし)を攻撃し同十一時半此を驅逐して追撃中他の一部到着して之に加はり全く該地を占領せり

敵の主力は賽馬集方向一部は掛牌嶺方向に退却せり

下士以下戦死三、負傷二十三、此の戦闘に參與したる他の部隊一は下士以下戦死一、負傷六なり

本日午前九時遼陽街道上の我騎兵斥候は金家堡子に於て敵騎八を射撃し二を斃し二を捕獲せり

又海城街道上の歩兵斥候は午後一時砂子崗北方約一里に於て敵騎五に遭遇し其一騎を馬と共に斃せり

### 韓國文川方面の衝突

四日午後大本營者電原口少將報告

元山より敵狀偵察のため文川方向に出せし歩兵の一隊は三日午後一時騎敵約二十三と文川の南方に於て衝突し其の五名を斃し、之を北方に驅退せり

### 新開嶺の小戦 (六月四日)

五日午前大本營者電黒木大將報告

第十二章 第一軍の進撃

豐陽城にある我隊は六月四日賽馬集方向偵察のため一小部隊を派遣したりしか午後二時頃此の偵察隊は新開嶺の西方に於て敵騎五六百に遭遇して之を撃破し敵に多大の損害を興へたり  
我れに下士以下戦死一、輕傷三ありしのみ

賽馬集の占領 (六月七日)

九日午前大本營發給大孤山上陸軍報告

(一)

我一部隊は本月七日賽馬集附近にありし敵を四方拉方向に撃退して午後三時賽馬集を占領せり  
同地にありし敵は歩兵一大隊、砲二門なり

我損害は戦死卒三、負傷下士以下二十四

敵の遺棄せし死傷二十三、捕虜將校二、卒五、其の他士人の言に據れば敵將校二下士卒七十負傷せり

(二)

通路傍方向に派遣したる我一部隊は本月六日午前林家登附近にて敵の歩兵五六十に遭遇し之を撃退せり

又七日午後五時過より約二時間戦闘の後、隈家石附近にありし敵の歩兵約六中隊、騎兵三百を通路傍方向に撃退せり

敵の死傷七八十

我戦死下士以下四、負傷四十六

岫巖の占領 (六月八日) (第一軍并に大孤山上陸軍)

(一)

十日午前大本營發給大孤山上陸軍報告

我一部隊は昨日八日午後大虎嶺附近に於て敵を撃破し、同五時二十分大孤山上陸軍の一部隊と協同して岫巖を占領せり

敵は兩部隊の前面にありしものを合せ騎兵約四千、砲六門にして栃木城及び蓋平方面に退却せり

我損害戦死卒一、負傷池端(一)歩兵中尉下士以下二十一にして皆輕傷なり

(二)

十日午前大本營發給大孤山上陸軍報告

我一部隊は第一軍の一部隊に共々八日午後岫巖附近にありし敵を撃退して午後五時二十分岫巖を占領せり

岫巖にありし敵は騎兵約千五六百、砲六門にして其の砲兵及び殘兵の一部は栃木城方向に、殘兵の大部は蓋平方向に退却せしものゝ如し

我損害は戦死卒二、負傷原少尉、下士卒七

### 懷仁縣の占領 (六月十二日)

十六日午前大本營電黒木大將報告

吉田支隊の一部隊は十一日、汝椽口に於て敵の乘馬歩兵約一百を撃退し、十二日、渾河左岸四個子に於て敵の小部隊を驅逐し、午後三時、懷仁を占領せり。敵は騎兵三百(捕虜の肩章は東部西比利亞第十五聯隊)馬賊三百にして五道河附近に退却せり。

我兵死傷なし。敵兵の死傷は不明なるも、汝椽口に於ては即死三、負傷二(内一は捕虜とせり)ありし。

## 第十三章 彼我艦隊の行動

### 第二回旅順強行偵察 (五月三十日)

五月三十日午前八時十分發電東郷聯合艦隊司令長官報告要領

砲艦四隻、驅逐隊二、水雷艇二は本日(三十日)午前一時、旅順港口外に達し、敵要塞の砲火を冒して更に港口の偵察を強行せり。此偵察中第三號砲艦は敵砲を受け戦死、下士一名、負傷下士卒三名を出し、砲一門を損せり。其他の艦艇には一も損傷無し。

敵は老鐵山頭に新に一照燈を据へ、又其山腹には一二の砲塔を新造せるを發見せし。

(註) 死傷者氏名次の如し。戦死一等兵曹柳本彌六〇五區、一等兵曹奥村忠一〇四、一等水兵山下喜代治〇輕傷一等兵曹土井本吉吉。

### 旅順口の大爆聲 (六月四日)

(附無線電信)

東郷聯合艦隊司令長官要領

(一)

封鎖の爲め旅順口沖に出動中なりし高木千歳艦長よりの無線電信報告に依れば、老鐵山頂に橋四本及哨舎あり、其内一本の橋に無線電信用のガープの如きものを認むと、又今朝以來旅順口方面に當り數回の大爆聲を聞き、黒煙の盛に揚るを見たりと云ふ。石田第二驅逐隊司令の報告に依れば、雷は南三山沖にて敵の機械水雷を認め、是を爆沈せしめたりと。

(二)

旅順口沖に出動せる高木千歳艦長の電報によれば、北隍城島及大欽島には無線電信柱の如きものを見ず。又本日(四日)午後七時過ぎ更に旅順方面に當り數回の大爆聲を聞きしも、煙は認めざりしと云ふ。

### 敵砲艦の爆沈 (六月四日)

五日午後大本營電東郷聯合艦隊司令長官報告要領

今朝封鎖任務より歸航したる第五驅逐隊の報告に依れば、昨(四日)午後七時四十分、同隊が東方より旅順

第十三章 彼我艦隊の行動

港外を監視中「ギリヤーク」の如き敵の砲艦一隻城頭通の前面に於て爆裂沈没したり多分我か水雷に罹りしものならん尙ほ他に敵の砲艦一隻、驅逐艦、汽艇等各數隻港外に在りて掃海事業に従事せるものゝ如くなりしか、皆惶惶港内に入れりと云ふ

同 詳 報

(敵の二艦沈没す)

七日午後大本營著東部聯合艦隊司令長官報告

今朝封鎖任務より歸來したる第四驅逐隊司令長井群吉の報告に依れば一昨四日午後七時四十分旅順口外に爆沈したる敵艦は「グレミヤスチー」形にて同驅逐隊は當時鮮牛角に近つき敵狀監視中ロウリツ嘴砲臺より十數發の砲撃を受しを以て少く南方沖合に之を避けしに港外にありし「グレミヤスチー」形の敵艦我に向ひ砲撃しつゝ進行し來りしか幾許もなく城頭山の南方約一海里と思はるゝ所に於て大爆煙を擧げ沈没せり又其側にありし「ガイダマーク」形の敵艦も同時に其艦影を没せり敵は城頭山老鐵山下に沿ふて頻りに掃海を施行しつゝありしものゝ如く掃海艇と思はるゝ舟艇は城頭山下に群集し尙數艇の老鐵山の東方に運動するを見たり是等の舟艇は敵艦の爆沈と共に惶惶港内に遁入せり第四驅逐隊は數個の近彈を受けしもの損傷なし以上當時の状況重て報告す

(備考)「グレミヤスチー」は明治二十六年建造の裝甲砲艦にして「サトウズメニ」等と同形なり「ガイダマーク」は明治二十七年造

造の水雷砲艦にして「ウサドニツク」と同形なり前報告に「ギリヤーク」の如き砲艦とありしは「グレミヤスチー」形を指せしものと疑む

大連灣の掃海 (六月四日)

(敵兵飲料水源に毒を投ず)

六日午後九時三十分大本營著電片第四三驅隊司令長官報告

四日大連灣掃海隊の一部は北三山島及び大園口村を偵察したり其報告に依れば北三山島には家屋なく又何等敵の設備せるもの無し大園口村には敵の電信所あり土民の言に依れば敵は十數日前其通信器具を取外し遁逃せり而して其退去に際し飲料水源に毒を投したりと依て目下精細探查中

大連灣掃海の進捗 (六月六日)

東部大將報告、大本營著電報

大連灣の掃海は三日以來南方長濤の支障ありしに拘らず豫想外に進捗し六日午後二時迄に發見爆沈せる敵の機械水雷四十一個に及び又曹て敵の水雷嚮導者たりし者を利用し一の有望なる航路をも發見し已に小吃水船を航通せしむるを得るに至れり尙ほ掃海隊は銳意作業しつゝあり掃海隊員船舟凡て無事なり

陸戰隊の南三山島偵察 (六月六日)

八日午後九時四十分大本營著電片第四三驅隊司令長官報告

第十三章 敵我艦隊の行動

六日松島より陸戦隊を南三山島に上陸せしめたるに其の報告の概要左の如し

燈臺は改造中と見受けらる、附近少量の建築材料あり、點燈器具なし、附屬煉瓦家屋四棟あり、内一は破壊、他は床を毀ちあるも使用に耐ふ、發電機及び汽罐は爆發藥にて毀ちたる形跡あり、又鐵蓋を有する監視哨所らしき土工物一あり

西灣の北角に二小埠頭あり、西側崩壊しあるも船舟の接著に便利なり

岡島北部南東麓に大小五棟の煉瓦屋あり、即ち避難院なるか如し、屋内一物なく床板窓戸扉等は概して破壊しあるも、暖爐家根及び壁は完全にして多少の修理を加ふれば使用に適す、内一は消毒室にして汽罐及び消毒罐あり汽罐は其の儘にて使用し得るも消毒罐の内蓋は取外しありて附近に見當らず、外に二棟の亞鉛板家屋及び瀝水池一あり

飲料水は露國人の穿ちたる井戸一、土人の使用する不完全の者二あり共に瀝過の後煮沸すれば飲料し得へしと信するも水量多からず  
牛馬雞豚多少得らる

### 第二回旅順強行偵察 (六月六日夜)

七日午後七時十分大本營電報東部聯合總隊司令長官報告

砲艦四隻は豫定の如く昨夜午前零時過ぎ旅順口港外に至りて強行偵察を行へり

敵は猛烈なる砲火を以て之を砲撃し、第四號砲艦は敵彈八個を蒙り、多少の損害あり、卒一名も死し、二名微傷を負ふ、其の他は皆無事なり

### 蓋州の威嚇砲撃 (六月七日)

東部第三艦隊司令官報告の要領

分遣艦隊は旅順口背面沿岸の封鎖中去る七日一部を北上せしめ蓋州附近を南下する運兵列車ありしか我砲撃に驚き再び北方に引返せり爾後晝間は復た瀛車の往復するものを認めず蓋州角附近に於て敵は我が上陸に備へんとするものゝ如く歩騎兵漸次増加し地物に據りて我を待たんとするものゝ如くなりしか赤城、宇治の兩艦淺吃水を利用し急に海岸に接近して之を猛撃し多大の損害を加へしものゝ如し

### 大連灣の掃海 (六月七日、八日)

八日午後十一時大本營電報片岡第三艦隊司令長官報告

大連灣に於ける掃海隊は昨七日十一個、今八日十個敵の沈置せる機械水雷を發見し孰れも爆沈したり、人員船舟異状なし

(備考)掃海隊が作業開始以來八日までに敵の機械水雷を無効に歸せしめたるもの其の數六十二

### 第四回旅順強行偵察 (六月七日、八日)

第十三章 被我艦隊の行動



近來の天候一週に一回濃霧あるを常とし去る九日以來の霧は漸く今朝に至りて霽れたり爲に我艦の行動に多少影響すと雖も麾下將校卒は人力の及ぶ限りを盡して各其爲すべき任務を果し幸に吉野沈没以來一も危害を見ざるは本職の深く欣喜する所なり

### 第六戰隊活動の詳報

十二日午後大本營電報聯合艦隊司令長官報告

第六戰隊は豫定の如く去る七日八日の兩日蓋平角より熊岳河口附近に亘る海岸に屯在せる敵を砲撃し尙ほ遼東灣沿岸に於て多少の偵察を送け今朝當地に歸着せり其報告に依れば敵は我軍の蓋平縣附近に上陸するに備ふる爲め其沿岸に約三千の歩騎兵を屯し土民の言に依るに海岸の各所に監視哨を配置し居れり孰も我艦隊の砲撃に逢ひ内地に逃遁せり七日の砲撃中會ま南行の汽車熊岳城の北方約三里にて停止し直に北方に引返せり爾後八日迄汽車の通過するを認めず八日朝蓋平角附近に於て敵の歩兵約二個中隊騎兵約一個中隊の一群を猛撃して多大の損害を與へたり七日營口を出てたる外國船々長の言に依れば此砲撃の爲め營口に在りし露兵三千砲二十門は同地を撤退して北方に去れりと云ふ又八日第十水雷艇隊が復州灣にて捕へたる露兵二名は與德縣萬家嶺を發し復州灣より乘船し旅順口に向はんとしたるものにして騎兵第四旅團第一聯隊に属する騎兵なり其言に依れば萬家嶺、瓦房溝瓦房店には歩兵二個聯隊騎兵一個聯隊半砲八門ありて五月二十八日より同三十一日迄に二度に

到着せり其指揮官はサムソン少將なり此兵力は土民か此附近にある敵の兵數約五千と云ふに略は一致す又捕虜の言に依れば南行の汽車は萬家嶺まで一日三四回通し居るも其以南は稀れに瓦房溝迄徐行すと捕虜は多數の公文を所捕し居れり

### 機械水雷の爆發 (六月十三日夜)

十四日午前大本營電報聯合艦隊司令長官報告

聯合艦隊附属水雷敷設隊臺北丸は昨夜敵前に於て機械水雷敷設中水雷一個俄然爆發し左記の戦死者並に負傷者を出せり船艦には大なる損害なし  
▲戦死 海軍少佐真崎安一○海軍兵曹長藤井留楠○海軍上等兵曹城谷仙太郎○海軍一等兵曹富田由藏○海軍一等兵曹田中稻作○海軍二等兵曹古田拾吉○海軍一等兵曹渡邊貴徳○海軍二等兵曹今川藤吉○海軍二等兵曹中村乙槌○海軍三等兵曹菅原萬作○海軍三等兵曹平川松助○海軍三等兵曹松尾重孝○海軍三等兵曹立松桑次郎○海軍一等水兵式本乙吉○海軍一等水兵沓名福太郎○海軍一等水兵加藤悦太郎○海軍三等水兵前田末治郎○海軍三等水兵松田歌次郎○海軍二等機關兵中尾長藏  
▲重傷 海軍大主計森岡支(入院後死亡)○海軍一等兵曹作間磨津治○海軍一等兵曹中村康胤○海軍一等兵曹紙元興吉○海軍二等兵曹竹谷雅治○海軍二等水兵杉生庄藏○給仕一名  
▲輕傷 海軍中佐小田喜代藏○給仕三宅福太郎

### 第五回旅順強行偵察 (六月十三日夜)

(機械水雷の設置)



十五日午前大本營電東海聯合艦隊司令長官報告

二七〇

山本大尉の指揮せる艦載水雷艇隊は第三驅逐隊及び第一、第十四、第十六水雷艇隊掩護の下に六月十三日午後十一時三十分更に旅順口の強行偵察を行ひ各艇敵に発見さるゝことなく探海燈光の下を潜りて豫定の位置に巧みに機械水雷の沈置を了し本日無事當地に歸航せり

### 旅順敵艦の出港 (六月十四日)

十五日午前大本營電東海聯合艦隊司令長官報告

土屋第三驅逐隊司令よりの報告に依れば六月十四日同隊及び第一、第十四、第十六水雷艇隊は小平島附近に於ける我陸軍の威力偵察に勢撥する爲め今朝來小平島以西の陸岸に在る敵兵及び敵の哨所等を砲撃しつゝありしか午後零時三十分の頃敵艦ノークキク及び驅逐艦十隻旅順口の方向より突進し來るに會し各隊は盛に之と砲戦しつゝ漸次退却して敵を誘致せしも午後三時頃に至り敵は遂に引退せり我に一の損害なく各隊は日没後再び當夜の豫定哨區に進む  
午後四時哨島附近に來りし千歳よりの報告に依れば同時旅順口方面の爆發及び砲聲の聞ゆるを報せり未だ其の何故なるを知らず

(註)小平島は旅順口と大連灣との灣と中間に在り

## 第十四章 得利寺の大激戦 (六月十四、五日)

得利寺附近に於ける戰國に關する報告

### 一、附近の戦

十五日午前大本營電東海聯合艦隊司令長官報告

軍の主力は本日(十四日)左右兩縱隊となり鐵道線に沿ひ南部瓦房店の東にありし敵を驅逐して北進せしか午後五時頃敵兵更に北部龍王廟より大房身に亘る線に陣地を占め彼我の間に砲戦約二時間の後、我軍は龍家屯より虞河屯に亘る線を占領するに當り日は暮れたり我軍に若干の損害あり  
本日(十四日)軍の一部たる他の一縱隊は敵の右側を脅威し我側背を掩護するため復州東方の地區を前進して鄧家溝より那家嶺に亘る線を進出せり  
軍は明十五日一部をして敵の右側を脅威せしめ主力を以て前面の敵を得利寺北方陸路内に壓迫せんとす

### 二、同上

十五日午前大本營電

其の後の報告に據れば北部龍廟より大房身に亘る陣地を占領し在る敵兵は漸次に増加し頑固の抵抗を試みんとするもの如く、軍は明朝戦ひを決せんとす

### 三、決戦

第十四章 得利寺の大激戦

二七一

十五日正午發十五日午後大本營電

電は豫定の如く今拂曉より得利寺附近の敵を攻撃し目下戦闘中なり

#### 四、同上

十五日午後十時半發十六日大本營電

得利寺附近の敵の兵力は約二師團にして大房身より城子山に亘る陣地を占領し、軍は今十五日拂曉之れか攻撃を開始し、其の主力は鐵道線路に沿ひ、一隊は鄒家屯方面より攻撃前進し、午前九時頃軍の左翼にありし一隊は東龍口方面より、正午頃騎兵隊は賈家屯方面より、共に此の戦闘に參與して敵を得利寺附近に包圍して劇烈なる戦闘の後之を北方に擊退し軍旗及び速射砲四門(等)の鹵獲あり  
我死傷は昨日(十四日)と本日(十五日)と合し約一千人以内を算すべく、敵の死傷は頗る多六なるへきも未だ詳かならず

#### 五、敵兵我國旗を濫用す

十五日午後十一時發十六日午前大本營電

本日(十五日)の戦闘に於て露軍は我國旗を濫用し現に我將校斥候は露國兵の我國旗を立て、行進するを目撃し我砲兵は之を認めて砲撃を中止せり

#### 六、捕虜

十六日午前十時發同日午後大本營電

軍は昨十五日拂曉より得利寺附近に於て約二師團半の敵を包圍し午後三時頃まで劇烈なる戦闘を繼續し終に之れを北方に潰走せしめたり、未だ詳細の報告に接せざるも速射砲四門を鹵獲す、狙撃歩兵第四聯隊長以下約三百名を捕へ、敵の殘せし死傷は五百名に上るへし

#### 得利寺激戦の詳細

十八日午後大本營發與大將報告

六月十三日市は普蘭店大沙河の線を出發し右縱隊を大沙河に沿ひ、中央縱隊を鐵道線に沿ひ、左縱隊を吳家屯(復州街道上)四川溝を大河南に通する道路に沿ひ、騎兵部隊の皮子窩熊岳街道を前進せしめ各縱隊は其進路上の少數の敵兵を驅逐しつゝ前進せり  
十四日左縱隊は那家嶺附近に達す、右及び中央縱隊は相連繫して得利寺南方約十二基路の道家屯を大平溝の線に達す敵兵大房身より北部龍王廟に亘る線を占領するを知り更に進んで王家屯、龍家屯、虞家屯の線を占領し午後三時頃より日没に至る迄砲戦を繼續せり  
十五日軍は得利寺附近の敵を攻撃せんか爲め右縱隊を買家屯より温家屯北方高地に亘る線を固守せしめ中央縱隊をして夜間を利用し虞家屯附近より大陽溝西方高地に前進せしむ此朝濃霧あり午前五

時三十分砲火を開始し砲戰漸次激烈となりつゝある間に中央縱隊の復州河以北の地區は漸次苦戰に陥りたるも其攻撃前進は著々進捗し加ふるに本日黎明復州方面より急行せる歩兵及び砲兵より成る一隊は午前九時三十分王家屯西方高地に達し中央縱隊と協力し午前十一時大房身附近の敵兵を驅逐するを得たり然れども龍潭山山嘴及び龍王廟高地に在りし敵の砲兵は猛烈に此方面を射撃し中央縱隊及び復州方面より來りし一隊此猛火を冒し險岸峻坂を攀登して前進せるも右縱隊の右翼隊方面の敵兵は依然優勢を以て吾に當り敵は攻勢に轉せんとす

因て軍の總隊備隊たる歩兵を前後二回此方面に増加す之より先き右縱隊の右翼隊の方面危急を告るに至り騎兵部隊は亦右縱隊の右翼に到着し之に連繫して猛烈に敵の左側背を脅威せしめたり敵は全く我包圍中に陥りしも頑強にして屈せず併も敵の後續隊戰場に到着したるが如く敵は逆襲を以て戰況を挽回せんとせしも遂に我軍の撃攻力に抵抗すること能はず午後三時頃より退却を始め我追撃射撃に依り潰亂せしも軍は地形上猛烈なる追撃を行ふを得ず此夜戰場に夜を徹せり

此日左縱隊の主力は高家屯附近に於て北方に對し陣地を占領し軍の左側を掩護しありしか午前十時五十分敵の歩兵約七八百高家房身より西龍口を経て吳家屯方向に退却するを知り歩兵二中隊砲兵一中隊を吳家屯東方高地上に差遣して之を待つ午後一時後に至り敵兵豫想の如く龍口後以西に退却し來るを以て大に之に損害を興へたり

此日戰闘に參與せし敵の兵力にして初より陣地に在りしものは歩兵二十五大隊、騎兵十七中隊、砲九十八門なるも戰闘間更に後方より増加せし部隊あり敵の死傷未詳なるも戰場遺棄死屍は右縱隊方面のみにて約六百にして軍旗及び速射砲十四門等鹵獲し捕虜は第四聯隊長以下將校六、下士卒三百なり右捕虜將校の言に依れば第一軍團長輕傷第一師團長重傷第一聯隊長戰死第二第三聯隊長負傷せりと我軍の死傷目下取調中なるも千名以下なり

十五日の戰闘は兵力約二師團半然かも堅固なる陣地に依る敵を攻撃し終に之を潰走に至らしむるを得たるに偏に、陛下の御稜威に依る

死傷報告

(一)

今迄十七日正午に得たる得利寺附近戰闘に於ける死傷將校左の如し(第二軍)

- ▲戰死者 大尉大井宮吉△少尉市原義雄△少尉北田善松△中尉村井丹宮△少尉森安宇吉△中尉葛原保△少尉門司七郎△大尉今村六三 計八名
  - ▲負傷者 中尉濱田信太郎△中尉北島宗三郎
  - ▲重傷者 少尉小林武△全中野正次△全後藤松太郎△全中山諭吉△全河崎庸雄△全高橋良吉△全小畑嚴三郎△大尉市川赴夫△大尉丸山金太△中尉蓮岡清次郎△少尉北原秀雄△全二宮正純計十四名
- 外に特務曹長四名、負傷將校以下の死傷約九百名ならん

(二)

(二十六年午後大本營報告)

得利寺附近戦闘の死傷者左の如し

▲戦死者 將校(特務曹長を含む)七△下士卒二一〇・計二一七

▲負傷者 將校(全上)四三△下士卒九〇三 計九四六 合計一、一六三 △馬(死二六、傷六七)

### 敵軍の死傷

二十日午後大本營電報大將報告

其の後の報告によれば、十七日夕迄に得利寺附近に於て我軍の埋葬したる敵の死體は總數一千五百十六名に上り、爾後續いて埋葬に従事しつゝありて其の總數は著るしく増加するなるへく、土人の言に依れば敵は戰鬥中死傷者を流車にて後送し潰走稍や前に至りては花紅溝附近に埋葬或は火葬せりと

又鹵獲の重砲、捕虜の數も前報告より増加あるも調査未だ纏らず

### 敵軍の死傷後報並に鹵獲品

三十日午後大本營電報大將報告

得利寺附近の戰鬥に於て敵の遺棄したる死體の中我軍隊にて埋葬したる數は千八百五十四にして其後委員にて埋葬したるもの若干あるへきも未だ報告に接せず又鹵獲品の中穀類は既に報告せしも其

他の重要品は速射砲十六、彈藥車四十六、小銃九百五十八、小銃彈三萬七千二百三十三、砲彈千二百二

一、土工具二百八十二、セメント千四百樽、其外兵器陣中具等多數なり

### 勅語與大將に下る

第二軍ハ前ニ南山ノ堅ヲ抜キ未タ久シカラサルニ今又得利寺附近ノ敵ヲ攻撃シ長時間激戦シテ大勝ヲ收メ軍旗ヲ奪ヒ敵隊長以下數百名擒ニシタルヲ聞ク

朕深ク汝等ノ忠勇能ク敵軍ノ勢力ヲ挫折スルヲ嘉ス

### 與大將の奉答

曩きに南山の攻略に對し優渥なる 勅語を下し賜ひ侍從武官を差遣せられ今又得利寺に於ける戰鬥を嘉賞し賜ふ臣等感激措く所を知らず益奮勵努力して 勅旨に副ひ奉らんことを右隨んで奉答す

## 第十五章 玄海の大悲劇

(六月十五日)

(我運送船擊沈さる)

浦羅斯德艦隊が玄海洋に出現して我運送船に與へたる損害次の如し

### 二、佐渡丸擊沈さる

十六日大本營電報の島今川主計破

佐渡丸九十五日午前十時玄海洋にて敵艦三隻の砲撃を受け其結果戰鬥員は敵艦に來れ非戰鬥員は本船を去れとの申込を受け遭難者約七十名此地に漂着糧食なし

## 二、常陸丸、長門丸撃沈さる

同上留守第十二師團司令部

昨十五日常陸丸、長門丸長門沖の島附近にて敵艦に撃沈せられ乗組員の一人池隅勇吉(?)漁船に救はれ頭部に弾片の輕傷を負ひ山口縣阿武郡椿郷東分村にありて治療中との報告今着せり

## 三、百餘名生を全ふす

同上在小倉遭難者

昨午前十時二十分を海洋にて我佐渡丸及び常陸丸とも露艦四隻に砲撃せられ我佐渡丸、常陸丸とも敵の水雷にて午後三時沈没され佐渡丸船長其他數名捕留されたり百餘名は武内中佐の命に依り端凝にて遁れ當地に着く

## 四、漁船に救はる

同上留守第十二師團司令部

佐渡丸に乘組みたる平崎陸軍技手以下十六名(内輜重輸卒一名を含む)漁船に救はれ十六日午後零時四十分無事小倉に着す又同船乗組員にして漁船に救はれしもの約三十名ある筈なるも目下何れにあらずや不明、常陸丸乗組員三十名許も救はれ若松に着せり

本日(十六日)午後零時八分六連島發電報に依れば被難兵三十名同地に上陸せりと

## 五、遭難地搜索

同上門司

土佐丸は常陸丸の遭難者三十七名を乗せ午後二時門司着委細取調中又漁船にて目下遭難地附近を捜索中なり

## 六、悲絶壯絶

同上在門司吉澤大尉報告

土佐丸は六連にて常陸丸の生存者三十七名を救助して入港す軍曹田所龜松、二等卒藤崎虎一及び火夫山瀬辰次郎の報告によれば常陸丸は十五日午前十時半頃敵艦三隻に追はれ全速力にて前進す敵は初め空砲を放ち引續き實弾にて連續射撃し死傷するもの多し此際彈藥庫を開く間もなかりしか敵艦は更に接近し側面より急射撃を爲し機體破裂乗組員死する者多し又第三船より出火し藤崎二等卒は分隊長沼崎伍長の命により聯隊旗を保護せんとせしに聯隊長須知中佐は已に軍旗を焼き竿を碎き居られ汝等は海上を泳ぎ歸りて此旨を報告せよと命せられたるか間もなく砲彈肩に中りて戦死せらる將校の大部は割腹又はビストルにて自殺し某中隊長は海に投す此間ボートを卸す間もなへ船長事務長以下海に投し監督將校戦死せり二等連轉士自殺す敵は更に第三回の急射撃を爲し常陸丸は全く沈没す浪高く敵艦の行動不明なれとも前方にありし佐渡丸は西北に向つて進行せり其後一艘の漁船に

で三十七名救助せられ六連島に着き土佐丸に救はる(沈没の際尙一隻のボートあり三十名許乗りたる様なれとも行先知れず)

救助せられたるは田所軍曹其他兵卒三十四名火夫一船内人夫一なり(内輕傷十二名稍重傷一あり)土佐丸にて本日宇品に歸る

(註)

- 長門丸 噸數 一、八八四噸 明治十七年蘇國製造、日本郵船會社所有
- 常陸丸 噸數 六、一七五噸 明治三十一年三菱造船所製造、日本郵船會社所有
- 佐渡丸 噸數 六、二二六噸 明治三十年英國クラーク會社製造、日本郵船會社所有
- 右三隻合計 一萬四千二百八十五噸

### 同別報

(一)

十六日午後大本營電留守第十二師團司令部  
陸軍輸送船佐渡丸常陸丸昨十五日午前十一時門司を距る約四十哩の附近に於て三隻より成る敵の艦隊に遭遇し敵は常陸丸を撃沈し佐渡丸の機關部に水雷を命中せしめたる後北方に退却せり佐渡丸は漂泊して今朝沖の島東方約六哩の處に在り漸く沈まんとす、其救助として日之丸今當地を往過せり常陸丸の乗組は殆ど殲滅せるもの、如く佐渡丸には下士以下數十名の死者あるならん今朝七時佐渡丸を發し短艇にて今六連島に着したる川人工兵少佐報告す

(二)

十六日午後大本營電留守第十二師團司令部

十六日午後七時四十分門司發の電報に曰く常陸丸及び佐渡丸の遭難者十二名患者集合所に收容尙引續き上陸の筈

(三)

十六日大本營電在勝本村田技師發

十五日午後十時露艦三隻に砲撃せられ鐵道員三名外九名と避難して壹岐勝本に着く

(四)

十七日午前大本營電在門司吉澤大尉發

佐渡丸乗込川人少佐着す、佐渡丸將校は皆無事今朝(十六日)七時約百名本船に在り短艇にて遁れたるものも本船に歸れるもの多し常陸丸乗組十二名も佐渡丸に來れり

(五)

十七日午後大本營電在門司吉澤大尉發

伊勢丸は佐渡丸の乗組員を載せ六連島に來れり佐渡丸は無事目下日之丸に救助中

### 同別報

(一)

十五日某軍艦より午前八時廿五分大本營電

二本橋の浦鹽敵艦三隻沖の島附近を南下せり

十五日土村司令官より午前九時廿七分大本營電  
哨艦對馬より浦鹽敵艦三隻沖の島附近に見ゆとの通信に接し直に總艦を率ゐ出港す

十五日角島より午前九時四十七分大本營電

午前八時二十分より沖の島附近に砲聲を聞く

十五日角田竹敷司令官より午前十時二十分大本營電  
敵艦隊は今砲撃を連続しつゝあり本部所属水雷艇午前九時五十分出港せり

十五日夜より午前九時二十分大本營電  
午前八時四十分敵艦壹岐沖に發見砲聲數十發を聞く帝國漁船二隻逃げ来る

十五日角島より午後零時四十分大本營電  
海上朦朧として艦影を認め得ざるは遺憾なり砲聲約一時間に渉る

十五日角田竹敷司令官より午後一時四十七分大本營電  
今、日の丸艦振丸は敵海上に在り信號しつゝ西より東に引返す

十五日六連島より午後五時四十七分大本營電  
風雨次第に増加し水雷艇の航行に困難と認む雨の爲め一漕以外を見る能はず

十五日夜より午後三時廿七分大本營電  
午後一時五十分敵艦東に在る行衛不明

十五日竹敷より午後三時四十五分大本營電  
風雨益々強烈敵情に就き得る所なし

十五日夜敵勝本羽後丸より午後四時廿七分大本營電  
敵艦は「グロンボイ」「ロシヤ」「リニューリック」なり

十五日六連島より午後五時廿五分大本營電  
畿内丸は博多に避難せり

十五日福岡より午後九時二十分大本營電  
金澤丸は午前九時頃沖の島附近にて露艦を認め筑前大島に避難せり

(二)

十六日佐賀の關より午後四時大本營電  
第七水雷艇隊は遭難地に向け午後二時出發す

十六日隈岐島より午後四時二十分大本營電知夫郡黒木村戸長報告  
本村宇賀北方約十海里の沖合に怪しき軍艦四隻を認む

浦郷分署長よりの報告  
露艦らしき船三隻知夫郡宇賀村の北約二里に現はる煙突二本不取敢報告す

十六日隈岐北方郵便局より午時一時大本營電  
午後三時十五分一隻の漁船を先きにし三隻の三本橋の軍艦北に向け進行し三時半頃更に北東に轉し

進行せり  
十六日飯島佐世保鎮守府司令官より午後七時四十八分大本營電  
沖の島にある遭難者救助の爲め第八號艇をして京成丸を率ゐ今夜出港せしむ

十六日角田竹敷要港部司令官より午後八時三十分大本營電  
沖の島へ運送船及び遭難の状況取調の爲め水雷艇隊を派遣せり

十七日沖の島發午前一時大本營電  
昨十五日午前六時敵艦「ロシヤ」「グロンボイ」「リニューリック」北より東水道に航しつゝ在しか七時五

十五分南西約八海里の處にて艦列を解き一隻は小呂の島二隻は若宮島(壹岐)の方へ向へり八時二十

分二隻は霧の爲め船體不明となり一隻は八時二十二分より發砲を始む其目的とせしもの不明なりし

か十時三十分に至り南方約十二海里の所に一漁船東方に航するを發見せり該漁船に向つて發砲せし

ものなり該汽船は十時四十五分南方へ變針せり十一時二隻とも霧の爲め船艦不明となれども砲聲は止さりし零時四十分まで追撃せしものゝ如し佐渡丸遭難者昨夜五十三名漂着尙續々漂着しつつあり

十七日陸奥四郡より午前七時大本營電

露艦の煙突は四本二隻二本一隻檣は三本二隻其他は不明右認めたる時刻は昨日午前十二時頃なり

十七日角田竹野要港部司令官より午前七時五十三分大本營電

第十五水雷艇隊は本日午前零時三十分沖の島より佐渡丸遭難者陸軍一等主計今川彌吉同三等主計西原遠壽以下七十七名を分乗せしめ歸港せり同隊は昨日午後一時二十分東方に砲聲聞ゆとの報告を得沖の島に向ひ四時半同島に着し以上の遭難者を乗せ歸りたる者にして今川一等主計の報告に依れば佐渡丸は十五日拂曉馬關を發し沖の島の南方に於て前方に進航しつつある常陸丸に追付かんとせる際雨中に敵艦一隻發見し常陸丸は後方に引返し佐渡丸も正に引返さんとせるに忽ち兩船共敵艦「ロシヤ」及び「グロムボイ」の砲撃する所となり常陸丸は約五六十發目にて非常に白煙を揚げたり多分火災を起したる者ならん佐渡丸は近距離に於て十數發の砲撃を受けたるも一時砲撃を中止せるを以て本船を停止し監督將校は敵艦に到りて交渉し四十分間の猶豫を得各員退去すへきを命ず而して非戦員は自艦に收容する事を諾せるを以て船員を送りたるも一等運轉手(英人)の外は凡て之を乗船せしめず尙與へたる時間を經過せすして敵は兩側より水雷を發射し命中爆發せしめたり茲に於て各乗員は凡て海中に投し殆んど全員溺死し以上の七十九名は幸にして本船の端舟に乘し風波に伴ひ七時頃同島に漂着し第十五水雷艇隊に乗艇せしめ當地に來り常港へ避難中南越丸に收容せり右人員は時機を見て送還する等常陸丸の遭難地は沖の島を距ること遠き爲め今夕に至るも一名も同島に漂着せしものなし又遭難者の同地附近を去りたる際は兩船共未だ浮ひ居れりと云ふ尙ほ三十六號艇及び六十號は未だ同地附近搜索中なり

玄海來襲の敵艦北海に現はる (六月十八日)

十八日福山より午前大本營電

浦鹽艦隊三隻午前五時二十分小島沖を運動す

十八日西館より午前六時四十五分大本營電

露艦らしきもの三隻福山沖に現はれ發砲せりと松前郡江良村より電報あり

十八日陸奥飛崎より午前八時四十分大本營電

敵艦南航し其影を失ふ

十八日磯作崎より午後一時大本營電

敵艦は針路を北西に取り其影を失ふ

上村艦隊の行動 (六月十九日迄)

十九日午後大本營電上村第二艦隊司令長官報告



十五、午前八時哨艦對馬の無線電信に依り敵艦隊沖の島附近に現はれ南方に航行するを知り直に水雷艇隊を急行せしめ對馬壹岐間の水道を警戒し西方より來る船舶に對し竹敷に避けしむべきを命じ又門司港務部に電報を發し西航の船舶を停止せしむべきを傳へ在竹敷及哨艦服務中の諸艦に無線電信を以て至急來會すべきを命じ本隊は對州南端を経て急航せり當時天候次第に險惡となり暴雨之に伴ひ艇は後續部隊を見失ふに至りしか神崎附近に至り一艇隊を本隊に向ひ敵艦隊を北方より壓せんか爲め針路を沖の島の北方に取れり

此間哨艦對馬は絶わす敵艦と觸接を保ち敵情に關する報告を努めたり正午哨艦對馬より無線電信を以て敵艦隊は沖の島南方約十五海里にありて北西に航進すとの報に接し次て濃雨の爲艦影を失すとの報に接す午後一時半沖の島の南約五海里に於て再び敵艦隊を發見せしも濃雨の爲直に之を見失ひたりとの報に接せり依て針路を右轉し敵艦隊の所在地たる沖の島の南方に邁進せしか此時濃雨最も烈しく視界益々狭きか故に敵と會せは直に接戰距離に入る可きを思ひ益々各艦を戒飾しつゝ航進し敵を搜索せしも遂に之を發見するを得ず此時哨艦對馬列に入るの報に接す

茲に於て本職は敵艦隊か濃氣濃密なるに乗し既に北方に退却せしものと判斷し之を追尾せんか爲め針路を北方に轉せしも雨愈烈しく視界益々狭く敵影を發見するの望み殆ど絶ゆ依て翌朝敵と會戰するの望みを以て速力を増加し敵の退路を扼するの地點に針路を定む此間我艦隊諸艦か高速力を以て

濃氣四塞の間に不規の運動を行ひ毫厘の故障なかりしは本職の満足する所なり

此夜艇隊をして索敵運動を執らしめしも其目的を達するを得ざりし

十六日黎明豫定地點に達す此の時天候回復し視界亦廣かりしも遂に敵の隻影を見ず

依て更に針路を轉し索敵運動を繼續せしも其効なく十七日敵艦隊は尙本邦沿岸に在るものゝ如きを以て之を警戒せんか爲巡洋艦隊を以て搜索列を張り南下せり

此日天候至て平穩にして視界廣く心苟かに搜索の好望なるを期せしも遂に敵艦隊に會せず同日午後對州の北端を距る北東約百海里の地點に來りしに無線電信に依り敵は北海道方面にあるの情報に接したるか故に索敵運動を止め今十九日歸港せり

此行動中約四晝夜の搜索運動は遂に何等の功なくして歸航の止むを得ざるに至りしは深く遺憾とする所なり

終に臨み本職は玄海灘に於ける遭難諸士に對し深く痛恨哀悼の意を表するものなり

## 第十六章 旅順要塞の攻圍開始

自五月廿六日 旅順攻圍軍作戰經過 (大本營公示)  
至六月十八日

五月二十六日我軍終日劇戰の後南山の敵陣地を奪取す敵は旅順方向に敗走す

五月二十七日中村少將の率ゆる一支隊は進て南關嶺を占領す軍の主力は南山附近の諸部落の宿營し前進準備に従事す

午前十時頃までに三十里堡停車場附近の敵は同停車場を焼き旅順方向に遁る

五月二十八日中村支隊に属する一部隊進て柳樹屯を占領す該地に在る砲臺及露國諸建築物の一部は露兵のため破壊せられ棧橋も亦其一部も破壊せらるる同地に於て火砲四門、同彈藥若干、鐵道用有蓋貨車五、無蓋貨車四十一を鹵獲す

五月二十九日軍の各隊は前進し三十里堡西方約二里の高地線に達す

五月三十日軍は更に進て安子山より臺子山に亘る線を占領す我に對する敵は雙臺溝、安子嶺の線に在り此日までに得たる青泥窪及柳樹屯の情況左の如し

一、青泥窪には完全なる倉庫兵營等百餘棟あり電信局、停車場共に無事無蓋貨車約三百、有蓋貨車約百三十、棧橋用解舟五十、石炭約二千噸、枕木約二萬本の戦利あり但し附近鐵道の小橋梁は總て破壊せられたり

船梁及棧橋完全なり但し大棧橋破壊せられて其一部海中に沈み船渠口に小汽船數艘沈めあり

二、柳樹屯棧橋の橋脚破壊せらるる但し現地の木材を以て修理し得へし之に属せる起重機燒却せら

三、金州より柳樹屯に至る間の鐵道毫も損所なし

六月一日旅順方面の敵は依然有力なる部隊を以て雙臺溝、分水嶺附近を占領し其斥候絶わす我前哨に近く徘徊し時々我哨兵に向て狙撃し彼我監視部隊相距ること僅々一千米突に過ぎず又敵は往々支那服を著し支那人に擬して我に近き突然武器を取り我哨兵を射撃す要するに旅順の敵は目下南下の微ある北方の其友軍と策應以て動作せんとするものゝ如し

六月六日敵は石山溝東側標高一七三高地の東北麓に數多の防禦工事を始む

六月十三日有力なる敵の偵察隊我陣地に來襲し彼我射撃を交接し敵兵薄暮退却す

六月十四日敵の砲艦二隻、戰艦一隻黒石礁附近に來り我陣地に向ひ數發の砲撃を爲し約四十分の後西に向ひて去る

此日偵察の結果安子嶺及其南方高地には若干の工事あるも黃泥川大上、(下)屯西方高地には工事らしきものを見ず又敵の死體に依り岔溝附近の敵は狙撃歩兵第五聯隊にして猪圈子溝附近のものは同第二十八聯隊なることを確むるを得たり

六月十八日午後四時五十分敵の軍艦三隻、驅逐艦八隻小平島附近に現れ我陣地の左翼に向ひ一發の砲弾を送り間もなく我艦艇と砲戰約三十分の後旅順港内に退却す

雙臺溝附近の工事は益々増加し且つ探海燈を設けし其近海及我陣地を探照す

### 歪頭山、雙頂山及劔山の占領 (六月二十六日)

六月廿六日右縦隊の左翼は盤道西方及南方高地に向ひ同地の敵を攻撃して之を占領し左縦隊は三隊に區分せられ右翼隊は亂泥橋東方高地に向ひ大なる抵抗なく同地を占領し中央隊は亂泥橋南方標高三六八及黃泥川大上屯北方高地に向ひ途中若干の敵を驅逐し午後一時頃より三六八高地に據れる敵(歩兵約一大隊機關砲及砲若干)を攻撃して稍々頑強なる抵抗に遇ひしも午後五時頃全く同高地を占領せり左翼隊は雙頂山に向ひ若干の敵を撃退して同高地を占領せり是に於て軍の第一線は右翼安子山より盤道西方約一吉羅米突に在る高地、亂泥橋東方及南方の高地を経て雙頂山に亘る線に在り三六八の高地(以下此高地を劔山と稱す)歪頭山及小平島の占領は我軍のため大に大連灣の掩護を確實たらしめたると共に彼我從來の位置を轉倒し敵の陣地及其背後の状態を知るの便を得たり此戦闘に於て戦利品の主なるものは六瑠米突射砲二門、砲彈約二百なり

### 戦況 (六月三十日)

六月三十日雙臺溝方面の敵情異なることなし安子嶺方面に在りては同高地南方一帯の稜線より其東南三吉羅米突の山嶺附近に亘り老坐山方面に於ては王家店南方の高地に亘り敵の防禦工事あり

## 第十七章 旅順口外の海戦

### 第一節 大孤山上陸軍の進撃七盤嶺の勝戦 (六月十八日)

六月二十日午後大本營遊撃隊大孤山上陸軍報告

一昨十八日夜來我軍より出せる歩騎兵連合の斥候は七盤嶺(岫巖の西方約十二里)附近及び其の他各所に於て敵と衝突し敵の將校一、兵卒二を捕獲し五十餘名を斃し、戦利品小銃、槍等數多あり我戦死兵卒一、傷者下士以下五名

### 熊嶽城の占領 (五月二十一日)

六月廿二日午前大本營遊撃隊東牛嶺上陸軍報告

昨二十一日午後我軍の一隊は熊嶽城を占領せり

(註)熊嶽城は得利寺を距る日本里程にて十三里二十一町に在り東清鐵道の線路の廻する要地なり是より陸軍まで八里三丁陸軍より大石橋まで七里三丁大石橋より海城まで八里三丁遼陽まで十五里十八丁なり

### 驪陽邊門の逆襲 (六月二十二日)

二十三日大本營遊撃隊黒木大將報告

約歩兵一聯隊、騎兵二聯隊、砲兵一中隊より成る敵兵は二十二日賽馬嶺より前進し驪陽邊門に在る我一部隊を攻撃したるも夜に入りて新開嶺方向に退却せり  
窪田少佐は此戦に於て戦死せり

現に認めたる敵の損害は死五、負傷二十餘あり

三道の占領 (六月二十三日)

二十五日午後大本營電大孤山上陸軍報告

六月廿三日拂曉我軍の一部は大石橋街道上三道勾西北約四里の仙家峪に宿營しありし敵騎一中隊を奇襲し之を潰亂せしめ、尙ほ三道河北方高地を占領せし敵を撃退し午前八時三十分之を占領せり。敵は死者六十餘を残り西北方に退却し下哈頭湯見勾附近に位地せし歩砲兵に依りて收容せられたり。其の兵數歩兵二大隊、砲兵約一中隊なりき。

敵の一將一卒を擒にす (六月二十四日)

二十五日午前大本營電

今廿四日朝沙子崗嶺に於て狙撃第廿四聯隊少將フリーシエマン及び兵卒一名を捕獲せり彼の言に依ればケルゲル中將はウアリエンジにある狙撃第六師團長に命するに黒木大將の軍は岫巖方向より風城方向へ運動する模様あるに依り之を偵察すへきを以てし之か爲め少尉は派遣せられたるものなり又敵の陣地はウアリエンシ東方約四哩トウマンリウカ東方の高地にして堅固なる防禦工事あり野砲二中隊ありと

連山關附近には狙撃第三師團ありと雖も其位置確實ならず

本日烈ツンゴブーザ(雪裡店左北約二里)附近にて狙撃歩兵第廿四聯隊中尉ヤウオスキー及び下士二

名を殺し死體を埋葬せり

中尉も同任務にて出たる由前記少尉は語れり

分水嶺の占領 (六月二十七日)

廿七日午後五時二十分大本營電大孤山上陸軍報告

上陸軍は二十七日午前五時より十一時に亘る激戦の後分水嶺(岫巖西北方約九里)を占領す敵は潰亂して柞木城方向に退却せり

敵の兵數は歩兵五大隊騎兵二聯隊砲十六門なりき

大庭少佐戦死し其他死傷百名内外なるへし

同詳報

廿九日午前大本營電大孤山上陸軍報告

大孤山上陸軍は分水嶺占領の目的を以て三縦隊となり二十六日より其行動を開始せり淺田支隊は揚畔滯より分水嶺と鎌田支隊は大桑岐峪より敵の右翼に丸井支隊は接官所より迂回して敵の右側背に向ふ同時に東條支隊を以て丸井支隊の背後を掩護せしめたり。東條支隊は此任務を以て前進し二十六日上哈噠、周家庄の線を占領せる敵を攻撃せしに該地の敵は歩兵約三大隊砲六門機關砲二門を以て固く陣地を占領したり

該支隊は今日午前五時より敵と對戦して夜に入り戦鬪隊形の機略營せり  
 二十七日午前夜半より東條支隊は更に攻撃に着手し遂に之を擊退し其陣地を占領せり  
 然るに敵は同日午後に至り歩兵約三大隊砲十六門の増援を得て其は同支隊の奪取せし陣地の回復を  
 試みしも悉く之を擊退し午後七時半迄砲戦を續けたり  
 九井支隊は二十六日夜接官所に達し一部隊を以て下哈塔の嶺(東條支隊に對せしもの)の側背に迫ら  
 しめ首力は二十七日午前三時より分水嶺に在る敵の背後に迂回する爲め前進せり然るに二道溝附近  
 に在りし敵の歩兵約二大隊の爲め抵抗を受け午前十一時之を擊退して三道溝に達せり  
 淺田支隊は廿六日王家堡子附近を防禦せる敵の歩騎兵約二千を擊退し同夜瓦房店(分水嶺東麓)以南  
 にて夜を徹し廿七日午前五時より先づ砲戦の開始せしも敵は堅固なる砲臺内に於て巧に應戦し殊に  
 既知の射距離を以て彈雨を集中せしを以て我砲兵は一時苦戦せり  
 尙も好し廿六日夜半より敵の右翼に迂回せる鎌田支隊は弟兄山(分水嶺の南)腹を守備せる敵の歩兵  
 約二中隊を擊退し午前七時以後辛うして砲兵を同地に排列し同く側面より分水嶺の敵を繼射し歩兵  
 は弟兄山中より續々敵の側背に迂回せり  
 又淺田支隊より派遣せし深谷聯隊も二十六日夜半より運動を開始し午前七時湯畔溝西方高地に至り  
 し約二中隊の敵を擊退して敵の左側背に迂回せり

此に於て敵は全く其行動の自由を失し午前七時五十分其砲兵先づ沈黙し同く八時頃より全線の動  
 を始めたり

敵の正面に向ひし淺田支隊の歩兵は工兵の援助を以て敵の副防禦を破壊しつゝ前進肉迫し午前十一  
 時半分水嶺山頂を占領し砲兵を以て猛烈に敵を追撃せり

敵は松栲子に在りし糧秣倉庫を燒棄し潰亂して栃木城方面に退却せり

捕虜將校六、下士以下八十二、敵の遺棄せし死體は山間谷谷に點在し其數を判別し難きも本道上に遺  
 棄せしものゝみにても九十を下らず栃木城街道附近に於ける我戦死將校は大庭歩兵少佐にして其他  
 死傷下士卒以下約百二十名東條支隊にては約五十名なり

分水嶺の陣地は栃木城街道の關門として約三ヶ月間敵の全力を悉くして構成せし半永久築城なるを  
 以て砲臺、歩兵壘壕、廠舎交通路、露營の設備等完備せり加ふるに正面には鐵條網鹿柴を以て堅固に  
 守備し到底正面攻撃のみにては攻略し得ざるものあり然れども淺田支隊は正面より巧に動作し各縱  
 隊も漸次敵の退路に迫り遂に此の堅固なる陣地を攻略するを得たり  
 捕虜其他に依て知り得たる敵の兵力左の如し九井支隊の正面に位置せし敵は

エニゼイスク豫備歩兵二大隊分水嶺に位地せし敵は狙撃歩兵第二十一聯隊、イルクツク豫備歩兵の  
 二大隊、シベリアコサツク第七聯隊ウエルン、ネジンスク第一聯隊の半部シベリア豫備砲兵二大隊

コウチイ歩兵七大隊、騎兵十中隊、砲兵二中隊、東條支隊に對せし敵は二十六日以來豫備歩兵の三大隊、マチ、ンスク騎兵第一聯隊、ウエルフネチンスク第一聯隊の半部ザバイカル騎砲兵第一中隊及機關砲二門にして二十七日午後に至り歩兵三大隊、砲二中隊を増加せり。

### 第二節 旅順口外の海戦

敵艦隊の災禍を知る (六月二十一日)

(敵艦隊の沈没)

二十一日東郷聯合艦隊司令長官報告

二十一日午前八時頃旅順口港外に於て封鎖勤務に服せる第五驅逐隊が港内より出たる支那船の清國人二名を押留して詰問したる所によれば、三四日前敵の驅逐艦二隻旅順口港外約一里半の所にて作業中、敷設水雷に罹りて沈没し兩艦の死體百四十名計りあり、又新泰平號と稱する氣船も數日前港外にて作業中燦沈せりといふ。其の他此の詰問に於て得たる所は近時の諸情報と大同小異なり。

### 旅順口外の戦 (六月二十三日)

二十四日午前十時大本營電報東郷聯合艦隊司令長官報告

二十三日午前十一時旅順口外にある哨艦より無線電信を以て敵艦「ペレスウエート」外七隻、驅逐艦

九隻、港口附近に出つとの報告に接し特別の任務に従事するもの、外、總艦艇を擧げ發進す

敵は戰艦六隻、巡洋艦五隻、驅逐艦十四隻にして南下を試みんとするもの、如くなりしも日没後に至り港口外に假泊せり

昨夜(廿三日)我驅逐艦水雷艇の大部分は旅順口港外に於て敵艦隊を攻撃し少くも「ペレスウエート」型戰艦一隻は沈没したるもの、如く「セバストーポリ」型戰艦一隻「ディアナ」型一等巡洋艦一隻は今朝(廿四日)曳かれて港内に入るを見たりとの報に接したれば多分大損害を受けたるものならん

我艦艇には大なる損害なく、驅逐艦白雲は敵彈のため士官室を破られ、戦死下士卒三名、負傷海軍少尉宮川正雄外二名を出たし、千鳥は後部汽罐室に一彈を受けたるも死傷なし又第六十四號水雷艇第六十六號水雷艇には少許の損害あり其他の皆無事なり

(備考)敵は損傷せし戰艦以下には唯應急修理を實施し、又港口閉塞は辛うして戰艦を通過し得る程度に開通したる者と認め

(註)此の戦に参加の將校左の如し

驅逐艦司令(白雲乗組)大佐淺井正次郎○千鳥艦長少佐櫻井吉九○白雲艦長少佐狹間光太○水雷艇隊司令第六十六號艦長少佐若林欽○第六十四號艦長大尉田尻唯二

敵艦隊に際し驅逐艦白雲及五十三號水雷艇に於ける死傷者左の如し

●白雲乗員(戰死)海軍上等兵曹伊藤嘉藏○海軍二等兵曹内田友三○海軍三等尉宮川正雄○海軍三等機關兵曹神戶圭一○海軍一等機關兵曹田松四郎○(重傷者)海軍一等機關兵曹木橋巳之吉○(重傷者)海軍二等機關兵曹河本

第十七章 旅順口外の海戦

### 同 詳 報

二十六日午前大本營電東郷聯合艦隊司令長官報告

聯合艦隊は一昨二十三日旅順口外に於て敵艦隊を攻撃せり此日早朝より敵艦隊(戦艦「ベレスウエート」**「ボルターワ」**「セフストポリ」**「装甲巡洋艦」**「バーン」**「巡洋艦」**「バルラーダ」**「ディアナ」**「アスコリド」**「ノーウキク」**)は數隻の掃海汽船を先頭とし漸次に港外に出てんとするもの、如く封鎖勤務にある我哨艦は無線電信を以て其舉動を報せり

爰に於て敵の出動に對する豫定計畫に基き各方面にある諸隊は直に發動の準備を整へ在泊せし艦艇は逐次に出港して急速旅順口に向ひ特別任務にある艦艇の外我艦隊は悉く豫定位置に集中せり是より先き第一驅逐隊(司令海軍大佐淺井正次郎)第四驅逐隊及び第十四艇隊等は港外にありて終始敵の動靜を監視せしか午前十一時頃に至り敵艦隊は戦艦「ツエザレーウキチ」**「レトウキサン」**「ボベ」**「ダ」**を加へ全力悉く港外に出現し其數多の掃海船艇は我機械水雷敷設面を航破して漸次に通路を開かんとするを見屢は近きて之を妨害し午後三時頃第四驅逐隊第十四艇隊は此掃海を掩護せる敵の驅逐艦七隻と砲戦して之を撃退し其一隻は我砲彈の爲めに火災を起し港内に遁入せり次て敵艦「ノーウキク」其驅逐艦を掩護する爲め近き來りて我を砲撃せるを以て我驅逐艇隊は遂に退

却して戦隊に合せり之を當日戰鬪の發端とす

然に敵は其掃海を急行し敵の艦隊は「ノーウキク」を先頭とし掃海汽船の後方に随ひ沖合に出て來り午後四時過くるの頃第三戰隊は其部下を集團して敵と觸接を保持し漸次に之を南方に誘致せり

敵は始めて南東の針路を取りしか次て正南に變針するか如くなりし

此時第一戰隊は遇岩の南方に於て尙ほ敵の視界外にありしか先づ驅逐隊水雷艇隊を集合して襲撃準備を爲さしめ徐ろに敵の洋中に出るを待ちしか午後六時十五分に至り始めて敵艦隊を以て遇岩の北西約八海里に見たり敵は「ツニザレーウキチ」を先頭とし戦艦を前に巡洋艦を後に十隻の單縱陣をなし「ノーウキク」及驅逐艦七隻を右側に置き南に向へり

我艦隊は戦艦を掲て戦艦の熟するを待てり午後七時三十分彼我の距離一萬四千米突に入り我艦隊は敵の隊列に對し倒まにイの字を畫きしか敵は次第に右方に針路を轉し我と同方向に進まんとするもの、如く我も少しく右方に轉針して終始敵の先頭を壓せり

然るに午後八時を過くるの頃敵は遂に針路を北方に反轉し旅順口に向ふ如くなるを以て我艦隊は一齊に右八點に回頭し横陣を以て暫らく之を追ひしか時將に日没(八時二十二分)に近く水雷攻撃の時機漸く熟せしを以て午後八時二十分驅逐隊水雷艇隊に襲撃を命し同時に艦隊は左八點に回頭して單縱陣に復す

各驅逐隊水雷艇隊は直に我艦隊の後尾を過ぎ疾風の如く敵艦に向て進めり

午後九時三十分の頃第十四艇隊は港外約五海里に於て敵艦隊の後尾に對し既に第一の襲撃を試み第五驅逐隊之に續けり敵の艦隊は倉惶順序を亂し旅順口に向ひしか途に港内に入る能はずして午後十時三十分の頃皆港外蠻子營の砲臺の前面より城頭山の下に投錨せり

之より終夜我驅逐隊艇隊は敵艦隊及び敵要塞の無數の探海燈と猛烈なる防禦砲火を冒して天明に至る迄連續前後八回餘の襲撃を爲せり

此襲撃中奏功を確認したるは午後十一時三十分頃鮮生角の方向より迂回して急進したる第十六艇隊の攻撃にして若林少佐の指揮せる白鷹は「ペレンスウェイト」型と見わたる敵艦の艦首に對し斜に二個の水雷を發射し同艦の大火焰を揚げて轟沈せるを目撃せりと云ふ

其他の效果に就ては敵防禦砲火の音響激甚なりしと海面を打てる敵彈に依り無數の水柱上りし爲め我艦隊より確實に之を認め得たるものなし

翌日(二十四日)天明港外を偵察したる第四第五驅逐隊其他哨艦の見る所を綜合すれば敵艦隊は數に於て「ペレンスウェイト」型戰艦一隻を滅し外に「セフストポリ」型戰艦一隻、「ヂアナ」型一等巡洋艦二隻だけは自力にて航行し得ざるだけ損害を受けたるものと認む

蓋し當夜月明かにして襲撃に便ならざりしと敵艦の碇泊陣列我發射線に對して狹少の正面を顯はし

たる爲め攻撃の効果は多大ならざりしも我攻撃隊に於ても敵砲火の猛烈なりしに拘らず損傷意外に少く第一驅逐隊の白雲は敵彈に士官室を破られ火災を起し同時に舵機を損し下士卒三名戦死し、宮川少軍醫外下士卒二名負傷し、第十四艇隊の千鳥は其後部汽艙室に炸發せざる巨彈を受けたると第二十艇隊の第六十四號艇、第十六號艇隊の第六十六號艇か少許の損害を受けたると第十二艇隊の第五十三號艇の准士官一名負傷したるに過す

各戰隊の諸艦に至りては素より損傷なし

此戰陣に於て聯隊艦隊か少許の損害を以て敵を屈したるものは一に

大元帥陛下の御稜威に依る

二十四日旅順口港外の敵艦は或は曳かれ或は自力にて順次に港内に入り午後四時頃城頭山下に擱坐せりと見わたる一艦の入港するを最後として港外亦敵影を見ず茲に於て聯合艦隊の諸隊は再び豫定の配備に就けり

此戰陣の概況は茲に報告せしか今各方面の配備にある諸隊よりの報告を得たるを以て之を綜合し茲に詳細の報告を呈出す

勅語夏郷司令長官に下る

聯合艦隊の百餘ヲ排シ敵ノ艦隊ヲ制壓シ我陸軍ヲ敵地ニ上陸セシメ砲實ナル根據地ヲ作成シ更ニ敵ノ艦隊ヲ旅順港外ニ驅テ其數



襲撃破り俾功ヲ奏セリ  
既深ク將校下士卒ノ勤勞勇武ヲ嘉尚ス  
汝等益々奮勵シテ前途ノ大成ヲ期セヨ

東郷司令長官の奉答  
犬馬の分に對し茲に又區隔なる二勳語を賜り感激に堪へず臣等益奮勵以て 國旨に副ひ奉らんことを期す右謹て申

旅順口夜襲 (六月廿七日)

二日午後大本營電東郷聯合艦隊司令長官報告

第十二水雷艇隊(司令海軍少佐)山田享は六月二十七日夜旅順港外にある敵の哨艦に對し攻撃を行ひたり

其の報告に據れば同夜(廿七日)我艇隊は旅順口外に進航せしに敵の窺知する所と爲り探海燈の熾なる照射と砲臺軍艦の猛烈なる射撃を冒して黄金山下にある二檣三煙突の敵哨艦(戰闘艦又は一等巡洋艦ならん)を襲撃せしに該艦は水柱を擧げて轟沈せり此時敵の驅逐艦は我を攻撃し來りしを以て之と砲火を交へたりしか其内一隻は艦腹を現はし白煙を揚げながら轉覆沈没せり、之れ各艇が齊く敵の探海燈光下に明認する所なりと

此の攻撃中、海軍六尉權藤藤義以下十三名、負傷海軍中尉矢野祐太郎以下二名なり

敵艦隊元山を襲ふ (六月三十日)

三十日元山海政府への電報

(一) 露國水雷四隻今朝(三十日)五時三十分入港せり

(二) 露國水雷は都合五隻にして尙ほ沖合に三隻の軍艦らしきもの見ゆ居たり

(三) 露國水雷艇は今午(三十日)六時二十分居留地を砲撃しつゝあり

(四) 露國水雷艇六隻午前六時四十五分砲撃を止め碇泊中の小蒸氣船、帆前船各一隻を擊沈し七時二十分港外に去れり

(五) 露艦は軍艦三隻、水雷九隻、驅逐艦らしきもの一隻にして九時半安邊沖を東南に向つて去りつゝあり

(六) 露艦砲撃の爲め居留地の受けし損害は極めて些少なり、小蒸氣艇は仁川堀久所有のユウチン丸、帆前船は昨夜(二十九日)北海道より入港せし清砂丸にして居留地の受けし敵弾は二百發内外ならん

(七)

撃沈されし清砂丸(百十五噸)乗組員の言によれば二十四日頃城津沖合にて探海燈に遭へりと  
居留民は目下避難中なるも皆無事

同 別 報

三十日午前元山より大本營發電

(一)

本日午前六時元山港へ敵の水雷艇四隻入來り居留地を砲撃し間も無く其水雷艇は六隻に増加せり尙  
沖合に敵艦三隻あり

(二)

元山、京城間の電線は午前六時三十分より不通となれり(是は暴風の爲めなり)

(三)

本日午前十一時五十分元山への電信は開通せり

(四)

敵は其後小蒸氣一を撃て焼き沈め又帆船一を撃て焼き水雷艇六は逐次港外に出て一旦葛麻浦の陰に  
集まれり敵の總數は軍艦三(「ロシヤ」「グロムボイ」「リュウツク」)驅逐艦らしきもの一、水雷艇九  
にて合計十三なり夫より敵は一旦北に向ひしも更に南に來り港外に皆集り居りしか十時三十分より

雨強くして如何になりしや見ねず敵の發射彈は百八十餘にて居留地には多少の損害あり

同 別 報

(三)

三十日元山領事館發外務省發電  
本日午前十時過より暴雨甚しく濃氣の爲め一里の沖を見る能はず一時再び港内に向はんとせし露艦  
らしき軍艦三隻は遂に北行したるものゝ如し目下の形勢にては平穩なりと認めたるにより守備隊長  
と協議の上避難民をして一先歸還せしむることとせり  
露艦の砲聲により兵士二名、韓人三名微傷を負ひ領事館官舎は一彈を受け居留地各區中にて敵彈を  
受けたるものあり火災二ヶ所に起りしも直に消止たり何も些少の損害に過ぎず

上村艦隊敵艦隊を逐ふ (七月一日)

五日午前大本營發電上村第二艦隊司令長官報告

七月一日午後六時四十分敵艦「ロシヤ」「グロムボイ」「リュウツク」の三隻對馬東水道を南下し海峡  
を通過せんとす我艦隊は對馬壹岐の間に於て其前路を扼し之に迫りしに敵は我艦隊を認むるや急に  
舵を轉して北々東に逃走せり此時彼我の距離約二十海里我艦隊は全速力を以て之を追躡せしも時漸  
く薄暮に近く將に敵の形跡を失はんとす我水雷艇隊の一部は益す進て二三海里に迫りし時敵は探海  
燈を照らし短射防戦に努む我艦隊は益す之に迫りしも砲戰距離に達するに至らずして午後八時五分

第十七章 旅順口外の海戰

勇敵は忽然燈火を滅して暗中に没せり我艦隊は百方之を搜索せしも遂に之れを發見するを得ず我艦も亦水雷發射距離に達するに至らずして敵を逸せり

### 海門艦の沈没 (七月五日)

七日後大本營電東郷聯合艦隊司令長官報告

軍艦海門は七月五日特別の任務を帯び作業中濃霧に會し大連灣外に於て敵の機械水雷に觸れ破損沈没せり艦員の大部分は救助收容せられたれども艦長高橋守道、主計長塚原喜八、掌砲長松下善之丞外士卒十九名は生死不明なり

船長は總員に退去を命したる後部下の勸告せしにも拘らず退艦乗艇を固辭し最終まで艦橋に止まり遂に本艦と共に其運命を共にせしか如し

### 第三節 摩天嶺の逆襲 (七月四日)

五日午前大本營電黒木大將發

七月四日朝未明濃霧に乘し敵の歩兵約二大隊は摩天嶺にある我前哨に突襲し突撃三回に及び彼我接戦我前哨は激戦の後敵を撃退し金家堡子(摩天嶺の西麓約一里半)迄追撃せり敵は様子嶺(活水站の西方)方向に退却し我戦死十五、負傷將校一、下士以下廿九名なり敵の死傷は無数にして戰場に遺棄しあるものゝみにても死者三十傷者五十餘なり

(註)摩天嶺は一夫道に當れば萬卒も過ぐる能はざる天險の地にして遼陽まで約十五六里間に占領の公報なしと雖も既に七月一日我軍の占領に歸したるものなり

### 同 別 報

五日午前大本營電黒木大將發

午前四時頃(四日)敵兵二三名摩天嶺西北方約二基路米突に我か小哨を急襲し、小哨長吉田少尉は直ちに之を其の後方に報すると同時に漸次退却して其の本隊に合せんとするや他の約一中隊の敵は北方山地より現出して吾を包圍し、吉田少尉は部下の大部を南方山地に差遣し自から五六の兵卒と共に止まり格闘し敵を斬ること十數名、遂に血路を開きて退却せり前哨部隊は銃聲を聞て直ちに陣地に赴かんとせしも敵の一部は已に我か陣地中に進入しあり、茲に於て彼我悲惨なる格闘戦を爲せり此の際該前哨部隊の一部は南方山地より側撃したるため敵兵退却の色あり、恰かも好し前哨主力の一部も之に増加し遂に敵を撃退せり茲に於て馬場大佐は其の部下の一部を率ゐて追撃し金家堡子(摩天嶺の西麓約一里半)附近に至りて塔灣西方の敵と相對せり

小高嶺西方に在りし我か前哨部隊にも摩天嶺方面より少しく遅れて敵兵來襲せしか忽ち撃退せり敵の兵力は約二大隊なりき、而して此の戦闘は殆んど接戦にして我か死傷の多くは數ヶ所の劍傷を負へり

我が戦死特務曹長吉場竹次以下十八名、負傷中尉河野治一(重傷)少尉小林郁四郎(輕傷)以下三十六

名なり

敵の隊號は摩天嶺に向ひしものは歩兵第十、第廿四聯隊、新開嶺に向ひしものは歩兵第廿二聯隊にして様子嶺方向に退却し、其少數のものは塔灣及其西北方高地附近に停止せり。敵の死體にして我軍の埋葬せるもの五十三、名負傷者約四十、追撃のため生したる敵の死傷は未詳なるも尙ほ多數ある見込なり。

### 滿洲軍總司令部の進發 (七月六日)

滿洲軍總司令官大山元帥、滿洲軍總參謀長兒玉陸軍大將及び幕僚福島井口兩陸軍少將松川陸軍大佐等の一行は七月六日午前十一時東京新橋を發して出征の途につく。

## 第十八章 蓋平城の占領

自七月三日 敵逆襲して劔山を恢復せんと企つ (攻圍軍)

至七月五日 (一) 七月三日

盤道及黃泥川大上屯方面に於ける敵の來襲

右縱隊

右縱隊右翼隊方面に於ては敵情變りなしたる翼隊方面に於ては敵斥候の出沒頻繁を加へ其作動稍々活

氣を帯び來れり

左縱隊

右翼隊方面

唯敵斥候の出沒を見るのみ

中央隊方面

午後一時頃より二時に亘り敵の砲兵約八門王家店南方に現れ歩兵少くも二中隊劔山方面の我陣地向ひ攻撃し來る當方面の守備たる歩兵隊の大部此敵と射撃を交換す午後四時三十分頃同隊の一部に對せる敵は増加隊を得て前進を始む第一線の歩砲兵機關砲隊と協力して之を擊退す

午後五時二十分頃敵砲約四門大石洞西方高地附近に布陣し中央隊の第一線に向て射撃を雨下す午後七時に至り前正面の敵兵逐次大白山方向に退却し其砲兵のみ依然其陣地に在り午後八時三十分敵兵約一大隊軍樂を奏し大白山方向より攻進す我第一線は僅に陣地兩翼の守備兵を残し其餘を以て逆襲に轉す敵兵我喊聲に驚き退却す此日我中央隊に來襲せる敵は歩兵約二大隊砲約十二門機關砲二三門にして此夜大白東方一帶の高地より王家店東北高地に亘る線に停止せり

左翼隊方面

午前五時三十分老坐山北方一帶の高地に在りし我前哨は敵兵前進の徴を認む同六時に至り敵兵約二

小隊標高一九五の高地に同一中隊標高一二七附近の高地に現出し我兵と射撃を交ゆ  
 午後一時より二時に亘り敵兵増加す我前哨部隊本陣地に歸還す午後三時五十分敵兵約二中隊密集隊  
 形を以て老坐山北方鞍部を下り前進を始む標高三二一附近に在る吾砲兵中隊之を急射す敵兵潰亂し  
 て退却す午後六時半敵兵一大隊老坐山南方高地に散開し射撃を始む同四十五分少くも四門の敵砲同  
 山の北方鞍部に現出し我左翼大隊を猛射す吾砲兵之に應射し敵砲を沈黙せしむ此夜敵兵晝間の位置  
 を固守して動かす

(二) 七月四

右縦隊

午前五時敵の歩兵約一中隊谷溝北方約千米突の高地に現れ五谷谷子及其北方に在る我監視部隊に向  
 ひ發射す我兵之に應し午前九時に至る同時敵兵約二中隊谷溝村内より前進して其南方約二千米突の  
 高地を占領し我陣地の左翼に向つて射撃を開始し同時同村北方高地に在りし敵兵約一中隊も亦盤道  
 西方高地の我陣地に向ひて急射を加ふ我兵之に應射し銃聲尤も熾なり九時四十分左縦隊の右翼隊に  
 屬する砲兵谷溝南方高地の敵を砲撃す敵兵高地稜線の後方に匿れ爾後前進せず此の如くにして遂に  
 日没に至る  
 午後十一時半敵の一小部隊牧城驛南溝方向より盤道西方の我陣地に向ひ夜襲し來りしも我兵直に之  
 を撃退す

を撃退す

左縦隊

右翼隊方面

午前七時半敵の歩兵一中隊南谷溝東方高地に他の一中隊同村東南約千五百米突の高地に現れ工事を  
 始む乃ち我砲兵大隊(一中隊缺)之に向ひ急射す敵兵忽ち稜線の後方に匿る同時安子嶺附近に在る敵  
 も約四門我砲兵に向て砲火を開始す我砲兵遮蔽の位置に轉じ主として敵の歩兵を射撃す爾後情況の  
 變化なく夜に至る此日當面に在し敵は多くは歩兵一大隊安子嶺に在りし敵の火砲は新式速射砲少く  
 も砲四門(舊式砲六門なりしか如し)

中央隊方面

午前一時より二時に亘り一二中隊の敵兵劔山に向ひ兩回突撃を試みしも我兵のため撃退せらる  
 午前六時敵の歩兵一大隊半劔山及我陣地の左翼(劔山の東南約三千米突に在る高地)に向ひ前進す我  
 第一線の歩砲兵急射を以て其前進を阻碍す既にして王家店西方鞍部に在る敵砲約八門我に向ひて發  
 射す午前七時當方面の敵は歩兵約三大隊に増加し我防禦線の前方八百乃至千米突の地點に散開し我  
 第一線と射撃を交換す其砲兵は前日位置より劔山及我砲兵陣地を猛射す同三十分敵の歩兵約二中隊  
 大石洞方面より前進し來る依て午前八時我豫備隊は西部猪園子溝に向ひ前進す

午後十一時に至る間敵兵屢々前進を企てしも我隊の猛烈なる射撃に支へられ終に其目的を達せずして止めり正午頃我前面の敵の兵力約七中隊半に上り劍山西方に向は一聯隊の兵力あり

午後一時二十分劍山東麓に在りし我砲兵二中隊西部猪鬃子溝西南約千五百米突の高地に陣地を轉換し敵歩兵火の損害を避く午後三時五十分敵の砲兵再び劍山を猛射し其歩兵は屢々前進を企てしも同地守備隊の強硬なる抵抗に遇ひ終に其目的を達すること能はず然れども王家店南方、毛道溝東方高地竝に安子嶺側南に在りし敵の砲兵は其射距離六千米突に達し其曳火射撃の威力、精度共に猛烈を極め我砲兵は甚しく苦戦し又高地上に在る我散兵も其位置を保守すること困難なるに至れり加之中隊前面の敵は目下歩兵約十大隊に増加し加ふるに敵の軍艦の現出して我左翼隊に向て砲撃を爲すに至り戦況轉た苦し

乃ち午後六時豫備たる歩兵を鐘家屯附近に進め左縦隊長の令下に属せられ又目下戰場に到着したる重砲三中隊を盤道附近に、同二中隊を黃泥川大上屯東方に進め各陣地を占領し以て中央隊の戦闘を援け海軍陸戰重砲隊は南沙河口附近に陣地を占め戦勢を張る

此夜敵は戦線に在りて夜を徹し銃聲終夜止まず午後十一時頃敵數未詳の敵兵劍山を逆襲せしも我兵之を撃退す

左翼隊方面

午前六時頃我砲兵老坐山北方鞍部敵の砲兵陣地に向て砲火を開始す敵は二三回應射して黙然れども其歩兵は同山北方一帯の高地稜線に散開して第一を猛射す

午前十一時半敵の歩兵隊一大隊西方より老坐山に向ひ前進す仍て我豫備隊を第一線に増加す午後三時頃敵兵漸次増加し戦勢稍々活氣を呈す五時頃老坐山北側に在る砲兵も亦射撃を始め彼我の銃聲甚た熾なり午後六時敵艦數隻近海に現出し我陣地を射撃す我兵苦戦す然れども敵の歩兵は敢て高地を降り前進し來らす其兵力約三大隊なり

右縦隊

七月五日午前二時半敵の歩兵前日の位置より前進を始め盤道西方高地に在る我陣地前約五十米突の地點まで近逼せしも我守備兵之を撃退す天明に至り敵は再び攻撃を試みしも其目的を達すること能はずして止む午前八時敵の銃火漸く緩む同九時頃に至り逐次退却を始め偏石棚子及溝口東北高地に出没し午後一時以後終に其影を失す

左縦隊

右翼隊の方面に於ては特に記すべきことなし

中央隊方面

午前二時半敵の歩兵一部隊我劍山守備たる歩兵二中隊に向ひ正面及側面より突撃し來る我兵格闘し

て之を撃退す

午前六時三十分頃より敵兵退却を始め午前十時に至り一部は大白山一帯の高地に停止して工事を始め大部は陸續西方に退却せり

午前十時半我歩兵一小隊剣山西南稜に在る舊小哨の位置を恢復せんとして前進し敵の十字火に陥り小隊長負傷し終に其目的を達すること能はずして還る

午前十時四十分王家屯南方高地に在る敵の砲兵我第一線殊に剣山に向ひて射撃を開始し約一時間に及ぶ爾後緩徐なる速度を以て時々我陣地内を射撃せり

左翼隊方面

既月以來老坐山附近に在りし敵の大部退却せしもの、如く同上一帯の高地上に只監視兵あるのみ面して大白山東方高地には敵兵工事を施しつつあり

午前十一時頃より敵の艦艇五六隻龍王塘沖に現れ時々雙頂山及青泥川大上屯附近の我陣地を砲撃し午後六時に至る

此の如くにして我軍依然舊陣地即ち左縦隊は其右翼隊を以て安子山附近より王家屯南方高地に亘る線を左翼隊を以て王家屯南方高地の南麓附近より盤道附近に亘る線を占領し中央縦隊は盤道東南側高地より亂泥橋東南方約二千米突に亘り左翼隊は其右翼隊を以て亂泥橋南方約三千米突の高地より

劍山、青泥川大上屯附近を経て雙頂山に亘る線を占領し敵は雙臺溝附近より圍屏溝東北方高地安子嶺毛道溝東方高地を経て大白山に亘る線に在りて彼我桐對峙す

以上三日間の戦闘に於てせし敵の動作は單に偵察戰又は威嚇的動作にあらざること明にして察するに敵は其防禦線を堅固にせんかため我軍に奪取せられたる劍山を恢復し尙ほ爲し得れば青泥窪に於ける我施設を破壊し以て旅順の命脈を永からしめんとするの企圖なりしか如し而して我軍が其攻撃のため得たる幾多の經驗即ち敵砲の威力及射法、攻撃部署及其實施、夜襲の方法等は蓋し後來我軍を益すること敢て僅少にあらず

敵の死傷に關しては其詳細を知る能はずと雖も諸種の情報を綜合するに三、四百を下らざるか如し又其兵力は歩兵約十三、四大隊砲少くも二十四門、内八門は最新式速射砲なりしか如し

北分水嶺の戦闘、城廠の占領 (七月五、六日)

九日午後大本營署黒木將大報告

五日午後「チ、ンスキー」第一聯隊の千三百騎は北分水嶺附近に在りし我一部隊の前面に來襲せしも撃退せられて北方に退却せり我戦死下士以下四、負傷卒三なり我一支隊は去る六日夜敵騎約三百を驅逐して城廠を占領せり我に死傷なし敵は北方に退却せり

黄金山の敵艦襲撃 (七月七日夜、八日朝)

第六艇隊(司令海軍少佐内田良隆)は七日夜旅順口港口に在る敵の哨艦を襲撃するため雨霧を冒して港口に近づき索敵せしも天明に至るまで敵を發見せず然るに翌八日午前五時三十分に至り第五十八號艇(艇長心得海軍中尉)中牟田武正は黄金山下濃氣の内に敵艦「アスコッド」の碇泊するを認めたるを以て之を襲撃せしか其効果は未だ明ならず同水雷艇隊は敵の要塞より猛烈なる砲撃を受け第五十八號艇、第五十九號艇にて各下士一名重傷を負へり

蓋平城の占領 (七月六日より九日まで) (第二軍)

第二軍は九日蓋平附近の敵を撃退して正午頃全く同地を占領せり其經過左の如し

六日午後大本營發電與大將

本日午前九時前後に於て軍の一部は四方臺東北約一里の山頭及四方臺北方約一里の山頭を守備せし敵の歩兵約千六百名を驅逐して該山頭の線に止まり該地に在りし敵は北方に敗走せり軍の主力は其進路上に在りし敵騎を驅逐しつゝ前進し金家勾より小藍旗を経て二道河の線に達し左翼の一部は崔家屯の高地を占領せり  
我損傷は岩崎少佐(初太郎)重傷、下士以下即死二、負傷十にして敵は死體二十を遺棄しあり  
軍の右翼方面に敗れし敵は蓋平附近に退却せり

七日午後大本營發電

軍は本日砂崗嶺附近に在りし敵を驅逐して正午頃管子溝より大望海嶺東方の高地に亘る線に達せり敵の歩騎、砲の若干は我軍の進路上に在る隘路に於て逐次に抵抗を試みつゝ北方に退却せり  
土人の言に依れば蓋平附近に約二萬、海山寨に約二千、同地附近の約一萬の敵ありて蓋平北方高地及西桑附近の高地には砲兵を備へ又大石橋附近には依然敵兵駐屯し漸次増加の模様ありと  
七月五日以來の死傷者左の如し

八日午後大本營發電

歩兵少佐岩崎初太郎(前掲)重傷、少尉森田貞助輕傷、下士以下戦死四、重傷十一、輕傷七、合計廿四人  
敵は海山寨附近より蓋平附近に亘る間及西桑北方高地附近を占領し午後一時頃よりは鐵道列車を以て海山寨附近に軍隊を下車せしめつゝあり湯地南方約二里の花紅溝附近にも敵兵あるものゝ如し  
軍は豫定の計畫に依り此敵を攻撃せんとする

九日午前大本營發電

軍は本日午前五時二十分より蓋平附近に在る敵に向ひて砲撃を開始し午前八時頃大平屯高地、蔡家屯高地、東雙頂山に在りし敵を驅逐して該地を占領せり敵は石門及海山寨附近に砲列を布き尙ほ頑強なる抵抗を續けつゝあり

第十八章 蓋平城の占領



蓋平附近の敵は昨夜來著しく其兵力を減し蓋平附近の陣地を吾軍の爲に奪取せられたる後石門、海山寮、高家屯附近の險要に據りて再度の抵抗を爲したるも正午頃我軍は更に此敵を攻撃して同高地の線を占領せり敵の砲兵は其後紅旗廠、腰嶺子、石佛寺の高地に在りて我追撃隊を砲撃せしか午後三時に至り砲聲殆ど沈黙せり此戦闘に於て小泉少將は大腿に銃創を受けたり他は取調中

同 續 報

本月九日蓋平占領に關し其後第二軍より到達せし報告の要領左の如し

紅旗廠、腰嶺子に在りし敵の歩騎砲兵は其後十日太平庄附近に集合し次て大石橋に退却し其一部は五臺山に止りたるもの、如し該敵は狙撃步兵第一、第九師團に属する部隊及騎兵約二十中隊、砲兵約六中隊にして太平山、牛心山、望馬臺、青石山に亘りて堅固なる敵の防禦工事ありと又大石橋東方郭家堡子附近には數多の敵の摸營を見る

八日夜より九日の戦闘に於て生したる我死傷を合計すれば約百五十名を算すべし

敵の損傷も亦少からざるか如きも未だ詳報に接せず

同 役 死 傷 數

十九日大本營東大將報告

去る六日より九日に亘り蓋平附近の戦闘に於ける我死傷者左の如し

▲負傷者 陸軍少將小泉正保△歩兵少佐岩崎初太郎△歩兵中尉岩山長彦△歩兵少尉森田貞助△歩兵少尉谷口忠 戦死下士以下二十四名負傷同百二十四名、死傷計百五十三名

旅順港外の砲戰 (七月九日)

十一日午前大本營東大將聯合機隊司令長官報告要領

九日午前七時頃より敵艦「バヤーン」「デアナ」「バルラーダ」「ポルターソン」「ノーウキック」砲艦二隻、驅逐艦七隻は敵の多掃海船艇を先頭として漸次に港外に出て同日午後鮮牛角より龍王塘附近まで來れり我驅逐隊の一部は敵の掃海を妨害するの目的を以て屢々之と砲戦し第三艦隊の一部は小半島附近に在りて之と對應し午後二時頃に至り敵艦「バヤーン」と多少の砲火を交換せしか午後四時頃に至り敵は漸次港内に退却せり我艦艇には驅逐艦朝潮に於て給仕一名輕傷したるの外一の損害なし

柵木城湯地方面の戦闘 (七月九、十日)

(一)

十月十日午前大本營報告

大孤山上陸軍は本日(九日)一縱隊を以て仙家峪、接官所方面より湯池方向に又一支隊を以て分水嶺を経て柵木城に向ひ前進せしめたり

接官所附近に在りし敵は我前進を見て谷地を西南に向ひ退却するも午後五時頃敵の砲兵周家庄西方

高地に見出し射撃を開始せり其後の状況に就きては未だ報告を得ず  
栃木城に向ひし一縦隊は途中敵を撃攘しつゝ西半拉峪附近に在りし敵の前進陣地を襲撃せしに敵は  
非常に狼狽せしか如きも後に至り歩兵約十八大隊、砲兵二中隊提出せしを以て該縦隊は偵察の目的  
を達し交戦の必要なを以て戦闘を避け某地に引揚げたるも敵は急迫せざりし  
栃木城以南に在る敵は約一師團にして其騎兵の大部は牛心山方向に位置せるものゝ如し

(二)

十一日午前大本營報告

昨日の報告に繼續せる状況左の如し

接官所及仙家峪に通ずる二道路を取りて前進せし一縦隊の一部は九日午前九時より十一日の間に仙  
家峪及芹菜峪南方高地に達せり然るに敵は仙家峪西方高地を占領して頑固に抵抗し夜に至るまで退  
却せざりし

接家所方面に進みし同縦隊の主力は周家庄西方高地を占領せる歩兵約二大隊、砲兵約一中隊の敵と  
九日夕刻まで對戦せしも遂に之を撃退し接官所附近にて戦闘隊形の儘停せり

翌十日拂曉より前記の諸隊は協同して仙家峪西方高地の敵を撃攘し之を追撃して更に秀才潭の高地  
を堅固に占領せる敵を諸方面より攻撃して該地を占領せり  
此戦闘に於て騎兵中尉竹内孝戰死す其他取調中

旅順口哨艦の襲撃

(七月十一日夜)

十二日午前大本營東部聯合艦隊司令長官報告

第六水雷艇隊(司令海軍少佐内田良隆)は十二日午前零時過旅順口外防材附近に進行し港口の哨艦  
「デアナ」型に對し襲撃を試み第五十七號艇(艇長海軍大尉三田村誠造)、第五十九號艇(艇長心得海軍  
中尉大寺量吉)は之に對し水雷を發射せしか其効果は未だ明ならず敵は猛烈なる砲火を以て防禦せ  
しも我艇隊には一の損傷なし

摩天嶺附近の逆襲

(七月十七日) 第一軍

十八日午前大本營黑木大將報告

敵の軍團長「ケルレル」は約二師團の兵を以て十七日午前三時頃より濃霧に乘り我軍一部の占領せる  
摩天嶺及其左右に亘れる陣地に向ひ猛烈に攻撃し來れり

我軍の一部は頑強に抗戦し各地點に向ひし敵を悉く撃退し金家堡子(甜水店の東方約一里)まで之を  
追撃せり而して彼我の死傷は目下取調中なり

此戦闘に參與せる我軍は頗る勇敢に動作し能く其任務を盡したるものと認む

同 詳 報

十九日午前大本營黑木大將報告

第十八章 盛平城の占領

### 摩天嶺方面

午前三時頃敵兵摩天嶺西方の峠に來襲す岡崎少將の指揮する歩兵某聯隊は直に摩天嶺に於ける豫定の陣地に就き又五峯觀西北方高地に在りし砲兵も同時砲列に就けり午前五時過敵の歩兵約二大隊は我前哨の退却に尾して摩天嶺西方の山頭に展開す我全線之に向ひて射撃を開く爾後敵兵益々増加し午前七時三十分には其兵力約四聯隊以上と爲り屢々我左翼を包圍せんとせしも我摩天嶺高地占領部隊のため其目的を遂せず午前九時に至るまで我歩砲兵は此數倍の敵と對し頗る勇敢に抵抗せしか遂に敵は左翼より逐次退却を始む我歩砲兵は射撃を以て之を追撃し更に此際到着せる歩兵第某聯隊の一部と共に全線追撃前進に移り騎兵聯隊も亦之に参加せり敵は甜水店及塔灣方向に退却し内約七大隊は金家堡子附近の高地に停止せり午後二時敵の砲兵四門は塔灣附近より我追撃隊を射撃す依て追撃隊は李家舖子西端に停止し敵と對峙せり

### 新開嶺方面

敵情偵察のため新開嶺より「マクローメンザ」方向に派遣せし歩兵第某聯隊の一中隊は「マクローメンザ」東方に於て北方山地より來れる敵の歩兵約一大隊及塔灣方面より來れる敵の歩兵二大隊と遭遇し苦戦最も力め奮戦隊と共に此敵を西方に擊退し午後一時頃「マクローメンザ」東方高地を占領し摩天嶺、塔灣方面に退却する敵を猛射せり

### 小高嶺方面

小高嶺東方約一里に在りし歩兵第某聯隊の一部は敵の歩兵約一聯隊の攻撃を受けしも此敵は摩天嶺の敵と同時退却を始めたるを以て該隊は小高嶺まで之を追撃せり

### 下馬塔方面

午前八時頃敵の歩兵約一大隊騎兵一中隊下馬塔西北方に在る我前哨中隊に來襲す中隊は苦戦最も努め曹長以上悉く死傷せり其後敵兵増加して約一聯隊に至りしか吾前哨中隊の二中隊及某聯隊の一部に増援し午後四時五十分に至り終に之を黃家堡子方向に擊退せり又橋頭方向よりは敵の歩兵約八中隊騎兵一二小隊徐家堡子に來襲し之に對せし我歩兵隊は工兵隊の増加を受け午後一時に至り之を西北方に擊退するを得たり

### 様子嶺方面

様子嶺方面敵情偵察のため派遣せし偵察隊は午前五時「リホ」嶺を發し午後三時歸還せり偵察の結果敵は歩兵三中隊砲八門を「スウイチャンザ」西方高地に現せり此日來襲せし敵は軍團長「ケルレル」の指揮する狙撃第三、第六師團及歩兵第九師團を以て編成せる約二師團なるか如し  
西師團に於ける我死傷將校以下二百九十九にして敵の損害及鹵獲多數なるも其數未だ詳ならず

### 我軍の死傷

▲戦死將校 大尉田村玄佐美△中尉後藤鶴治△品田茂平△少尉浦野幸治郎 下士以下三十九名  
 ▲負傷將校 少佐高松鐵太郎△大尉牛圓重二郎△末松四郎△中尉小林榮之進△出羽重三△柳澤繁内  
 松繩良太△味岡玉喜△菅原良吉△佐藤次郎△少尉佐藤悌造△高橋雄三△特務曹長熊谷又吉△多田  
 清三郎△稻葉敏松 下士以下二百四十一名

敵の死傷

二十日午前大本營署黒木大將報告

十七日摩天嶺附近の戦闘に於ける敵の損害は昨十八日迄に我軍にて埋葬せし死者約二百又收容せし  
 傷者は三十九、健康者は十二にして敵は最初より第一線に數多の擔架を準備し巧に死傷者を運搬せ  
 り而して捕虜及實見せし者に言に依れば敵の損害は少くも一千を下らざるか如し

勅語西第二師團長へ下る

第二師團へ我ニ倍セル敵軍現勢ニ乘ジ摩天嶺及其附近ヲ襲撃シ來ルニ對シ長時激戰大ニ之ヲ破リ且之ヲ追撃シ以テ其恢復ノ企  
 圖ヲ挫折セリ 朕深ク其勇武ヲ嘉ス

西第二師團長の奉答

摩天嶺及其附近の戦闘に對し優過なる 勅語を賜ふ感蒙感激の至りに堪へず師團の勝利を得たるは一に 陛下の御機成に依る四  
 尊益々奮勵奮て其本分を全くせんことを期す謹て奉答す

第十九章 細河沿の占領

(七月十八、十九日) 第二軍

(一)

廿一日午後大本營署黒木大將報告

軍の一縱隊は小匂子(城廠の西北約六里)方向に在る敵の歩騎兵に對して歩兵一部隊を派遣し其主力  
 を以て十八日山咀子附近に達せり此時兵力不明の敵は細河沿附近に陣地を占領しあり午後四時三十  
 分頃敵は北方に退却するの狀ありしを以て我前哨大隊は偵察のため前進せしに敵は歩兵約二大隊砲  
 八門を以て應戰す是に於て同大隊は頗る苦戰し其中隊の如きは中隊長以下將校悉く負傷するに至  
 り

我前衛及他聯隊の一大隊は午後六時半戦闘に加入し日没に及ぶも敵兵遂に退却せず戦闘隊形を以て  
 夜を徹せり

此敵は二回攻撃を試みしも我兵悉く之を撃退せり

細河沿附近の敵の陣地は隘路口を扼し二十乃至百米突の比高を有する高地線にして遠く前地を瞰制  
 し且つ堅固なる防禦工事を施し其左側は細河を隔て、險ゆへからざるの山地あり右側も亦遠く楊木  
 溝より高峻なる山岳を攀越するにあらざれば迂回するを得ず

縱隊の主力は十八日夜半より運動を起し其砲兵は紅廟子谷地及其南方山上に陣地を占の縱隊の主力  
 は敵陣の正面に其一部は右側に向ひ又一小部隊は老母嶺を占領して本溪湖方面を警戒し十九日午前  
 五時より砲戰を開始せり

敵は野砲三十二門を以て我に應戰し劇烈なる砲戰は午前九時迄まで繼續せしも爾後は互に緩徐なる

射撃を交換せり

先に敵の右側に向ひし一部隊は峻峻なる山地を踰越して前進し午後三時頃敵の右側に達し同時に他の縦隊より赴援せし歩兵一部隊も亦其附近に到着せり

此に於て縦隊の主力は攻撃前進に移り砲兵も亦急射撃を以て之を援助す然れども敵の歩兵は尙ほ頑強に抵抗し主力は苦戦最も努め敵の右側に迫りし部隊並に赴援部隊も敵の側背に向て奮進し其方面の戦闘亦惨烈を極む

午後五時三十九分主力は遂に細河沿西南高地の敵陣に突入す右側攻撃の部隊は同時敵の退路を遮断し午後八時過細河沿附近一帯の地は我有に歸せり敵は中將某の指揮する歩兵第三十四聯隊(四大隊第三十六聯隊(三大隊)哥薩克一聯隊野砲三十二門にして其主力は混亂して安平方向は一部に北方に逃走せり

我死傷戦死河野砲兵少尉及下士卒五十四、負傷岡村、平岡兩少佐以下將校十六、下士卒三百五十一なり

敵の損害は未詳なるも二十日午前十時までに我軍にて埋葬せし死者四十、捕虜將校二、下士以下四十五にして尙ほ著しく増加の景況あり捕虜其他の言に依れば敵の死傷は少くも一千以上なるか如し

(一一)

二十一日午後大本營發電

一軍より派遣したる一支隊は十九日小子(小匂子ならん)の南方約二里越家堡に於て工事を爲しある陣地に據れる敵の歩兵約一大隊、騎兵約一千を攻撃し、四時間に亘る戦闘の後之を太子河右岸に驅逐せり我隊の負傷下士以下十七敵の死傷は未詳

(一二)

二十一日午後大本營發電

細河沿の戦闘に於て敵の歩兵第三十(?)聯隊長負傷

一昨二十日中に我軍にて埋葬せし敵の死體百三十一あり其餘鹵獲品は彈藥車三箇、小銃三百、被服裝具多數後方に運搬せる敵の死傷者は一千以上なり平岡少佐遂に戦死せり

### 我軍の死傷

二十一日午後大本營發電

十八、十九兩日細河沿附近戦闘死傷者左の如し

▲戦死 平岡歩兵少佐△野砲兵少尉△下士以下七十

▲負傷 岡村歩兵少佐△西久保歩兵大尉△岩田歩兵大尉△牟田口歩兵大尉△日野砲兵大尉△青柳歩兵少尉△今村歩兵中尉△古川歩兵中尉△下田歩兵少尉△中島歩兵少尉△佐藤歩兵少尉△岸田歩兵少尉△小野砲兵少尉△末松砲兵少尉△谷三軍醫△松本特務曹長△下士以下四百三十六

自七月七日 攻圍軍の作戰經過  
至二十三日

七月七日安子嶺方面の敵兵盛に防禦工事を爲す同夜敵の一小部隊我前哨部兵に襲來せしも我兵直に

之を撃退す

七月八日安子嶺方面の砲兵我左縦隊の右翼陣地向ひ砲撃す

七月十日南山分捕の砲十二門を亂泥橋東方高地に、又海軍重砲六門を西部猪園子溝西方約千五百米突の地點に配置す

七月十二日午前三時機關砲を有する敵兵約一中隊我陣地の左翼に現出し我に向ひ攻撃を企てしも我兵之を撃退す

此日敵兵時々我陣地を砲撃す

七月十七日敵の歩兵約一中隊我左縦隊中央隊の小哨前四百米突に現出す我兵之を撃退す其後敵兵帯十字旗を掲げ來り其屍體を收む我兵特に之を許せり

七月十八日敵砲我右縦隊の左翼隊の右翼を砲撃す

### 總進撃の命下る

七月二十二日軍は前面の敵を攻撃するに決し部署を定めて各部隊に命令せり

此夜敵の歩兵約一中隊黃泥川大下屯附近に在る我前哨を襲撃せしも暫時にして撃退せらる

七月二十三日一兵團を右縦隊及左縦隊の中間に於て豫定の陣地に就かしめたり

鮮生角東灣に敵の驅逐艦を撃沈す (七月二十四日)

### (一)

廿六日午前二時廿五分東海聯合艦隊司令長官報告要領

海軍大尉桑島省三の指揮せる第十四艇隊並に特に同艇隊に附属したる第十號、第十一號の兩砲艦及三笠富士の艦載水雷艇は二十四日午前三時頃鮮生角の東灣に潜伏せる敵の驅逐隊を攻撃し艦載水雷艇より通發したる魚形水雷は確に三箇の爆發を認め又砲艦二隻は敵に近きて之に猛烈なる砲火を加へたり其結果は煙霧のため未だ明ならず我艦艇には一も損傷なし

(附言)本文中三箇の爆發を確認せりとあるは雖し當時段々到着する芝罘電報中に沈没せりと傳へらるる「彼驅逐艦」リニエーナマン、ト、フ、コフ「外二隻ならん歟此リニエーナマン、フ、コフ」號は北清事件の際滿洲か清國より奪取せるものに係り又先には國の皇族某外數名の貴族將校を船口まで運送せりと傳へられたるものなり

### (二)

三十一日午後九時二十分大本營東海聯合艦隊司令長官報告

其後の偵察に依れば去る二十四日夜鮮生角東灣に於て第十四艇隊砲艦及艦載水雷艇等の協力襲撃したる敵の驅逐艦四隻の内一隻は煙突の上部を現して沈没し居り尙ほ一隻沈没せるものあるか如し

### 鮮生角方面の苦戰 (七月二十六日)

三十一日午後九時十五分大本營東海聯合艦隊司令長官報告

海軍中佐國澤源太郎の指揮せる掃海隊は去る二十六日午前十一時遼龍王島附近に於て掃海中一砲艦

は敵の水雷を拘束して之を除去せんとするとき掃海索推進器に頼みて進退の自由を失ひ潮流のため鮮牛角の方向に流され敵の要塞及砲艦等より猛烈なる射撃を受けたるを以て廣瀬中佐は自ら他の砲艦を指揮し敵砲火の下に僚艦を救助曳行する際敵の驅逐艇急航し來りて水雷を發射せしも幸に命中せず苦戦約一時間の後漸く小平島の方向に退避するを得たり此戦中救助砲艦は敵砲二筒を受け三名戦死し廣瀬中佐荷村少尉(？)外下士卒九名負傷せり

營城子、偏石棚子附近及大白山附近占領 (七月二十六日)

七月二十六日軍は豫定の如く運動を始めたも早朝来の濃霧に妨げられ午前七時半攻撃を開始す敵は頑強なる砲戦を交へ特に其右翼に在りし敵砲兵は正午頃まで盛に砲撃を行へり我砲兵地形のため充分なる効果を収むるに至らず之がため我歩兵は正午頃既に前進を始めたも敵の強硬なる抵抗に遮られ漸く營城子、偏石棚子附近及大白山附近を占領して日没に至れり全夜戦闘隊形の晝夜を徹す

長嶺子、凹字形山及龍頭山の占領 (七月二十七、二十八日)

七月二十七日軍は午前六時より再び攻撃を開始し我砲兵先づ砲火を開き右縦隊及中央縦隊の大部は口北方向約二千米突の高地に向ひ前進せしに敵は我砲兵に對しては黙して應せず而して歩兵の遂接を見るや忽ち猛火を以て之を迎へ且つ傾斜急峻なる高地の斜面を攀登せざるを得ざるがため數回の攻撃其功を奏せず頗る苦戦せしか午後三時頃我砲火の援助に依り歩兵の一部幸ふして同高地嶺頂の一

部を占領せり然れども不機なる守兵の抵抗と近傍よりする敵の側射とは日没に至るまで全部の占領を許さず劇戦奮闘尤も甚し又左縦隊は主として大白山東方標高一九五の高地に向ひ攻撃せしか地形と敵の動作前記の如くなりに加へて午後二時半頃より敵の艦艇數隻龍王塘附近に現出し劇烈に我左翼を砲撃し大に前進運動に阻害を興へ攻進尤も憚む午後五時更に行ひたる我前進運動も亦目的を達すること能はずして止むに至れり依て夜襲に決し二十八日午前一時より三面合撃し翌朝五時に至り遂に之を占領せり

七月二十八日拂曉より更に攻撃を續行せしに各方面の敵兵遂に其頑強なる抵抗力を消耗し午前九時より退却を始め正午に至り全艦隊全く敵の陣地を奪取す尋て之を追撃して午後四時豫定の如く長嶺子、英谷石の線を占領せり敵の主力は旅順の本防禦線内に退却せしものゝ如し

雙臺溝、安子嶺及大白山附近の敵の陣地は最も峻峻なる地形を利用し約二箇月の日子を以て築設したる半永久性の堡壘にして之を據守せし兵力は旅順守兵の殆ど全部を盡し砲數約六十門少くも其四門は重砲なりしか如し

諸種の情報に依るに二十六、七、八三日間の戦闘に於て敵の死傷は少くも一千餘名にして重砲二門、速射砲三門、機關砲三門其他若干の戦利品あり

敵兵の殘虐

二十七日、の戦場に於て露兵は左の如き残虐を働けり

一、負傷岩石の間に潜伏して露兵の遺害を免れ歸りたる兵卒の言左の如し

夜間敵の斥候は我負傷者の携帶品を奪ひ然る後頭部腹部の嫌なく銃槍を以て之を刺し殘虐なる聲を發行へり

二、戰場掃除隊より左の報告あり

露兵は我死傷者の金銀、時計等を奪ひ死者の眼球を抉り首を切り或は之を捻取りたるもの少からず

戦況 (七月二十九日)

七月二十九日軍は占領せる線上に停止し隊伍の整頓、彈藥の補充等に多忙なり又前面の敵情偵察に従事す

第二十章 大石橋の役 (七月廿三日より廿七日迄)

第二軍

一、大平嶺附近の戦闘

(一)

廿四日午後大本營電報大將報告

軍は敵の監視部隊を驅逐し二十三日午前十一時頃より湯池南方下湯池附近より孟家屯南方高地神樹

屯附近を経て朱家屯附近に亘る陣地を占領し騎兵は左側黃糧堆附近に在り

敵の砲兵二中隊は海城街道上茶棚庵附近に在りて五臺山附近を射撃し又騎兵の大集團は大平山より南方昌邑屯に前進せり敵の本陣地は湯池の北方後此老溝より大平嶺青石山南部田家屯を経て牛心山に亘る線に在りて堅固なる防禦工事を施せり而して敵の大集團は大平嶺の西北青石山の北及橋臺館の西に在り目下陣地及敵情の偵察中なり

(二)

二十六日午前大本營電報

軍は湯池西南約吉羅米の古寺勾附近より禿老鑿店及臥龍崗を経て五臺山に亘る線に展開し二十四日早朝より攻撃前進に移り午前九時我右翼部隊は大平嶺西南約三吉羅米標高百八十の高地附近に達し敵の砲兵は望馬臺青石山の東方鄭家溝附近及前此老溝附近に在りて射撃を爲しつゝあり其數約五中隊なり海城蓋平街道上には未だ戦闘起らず

(三)

二十七日午後大本營電報

軍の前面に在る敵の砲兵は其威力より判断するも百門に下らず我砲兵は地形の關係上有力なる射撃を爲す能はずして軍の攻撃前進は敵砲火の威力に妨られ戦闘を持續しつゝ日暮るゝに至れり軍の前面に在る敵の兵力は約五師團にして二十四日交戦せし其砲兵は約十六中隊餘なるか如此此夜彼我兩軍は密に相接觸して對峙し特に蓋平より海城に通する街道に沿ふては敵兵約二師團あり



ものと判断せるを以て軍は之に對し嚴なる戰備を取れり

二十四日、日暮のため砲戰を停止したる後軍の右翼大部隊は午後十時夜襲を以て大平嶺の東西にありし敵の第一陣地を奪取し夜半より更に第二陣地を攻撃し之に鄰接せる團隊も亦未明山西頭東方高地を占領せり之のため敵は大石橋方向に退却したるもの、如く青石山は午前七時過敵の抵抗を受くることなく我軍の有に歸したり

軍は大石橋に向ひ敵を追撃す  
軍の死傷者は兩日を通して概數八百餘名なり尙ほ詳細取調中

### 二、營口及大石橋の占領

二十七日午後大本營電報大將報告

軍の一支隊は二十五日營口を占領せり營口停車場の諸建築物は悉皆破壊せられ同地にありし露國船舶は凡て遼河上流に逃れ其守備兵は東北に退却せり又遼河には中立國船舶自由に入出入しあり

同上

軍は二十五日右翼部隊の強襲に次ぎ天明より敵の陣地を砲撃せしも二十四日の如く猛烈に應射せず依て午前六時過攻撃前進を開始せしに敵は今や退却を爲しつゝあるもの、如し依て直に之を追撃して大石橋以て前進せり

敵は正午頃其縱隊の後尾を以て大石橋を通過して北方に退却し大石橋及牛家屯附近は目下盛に焼けつゝあり

青石山附近の敵の陣地は其の工事頗る堅固にして田家屯、二道河子間約四里に亘り巧に地形を利用して塹壕、砲臺副防禦等を構築せり

聞く所に據れば露國軍艦「シプーチ」は武装の儘田家屯の上流二十浬の遼河に碇泊しありと

### 三、全戰詳報

二十八日午後大本營電報大將報告

二十三日午前四時軍は蓋平附近の陣地線を出發す各縱隊は共に少數の敵を擊退して流家溝より花見山を経て五臺山附近に亘る線を占領せり此日軍の左翼方面には騎砲兵各一中隊を有する敵の歩騎兵若干部隊ありて屢々抵抗せり

軍は占領したる陣地内に開通し戦備を嚴にして明日に於ける總攻撃の準備を爲せり

二十四日未明軍の右翼たる諸團隊は相連繫して運動を起し太平嶺及其西方百八十の高地及其西方の地區に向ひ前進し午前八時頃羊草勾北方高地より標高百八十の高地を経て孫家屯北方高地の東側に亘る線を占領す此時敵の砲兵は大平嶺、邊汗溝、鄭家溝附近の高地より盛に我に向て射撃す我砲兵は地形困難のため未だ充分之に應戦し得べき陣地に進入すること能はざりき爰に於て歩兵は掩蔽して

陣を占領。暫く時機を待つに至れり。

●電の中央隊は右翼諸部隊の攻撃進捗に伴ひ花見山附近にあり敵兵の援助を受けつゝ前進し午前十時頃、家屯北方高地を占領せしも青石山、望馬臺間に在る多数の敵砲より猛射を受くるを以て之より前進を繼續せず以て右翼部隊の前進及我砲兵の近接を待つに至れり。

●軍の右翼部隊は初五臺山附近の陣地に在りしか其右方に併死せる諸部隊の攻撃進捗を見るや午前九時、第一線を以て牛家屯、劉白塔寺の線を占領し其砲兵は大平庄附近に陣地を占め盛に望馬臺附近の敵砲兵と射撃を交換せり。

●敵の本陣地は右翼牛心山附近より青石山を経て大平嶺附近一帯の高地に亘り連綿せる高地に敵多数の防禦地區を形成し其高地は全く我が攻撃地帯を瞰制し廣濶遠大なる射界を有し敷層の散兵壕には銃眼を穿ち掩蓋を作り且つ所々に鹿柴、鐵條網、地雷を設け野戰防禦工事殆ど完成せり殊に其砲兵は巧に地形を利用し遮蔽陣地を占め我をして殆ど其位置を判断するに苦ましむ之に對し我が砲兵陣地は至る所不利にして敵眼に暴露し然かも其進入は極て困難なり然れども各方面の我砲兵は艱難を冒して屢々陣地を變換し以て歩兵の攻撃を援助するに力めたるも地形斯の如くなるを以て我砲兵は非常なる苦戦に陥り死力を盡して奮戦するも其効力不充分にして敵砲を沈黙せしむるに至らず軍司令官は飽きて攻撃を遂行せんとし右翼部隊に損害を顧みず突撃前進すべきを命ず部隊は猛烈なる敵の砲

●火を肩して前進せしも地形不利にして敵の本陣地の一部たも奪取するに至らずして日没を爲れり。●此際部隊の一部の如きは非常の勇氣を以て一たび敵陣地に突入せしも其陣地頗る堅固にして然かも優勢なる敵に逆襲せられ再び舊位置に退却するの止むを得ざるに至れり。

●情況斯の如くにして彼我の進退は自暮と共に自然に中止せられたり但敵の砲兵の一部は午後九時、まて時々我に向ひ搜射せり右翼部隊の司令官は軍司令官の意圖を實行するため遂に夜襲を行ふの決心を取り軍司令官は此處置を是認せしを以て右翼部隊の司令官は午後十時頃より其歩兵の大部を擧げて断然之を決行せり該部隊の歩兵は猛烈として勇進し太平嶺附近の堅固なる敵陣地に突入し遂に其第一堡壘を奪取し多数の損害を蒙りたるに拘らず更に勇を鼓して第二堡壘に突進して之を占領せり時に二十五日午前三時なりき。

●右翼部隊に隣接せる諸部隊も亦之に續き山西頭附近の高地を占領す。

●翌天明と共に臥龍崗附近に在る我砲兵は先づ當面の敵に向ひ砲撃を開始せり然るに敵情前日と異なるを以て臥龍崗附近に在りし部隊は直に前進して青石山を占領す左翼部隊は石の情況を知るや前進して牛心山、橋梁の線を占領せり。

●騎兵は左側にありて行動し騎砲兵を有する優勢なる敵騎に對して能く我側背を援護せり。

●敵の主力は大石橋街連より一部は其東方より海城方向に退却し其後尾は我砲撃を受けつゝ午前十一

時過大石橋を通過せり軍は各連隊の先頭部隊を以て之を追撃し次で大石橋及び其附近を占領せり

### 敵の兵力

我に對せし敵は第一、第二、第九、第三十五師團及び西伯利豫備師團に属する部隊にして其砲数は約百二十門なるか如し

### 敵の死傷

捕虜將校の言によれば滿洲軍總督「クロボトキン」も戰場にあり而して「サマロン」中將、「ロンドラウイッチ」少將 負傷せりと又諸情報を綜合すれば敵の死傷は少なくとも二千を下らず我死傷將校以下千名内外なり戦利品及び捕虜若干取調中なり

### 四、敵の退却

敵は我追撃の爲め頗る狼狽を極めて退却せり察するに敵は青石山附近の陣地を堅固に占領し此に決戦を爲さんと企てたるものゝ如し然るに夜半に軍に軍に退却を決定したるの形跡あり其原因は我軍の強襲により彼の左翼守を失ひしかためなるか如し

### 五、敵敗走後の情況

二十六日敵は尙ほ虎樟屯附近に位置し歩兵約二中隊は同地東方金山嶺に現れ後述の如く砲撃せり

り軍は敵情の偵察中なり

### 六、營口の守備

二十八日午後大本營報告

蓋平、海城街道上老樟屯附近の敵は退却し二十七日温家溝附近には約六中隊の敵騎、東楊樹溝附近には歩騎兵一中隊を有する騎兵部隊あるのみ又營口方面より退却したる敵兵は紅瓦寨附近に停止したるものゝ如し

より派遣せる營口守備隊は二十六日夜該地に到着し先きに同地を占領せる我騎兵と交代し市内にりて警備に任す

### 七、敵の蠻行

二十八日午前大本營報告

大石橋附近の戦闘に於ても敵は蠻行を極め就中廿四日青石山東南の戦闘に於て午後九時山西頭北方高地に向ひ突撃したる歩兵某聯隊の一部隊は格闘の結果一時其陣地を離れたるに際し敵は我戦死者の左眼を抉り門齒二枚を碎き其眼腔に土を充實し又口の内に石及び布片を填實したる者各々一名あり

### 八、我軍の死傷

三十日大本營報告

大石橋の戦

▲戦死者 砲兵少佐石川嘉三郎○歩兵大尉横山富三郎○歩兵大尉坂戸直吉○歩兵大尉永井成太郎○砲兵大尉井上勝○砲兵大尉森秀吉○歩兵中尉吉元朝吉○豫備歩兵中尉小河義夫○歩兵少尉近藤信治○歩兵少尉久吉道雄○歩兵特務曹長熊谷貞一郎

▲重傷者 歩兵少佐千秋勲○歩兵大尉中村恒太○砲兵大尉岩井齊一郎○歩兵中尉豊永信次郎○歩兵中尉吉澤美代作○砲兵中尉國川完吾○砲兵中尉三宅守形○砲兵中尉前田實○歩兵少尉油田堅之助○歩兵少尉中井武三○歩兵少尉窪津義雄○歩兵少尉折田有偏○砲兵少尉名倉定貞○砲兵少尉吉見隆治○三等主計香村英太郎○砲兵特務曹長川上犬岸

▲輕傷者 砲兵少佐竹内順次○砲兵少佐川瀬房四○歩兵大尉田中光義○歩兵大尉益滿竹之助○砲兵大尉谷口重紀○砲兵大尉川尻露太郎○一等軍醫坂本静一○歩兵中尉二神義治○歩兵中尉松岡喜作○歩兵中尉原部暢義○歩兵中尉猪村晴次郎○砲兵中尉久保田鐵藏○砲兵中尉大田和三郎○砲兵中尉兩角豊○歩兵少尉川本常盤○歩兵少尉高田麻太郎○歩兵少尉武井敏之助○歩兵少尉早川亮一○砲兵少尉大迫新吉○砲兵少尉黒江敬吉○砲兵少尉池田正○三等軍醫河野慶輝○歩兵特務曹長加川寅次郎○工兵特務曹長布施昇

▲微傷者 砲兵中尉阿部保太郎○砲兵中尉井上九郎○砲兵中尉曾野宗四郎(？)○歩兵少尉藤岡録三郎○砲兵少尉公文初次郎○砲兵少尉三浦源太郎○歩兵特務長佐野源衛門

以上五十九名にして下士卒の戦死百三十六名、傷者八百四十八名合計一千七十七なり

### 第廿一章 浦鹽艦隊日本外海の暴行

津輕海峡を経て惠山沖に徘徊す

(三)

廿一日午前四時廿分大木特務曹長津輕海峡東北沿岸

(二)

廿一日午前四時四十分大木特務曹長津輕海峡東北沿岸

(一)

廿一日午前六時五十五分函館

(四)

廿一日午前八時大本特務曹長

(五)

廿一日午前七時二十分北海道

只今函館入港の有川丸外九隻の汽船船長の報に露艦三隻陸奥大間沖に遊弋し居れり我水雷艇三隻出港す

(六)

只今露艦尻屋崎にて横濱より函館に来る定期船らしきものを圍みつゝありと露首陸軍見張より司令部へ電報あり

(七)

廿一日午前十一時廿二分北海道

(八)

第廿一章 浦鹽艦隊日本外海の暴行

霧艦惠山沖にて汽船一隻を捕獲し東に向て逃ると龜田郡磯首燈臺より電報ありたり

(八)

二十日國館午後時五分發大本營

敵艦三隻南東に向ひ惠山岬の南東約二十海里の所に至り其影を失ふ

(九)

二十二日午前大本營電報手照會報告

只今歸りたる鯉漁者の談に依れば縣下閉伊郡山田港より約四十里沖合にて廿一日午前七時頃四本煙突の軍艦一隻三本煙突の軍艦一隻二本煙突の軍艦一隻南方に航行するを認めたるも霧のため灰色等は明ならざりしと

### 二、敵艦南行す

(一)

廿三日午前七時五分發大本營電報手照會報告

磯濱町鵜下友五郎の所有鯉船出漁中廿二日廿時平磯の沖合約八十海里の處にて三本煙筒(水夫中四本と見たるものあり)三本マスト二隻二本煙筒二本マスト一隻何れも黒船體國旗不明の軍艦らしきもの南進するを約一里の距離より認め尙ほ其時間前後に於て他にも之を見たる漁船三隻あり又廿日午後一時磯濱沖合八十海里の處にて一本煙突二本マスト黒色の船一隻北に向つて進行するを約八海里の距離にて認めたる漁船あり但し國旗不明との旨湊分署より報告ありたり

(二)

廿三日午前七時四十五分發電報手照會報告

昨二十二日午前九時常陸川尻沖六十里内外露艦三隻(長さ百五十間位と認め)四本煙突を先に他二隻は不明漸次南下せりと當地根本啓助所有漁船外各船認め今歸れり不取敢報告す

(三)

二十三日午前九時發電報手照會報告

今朝歸港したる漁船に依り左の通報告す

四本煙突二艘、三本煙突一艘昨午前十時頃當沖合五里位の處にて南方に向け航行するを認めたり

(四)

二十三日午後大本營報告

浦賀よりの報告に依れば本日午前十時半頃房総半島東岸方向に砲聲を聞く

### 三、下田沖の商船を捕獲し又撃沈す

(一)

二十四日午前大本營電報伊豆南岸發

二十四日午前七時五十分伊豆國石室崎の南西約三十海里の沖合に浦艦艦隊と認めらるもの三隻商船一隻を率ゐる東航しつゝあり軍艦は三橋四煙突二隻三橋三煙突一隻商船は二橋一煙突のものなり

(三)

二十四日午前九時頃伊豆南岸の沖合にて二橋一煙突の商船一隻撃沈せられ敵は其後針路を西方に轉じ伊豆國石室崎の南西約四十海里の處に於て十時卅分頃三隻共其影を没せり沖合少しく煙霧ありと

### 四、敵艦逆行す

二十五年午後一時半頃敵艦を撃つへとの三隻燈火を滅し神子元島沖約五海里の沖を東に向へるを漁船認めたり

二十五日午前大本營電伊豆兩岸

(三)

二十五日午後大本營電千葉特設

二十五日午後二時二十分露艦三隻夷隅郡浪花村沖合八海里に於て東に向ひ進行中なり

(三)

廿八日午後十一時五十分大島島司發  
廿九日午前一時三十五分發

岡田村捕鯨船漁夫の言に依れば本日(二十八日)午前十一時頃房州と本島との間に於て房州より約十二海里南方の海面に軍艦三隻徐々南行するを見る續いて午後零時二十分頃砲聲一を聞けり又岡村にて午後三時十五分より同二十分迄の間に於て直東約三十海里に當り砲聲三發同午後三時三十八分二發を聞く又午後四時二十分より二十七分迄に砲聲三發、同四時五十分より五時四十分迄に八發を聞く但し追々距離遠さかれるか如し又野増村に於て午後三時頃より六時頃までの間北方に方り砲聲らしき音響を聞く

(四)

三十日午後一時十分露艦下馬島敷離所發東京水陸

露艦三隻此沖合近く見ゆ

(五)

同日午後三時四十分露艦東京海上保險會社發

露艦三隻唯今津輕海峽より来る右取敢へず報告す

(六)

函館敷設隊司令其他諸方面よりの報告によれば浦鹽艦隊三隻は昨三十日午後一時頃より六時頃迄の間に津輕海峽を東より西に通過したり

## 第二十一章 橋木城の占領 (七月三十日)

### 第一節 橋木城の占領

八月二日午前大本營電橋木城及野軍報告

軍の前面に在る敵は紅蜜嶺北方高地より章三峪を経て三角山東方高地に亘り堅固なる防禦工事をしてし紅蜜嶺南方高地には砲兵肩堀を見る又老達子附近には約三大隊の敵兵あり

軍は此敵に對し去る七月三十日主力を以て大房身西方高地より下八岔溝北方高地に亘る線を、左翼隊を以て賈家堡子南方高地より英落山西南方高地に亘る線を占領せり

翌三十一日拂曉、軍は主力を以て三角山東方高地の敵に向ひ左翼隊を以て東西楊樹溝北方高地の敵に向ひ攻撃を開始し左翼隊は午前八時頃東楊樹溝東北方標高三百四十四米突以て一帯の敵陣地を攻略せり然るに二道溝方面に在りては敵益々其兵力を増加し其他共約二十門に増加せしむ我左翼

敵は新に來着せる一支隊と協力し猛烈なる砲戰の後之を攻撃し午後三時の頃遂に之を北方に驅逐せり  
 軍の主力は午前十一時三十分頃大平嶺西方高地の敵陣地を攻略するを得たるも章三峪及小房身東方  
 高地に在る敵砲兵より猛烈なる射撃を受け前進を繼續する能はず其後敵は漸次新銳の兵力を増加し  
 午後五時半頃に至り全線攻撃に轉し來れり我歩砲兵直に之を擊退し敵に多大の損害を與へしも敵砲  
 の猛射の爲め驅退する能はず遂に近く相接して夜を徹せり  
 是より先我左翼隊は敵を擊退し其退路に迫りしを以て敵は夜暗を利用し逐次其陣地を撤し海城方向  
 に退却せり

敵は數箇月を費して築造せる堅固なる防禦陣地に據り特に速射野砲を猛射し我砲兵を苦め大に攻撃  
 に困難を感せしめたり  
 我軍の死傷約四百名にして敵は死體約百五十を戰場に遺し退却せり  
 我に對せし敵は歩兵約二師團砲兵約七中隊なるか如く而して中將アンキセーン(步兵第五師團長)之  
 を統率せり由獲品野砲六門捕獲若干  
 此日炎熱酷しく正午室外華氏百二十度に上る

敵の蠻行

樺木城附近戰團の敵の爲たる殘虐なる行爲を擧ぐれば左の如し

七月三十一日午後六時頃大平嶺附近の戰團に於て某隊は優勢なる敵の逆襲を受けたり敵の此攻撃前  
 進中同隊歩兵一等卒山平光太郎は右背部貫通銃創を受け地上に仆れ居たり然るに敵の將校一名、兵  
 卒二名は同人の存在を目撃し兵卒は先づ銃剣を以て同人の左腰部を刺せり續て將校は同人苦痛の状  
 を見て愉快に堪へざる如く微笑しつゝ自ら刀を以て同人の胸部を刺し其人事不省に陥りたるを見て  
 他所に去れり  
 又同戰團に於て同隊二等卒稻岡柳平は敵と白兵戰を交へ頭部に切創を受け太平嶺東方谷間に墜落し  
 殆ど人事不省に陥り谷底に伏臥せしに敵兵二名追及し來り同人の背部を銃剣を以て刺したり  
 又同戰團に於て同隊二等卒小谷千造は右頭頂部に砲創を帯び太平嶺西方谷間に墜落せしが同谷底に  
 は彼我の死傷者相混して瘞れたり此際敵の將校二名、兵卒十數名を引率し敵軍の死傷者を收拾する  
 ために同谷地に降下し我軍の死傷者を見れば必ず靴を以て其脚部を蹴り其傷者にして尙ほ苦惱煩悶  
 する者を見れば拳銃を以て射撃するを目撃せり  
 同人も其右大腿部を蹴られたるを以て「何をすると叫ひしに將校二名はさも面白氣に語り合ひつゝ  
 一名は拳銃を發射し一名は刀を以て同人を刺せり之かため同人は右上膊に盲管創、右胛肩部に刺創  
 を受け其人事不省に陥れるを見て他に去れり

死者三名の傷者は我兵再増加し敵を駆逐せる後之を收容し野戦病院にて治療中各人の自白  
て右の事實を確めたり

### 彼我の死傷と戦利品

八月四日大本營發給木城攻撃軍報告

七月三十一日折木城附近の戦闘後山谷間に於て敵の委棄せる屍體約七百を發見し其内將校の死體は  
特に禮を厚ふして之を葬れり捕虜及土人の言に依れば戦闘間及三十一日夜に於て敵の後送せし死傷  
者は頗る多大なるものゝ如し此戦に於ける敵の全死傷者は二千を下らざるへし

我死傷は將校以下八百六十名にして其詳細は左の如し

▲戦死者 歩兵大尉富山辰雄○歩兵大尉藤原秀二○歩兵中尉野中一郎○歩兵少尉松崎省四郎○歩兵  
少尉吹野彦輔○歩兵少尉矢田善男○歩兵少尉上野美文○歩兵少尉木村政次郎 計八人 下士以下  
百八十六人

▲負傷者 (輕)歩兵少佐和田音五郎○(微)歩兵大尉又森信吉○(重)歩兵大尉菅丈夫○(輕)歩兵大尉  
坪井善藏○(輕)砲兵大尉藤田嘉平○(同)歩兵中尉今田莊一○(同)歩兵中尉三宅碩吾(篤夫?)○  
(重)歩兵中尉難波大吉○歩兵中尉城魏○(輕)砲兵中尉赤座勇藏○(輕)歩兵少尉菰口巖○同歩兵少  
尉立川良吉○(同)歩兵少尉大森虎藏○(同)歩兵少尉甲直衛○(重)歩兵少尉遠藤薫松○(同)歩兵少  
尉川岸清造○(同)歩兵少尉笠原默治○歩兵少尉港喜平○歩兵少尉岸邦太郎○(輕)砲兵少尉大江亮  
一○歩兵特務曹長井尻順三○(重)歩兵特務曹長田坂竹之進○(輕)歩兵特務曹長田中亮次郎○(同)

砲兵特務曹長竹林直哉○計三十四人 下士以下六百四十二人

鹵獲品野砲六門、砲彈五百七十、小銃六十三、彈藥九百八十、土土具百八十、麥粉八百九十石、大麥五百  
石、外套百三十にして其他は取調中

捕虜は下士以下三十三名にして尙ほ増加の見込みなり

戦場に残留せし敵の救護員は書翰を附し海城へ送還せり

### 第二節 榆樹林子及様子嶺附近の占領

(七月卅一日) 第一軍 (八月一日)

八月二日午前大本營發給黒木大將報告

軍は榆樹林子及様子嶺附近を堅固に占領せる敵に對し三十一日拂曉より此兩方面に向ひ攻撃運動を  
開始せり

榆樹林子方面の攻撃運動は同日黄昏前までに豫定の如く進捗し敵の兩翼を擊破したるも敵の兵力強  
大にして其陣地堅固なりしたため夜に至るも之を擊攘するを得ず依て翌一日未明再び攻撃を開始し正  
午に至り漸く之を擊退して老鶴嶺(榆樹林子西方約二里半)に至るまで之を追撃せり

様子嶺方面の攻撃も漸次成功し三十一日午後一時過より塔灣及マクウメンザ方向より共に歩兵の攻  
撃前進に移り黄昏前に於て其陣地の大部を奪取せしも敵の一部は最も頑強に抵抗し夜に入るも退却  
せず各攻撃部隊は戦闘隊形を以て夜を徹し八月一日未明再び攻撃を開始し午前八時様子嶺附近一帯



の高地は全く我有に歸せり

戦闘の永く終結せざりしは左の條件に基因せり

- 一、地形險峻にして攻撃動作に不便なりしこと
  - 二、良好の砲兵陣地なく爲に威力を發揚し得ざりしこと
  - 三、百度以上の炎天にして軍隊の勞苦著しかりしこと我に對せし敵の様子嶺附近に在りしものは狙撃歩兵約二師團半、砲兵約四中隊にして湯河方面に退却せり又檜樹林子附近に在りしものは少くも二師團及之に属する砲兵にして其大部は安平方面に退却せり
- 彼我の死傷は尙ほ取調中  
鹵獲野砲若干あるも未だ精確の報に接せず

### 同 詳 報

八月四日大本營電黒木大将報告

軍前面の敵は七月中頃以降漸次其兵力を増加し同下旬には四師團に達す尙陸續増加の模様あり然して初め遼陽街道上に在りし敵の主力は漸次安平方面に移動し七月二十八日以來右縦隊(檜樹林子)の前面に於ては敵の動作活氣を帯ひ其數縦隊より成る前進部隊は同師團の前面及左翼前二千乃至三千突に在る高地線を占領し將に攻勢を取らんとするの狀を示せり

軍は斷然攻勢を執り敵の準備未だ全からざるに先立て之を擊滅し以て其の企圖を挫折するに決せり此は決心に基き軍は急に七月三十日より運動を起し翌三十一日拂曉を期し右縦隊は檜樹林子方面の敵を左縦隊は榛子嶺附近の敵を攻撃し同縦隊より支隊を派遣し檜樹林子方面の敵の左側背に迫り以て左縦隊援を助せしむ

檜樹林子及榛子嶺附近一帯の地形は峻山と深谷とを以て相錯綜し攻撃運動頗る困難なり

敵は巧に地形を利用し諸所に強斷面の堡壘を設け且主要の地點には閉鎖堡を築て以て全く陰蔽して我を射撃し得る如く陣地を構成し堅固に之を占領せり

戦況左の如し

#### 一、檜樹林子方面

右縦隊は歩兵約三大隊を老母嶺附近に配置して本溪湖方面を警戒せしめ其他は更に二縦隊と爲り前進し其右翼隊は三十一日拂曉より敵の本陣地(檜樹林子西方高地線)の前方約二千米突の高地に在る敵の前進部隊を前面及側面より攻撃し激烈なる歩砲火を交へたる後午前八時五十分之を占領し爾後敵の本陣地に對して戦闘を持續し以て左翼隊の進出を待てり此間敵は數回逆襲し來りしも悉く之を撃退したり左翼隊は福嶺(張家堡子西南約二里)に於て敵の歩兵約二聯隊に出會し午前六時三十五分

左翼隊より塔子嶺を以て一支援隊は午前二時下馬塔を發して獨嶺に向ひ午前八時過よりテヨウバイレイ  
 (獨嶺の南約二千米突)を占領せる敵の歩兵約二大隊を擊退し之を追撃し右獨嶺方面に向ひ塔子嶺も獨嶺  
 方向より退却中なる敵の大縱隊(歩兵三聯隊、砲四門)の側面に進出し獨嶺隊の砲を先頭より後尾に  
 至るまで其通過間二百乃至千米突の距離より猛烈なる射撃を加へて大損害を與へ全て之を潰走せし  
 めたり爾後該支援隊は楡樹林子附近敵陣地の右翼に前進せんとせば地形險難のため未だ其目的を達  
 するに至らずして夜を徹せり八月一日拂曉より楡樹林子の敵退却を始む右翼隊は直に前進を起して  
 之を追撃し午前九時四十分ラゴウリンを占領せり左翼隊は敵の歩砲兵の退却中に在るを目撃せしも  
 地形に妨げられて之に薄るを得ず右翼隊と平行してラゴウリン南方の地區を占領せり  
 (増援支援隊は一口朝リービエ南方高地の敵を擊破し之を追撃して午後一時リービエ西方高地を占領せ  
 り)

二、様子嶺方面

塔子嶺方面より様子嶺に向ひて攻撃すへき左翼隊は其一部を以て三十一日午前二時半頃塔子嶺東方高地  
 に任りし敵の歩兵約二中隊を擊退して同高地を占領し其他は豫定の位置を占領せり獨り砲兵團は進  
 入路の構築豫定の如く進捗せず且つ地形險峻にして臂力を以て陣地に進入するの別途なく午前十二  
 時頃に至り辛うして陣地に就くを得たり但し其二中隊は拂曉前金家堡子附近に陣地を占領せり

左翼隊の左翼隊は其主力を以て三十一日拂曉マクウメンザ方向より攻撃を開始し其の分遣部隊は塔  
 子嶺の右側背に迂回するため險難の山地を數縱隊と爲りて前進せり

敵は様子嶺の鞍部及其附近の高地に砲兵約四中隊を現して巧に我砲兵を射撃せり其一砲臺(約四門)  
 は午前八時過我砲兵團の射撃に依り全く沈黙せしめらる然れども塔子嶺北方高地の凸角に在るものは  
 能く塔子嶺の高地を掃射せり左翼隊に属する砲兵隊は地形上僅に二十門を使用し得るに過ぎざるのみ  
 ならず距離過遠にして充分其威力を發揮する能はず之がため我正面攻撃は正午に至るも更に進捗せ  
 ず迂回隊は非常なる困苦を冒して山谷を跋渉し午前十一時頃テウジャブーザ西方三千米突の高地線  
 に達することを得たり

午後二時過より右翼隊に属する砲兵隊は塔子嶺及其北方地區に對して掃射を行ひ歩兵の一部は偵察の  
 ため前進せり此結果塔子嶺西北方三千米突の高地線上に潛みたる敵砲は忽ち我砲兵に向ひて猛烈を始  
 め爾後兩翼隊の方面共に再び激烈なる砲戦を開始せり午後四時過右翼隊の歩兵は塔子嶺附近より、左  
 翼隊の歩兵はマクウメンザ附近より敵の歩砲火を冒して攻撃前進に移り漸次様子嶺に向へり彼我の  
 小銃火戦は各方面に起り我砲兵は全力を盡して歩兵の前進を援助せしめ急峻なる斜面は著しく歩兵  
 の運動を困難ならしめ且つ敵は尤も頑強に防戦し遂に日没に至るも未だ全く敵線を奪取するを得ず  
 之がため各隊は戦闘隊形を以て夜を徹するの止むを得ざるに至れり

一日拂曉より左右兩翼隊は再び攻撃を開始し午前七時より八時の間に於て様子峯附近一帯の高地漸く我有に歸せり敵の死傷は詳ならざるも各方面を合して少くも二千以上なるへし我死傷は將校以下約九百名なり尙ほ詳細は取調中

敵の兵力は林子方向に在りては第十軍團長スルチエウスキ一の指揮する戦利歩兵第九師團の一旅團及第三十一、第三十五師團の主力砲兵約四中隊、様子峯方面に在りては「シペリー」第二軍團長ケルレルの指揮する狙撃第三、第六師團の全部、戦列歩兵第九師團の一旅團及砲兵約四中隊なるか如し我鹵獲は捕虜將校以下約百三十野砲二門其他小銃及被服類多數なり

三十一日午後敵の忠者輸送者は赤十字旗を翻し右縦隊に増援せる支隊の正面に來り其遺棄したる傷者收容に著手せり依て我は射撃を止め特に之を許せり戦闘の兩日共百度以上の炎熱加ふるに地形險難なりしを以て各軍隊の運動殊に困難を極めたり

### 我が死傷

八月二日午後大本營第一軍司令部報告

様子峯檜樹林子附近に於ける死傷者にして今迄に調査を終れるもの左の如し

- ▲戦死者 歩兵大尉三好竹三○全中尉白澤義見○全少尉清岡五明○砲兵中尉矢島正造○全少尉岩崎嘉資○全砲兵少尉黒澤政治
- ▲重傷者 歩兵少佐杉村勇次郎○全大尉高田豊樹○全中尉津森恒

- ▲輕傷者 歩兵大尉鈴木新之丞○全平尾熊藏○全貞包興一郎○全田原三之助○全大枝健介○砲兵大尉加島秀夫○砲兵中尉東郷吉四郎(右大腿軟部盲管銃創、左肩部盲管砲創)
- ▲戦死者 歩兵少尉上村治郎○歩兵少尉柳田又二郎○特務曹長野村彌一郎
- ▲戦傷者 砲兵大佐多田保房○歩兵少佐山岡金藏○歩兵少尉志賀剛一○全大尉手島半次○全大尉二子石官太郎○全中尉山本松雄○歩兵中尉梅村敏雄○歩兵中尉安部良夫○全中尉松井萬吉○全少尉綿貫六助○豫備歩兵少尉後藤一雄○隊備歩兵少尉古賀晋次郎○歩兵少尉岡村親○歩兵少尉田代院一郎○特務曹長日高直二 計將校四○下士以下九〇六

### 戦利品と俘虜並に屍體

四日午後大本營第一軍司令部報告

様子峯檜樹林子附近に於ける戦利品左の如し

砲二門、小銃五六百、天幕三四百、携帶器具六七百其他砲銃彈等多數

去る三十一日より一日に亘る様子峯及檜樹林子附近の戦闘に於て捕獲したる敵兵は左の如し

- ▲健康者 第二十一聯隊第四大隊長大尉ボルツイジョーフ△全大隊副官少尉ナスターウキン△全第十三中隊長大尉コプテノフ△第百二十二聯隊第二中隊長大尉クロバトフ△戦列第三十六聯隊第五中隊長大尉ガンスキー 外か三名(内一名中佐)下士卒百四十九人
- ▲負傷者 戦列第三十六聯隊第二大隊長中佐サワウリン△全第三十二聯隊少尉一人△第百二十大隊大尉一人 下士卒百十二人

進襲せし敵の屍體は將校六、下士卒五百六十なり

勅語黒木第一軍司令官へ下る

第一軍ハ嶺南ナル山地ニ在テ善ク各部隊ノ運動ヲ律シ嶺南林子及嶺子嶺附近ニ於ケル優勢ノ敵ヲ驅逐セリ  
殿後ヲ阻等ノ虞々敵艦ヲ焚スルヲ冀ス

黒木司令官の奉答

要領なる 勅語ヲ賜フ臣等恐懼措ク所ヲ知らず益々奮勵以テ 烈風に閉ひ奉らんことを期す願く奉答す

第三節 海城及牛莊の占領 (八月三日) 第二軍

四日大本營署與大將報告

昨日來敵は北方に退却を續行す軍は正午頃海城及牛莊を占領せり

同 詳 報

四日大本營署與大將報告

八月一日午前四時軍は大石橋附近の陣地線を發して前進す第二縱隊は敵の抵抗を受くることなく午前九時頃南尖山附近の陣地を占領し第一縱隊は午後一時當面の敵を攻撃して梁家堡子附近の高地を占領せり第三縱隊は午前五時金山嶺附近の高地を占領し前日來敵の占領せる土壘子東方高地に向ひ砲兵を以て偵察戰を試みしに敵は退却せるものゝ如し依て直に前進し午前九時半頃他山浦西北方面附近を占領せり此時敵の砲兵約二中隊葫蘆峪東北の高地に現れ第二縱隊及第三縱隊の歩兵に向ひ

盛に射撃す暫して第三縱隊の砲兵は黨家溝東北方高地に、第三縱隊の砲兵は温家溝附近は砲列を敷き之に應戰す午前十一時三十分別に敵の砲兵一中隊下夾河南端に現れ我第三縱隊の歩兵に向ひ射撃せしも孰も正午過陣地を撤し海城方向に退却せり

第四縱隊は途中少數の敵の歩騎兵を驅逐して午前十時頃第三縱隊の左翼より趙家屯に亘る線に達せり其前面には騎砲兵約一中隊を有する敵の騎兵五六中隊紅瓦寨附近に在りて我歩兵に向ひ若干の射撃を爲せしか正午頃海城方向に退却せり

第五縱隊は劉家堡子、連三屯に在る敵歩騎兵を擊退して該地を占領せり  
我に對せし敵の兵力は總計約一師團にして其主力は午前十時前後に於て虎王山西麓を経て海城方向に退却せり

一軍は斯の如く大なる敵の抵抗を受くることなく二日八里河の線に前進し翌三日正午頃海城より牛莊に亘る線を占領せり

此日海城より東北に向ひ退却せし敵は約二師團なり

第二十三章 旅順口の大激戰

敵艦自ら破壊す (八月二日)